続　独混第二六連隊比島の苦斗

井上　忠　著

まえがき

昭和五十四年の夏「小山内隊の戦線回顧」を発表し、生還者と中隊のご遺族等に送りましたが、その内容はサマール島における、小山内中隊行動を主にしたものです。

当時知る事の出来なかった他中隊の戦況こそ、高浪連隊苦斗の実態として、比島戦況を語るに相応しいと考えながらも、その戦場からの生還者は僅少、情報入手も困難と予測して、逡巡したものです。

しかし、ご遺族からの、お気持ちが伝わった事と、今日僅かでも書き残さなければ、比島戦線防衛の為に、生死をかけた苦斗の戦況と我が連隊名までが、遠い比島の山野に風化消失する事は誠に悲愁なことです。

今次大戦中最大の決戦場に、北満より派遣された若い兵士が、悪疫蔓延の山野に、空腹の体で挺身し「本土決戦期の遅滞」という、重要な新任務に就き、連隊長以下多数の将兵が戦没された、という戦況を記録出来るのは現在も生かされている生還者にのみ可能な事と、熟慮、発心して、生存者捜しに始まり、戦況の概要を書き残したいと、願望するものです。

内容

第一章　編成と分離
第二章　五木田大隊の戦斗
　第一節　大隊本部の北進
　第二節　孤島の程川中隊
　第三節　カプール島の野砲隊
　第四節　田沢中隊の戦斗
第三章　竹中大隊の戦斗
　第一節　マニラ東方へ
　第二節　振武山より転進
第四章　松本大隊の戦斗
　第一節　勤兵団北上
　第二節　撃兵団へ
　第三節　下見大隊に改編
第五章　回想集
　追録
　一、関東軍について
　二、高浪連隊長を思う
　三、五木田大隊長を思う
　四、慰霊祭
　五、附表、附図
あとがき

TOP へ　次へ

第一章　編成と分離

一　何処へ征く

昭和一九年七月独混第二六連隊が、チチハルで編成になる直前の事、近衛師団本部に勤務の高浪大佐は、北満の新設部隊長になる命をうけて、その準備に忙殺されていた。そこへ大本営の友人からある情報を聞いた。

「満州で近く編成される新部隊が内地に移動して、東京湾近くの防衛に当るというのがある。もしかしたら貴官はその部隊長になるかもしれない」しかし高浪大佐としては「そんな話はあてになるものか、俺は今日の重大な戦局を十分に認識し、自ら進んで戦斗部隊への転出を志願したのだ、中国戦線の体験からして「俺が行げば必ず戦斗は解決する」征くぞ」と強い信念をもって勇躍その壮途につかれた。その後内地防衛という任務の部隊が、大陸から千葉県に着いたが、それは高浪連隊ではなかった。

近衛師団司令部から、新任の部隊長が就任されるという情報がもれて、希望的観測が一方的に浸厚となり「俺達の部隊は近衛師団で内地に行けるぞ」というデマとなり、移動準備中に流れたのは余りにも偶然というべきか、それとも調子の良すぎる兵の私話であって、近衛師団でも海外派遣のある事を知らぬ愚かな妄想であった。

大本営では十九年七月二十目、満州の第九師団より独混第二十五連隊を編成し、同時に第五七師団を中心に独混第二六連隊を編成して台湾及び比島の防衛強化を決定していた。この両連隊が移動作戦を競うように釜山に着き、高浪連隊は門司を径由して、歩兵第一七連隊等と共に幸にも無事にルソン島に上陸したが、一方の家村連隊（独混第二五運様）は広島より急ぎボルネオ島に出発せよ、という移動命令の変更が起った。

二、ボルネオ行か

この年の五月比島にある南方軍が来るべき戦局を予測して、中央部に対し要請していた増強策があった。「比島防衛に十個師団の必要説」である、大本営はこれを認めて、七月二十九日比島の七個師団（十六、三〇、一〇〇、一〇二、一〇三、一〇五、二六）を増加するために、第八師団（杉）と戦車第二師団（撃）を送り、さらに四個旅団（五四、五五、五八、六一）の中の第五十八旅団（佐藤少将、主力三個大隊）を六個大隊に強化して新設の師団を創設し、此をレイテ島に送るという説まで出たようで、その充員としで新師団要員の高浪連様が無血上陸に成功した。新師団長の人選も計画されて（ビルマより久野村中将）いたようであるが、その船舶輸送作戦が全く不調となり加えて、米軍の比島方面反撃構想急なるに備え、比島肪衛の一部となったボルネオ島への増兵を急ぐ事となった。そこで高浪連隊と二宮大隊（独歩一八四、在ナガ）に対しボルネオ島行きの目的で、急ぎマニラ集合の命令を発した。

当特高浪連隊主力はりンガエン湾近くにおり、田沢中隊は十月一目、小山内中隊は三日ラブラドルに着いて、湾を一望に眺め得る山を中心にした新陣地に向っていた。十日には小山内隊長と同隊の樋口准尉が北満での豊かな経験を発揮して、**田沢中隊陣地構築の現地指導**をするという多忙な情況にあった。このときボルネオ作戦の命を受けて、スアルに駐屯の連隊長は十二日各大隊に対し「作命第八号」を下命し、陣地構築は中断となる。十三日移動を開始してマニラに向い、十六日マニラ競馬場に集合する事が出来た。

又、同地にあった松本大隊長は五八〇高地にてマニラ向け出発の移動命令を発令している。
＜方面軍作命第九九号に基き〇〇に向げ前進せんとす、まずマニラ埠頭へ＞
当時リンガエン湾南方スアル西方に着いていない第Ⅱ大隊（竹中）は十日北サン方面にて第五八旅団と共に警備していたが、転出の命を受けてマニラ競馬場へと急行した。

三、 南部ルソンへ

米軍はレイテ湾上陸を決行するに先立ち欺摘（ぎまん）作戦と思われるむので、且ルソン島からの増援部隊の移動を未然に防止する為の、先手攻撃を開始した。
即マニラ湾上の船舶と港湾施設を中心に一八日より猛爆撃を開始、米軍が二十日レイテ島に上陸後も航空軍の余力を以で、二十一日もこれを続行した。

マニラ湾の船拍に被害多く二十四日頃出発と計画されていたボルネ島往きは突如中止となり、ラグナ湖南方サンパプロに駐屯の第八師団（杉）本部に向かって移動する事となり、二十一日よりマニラを出発した。
＜市原小隊長日誌によればバタンガス方メインに移動予定とあり＞二十目はレイテ島に大兵力の米軍が上陸を決行した日であり、ルソン島各地の部隊が作戦転換の命令により、急遽移動準備を開始した。高浪連隊の南進は、ルソン島防衛の新配備画要所に、北満から増援部隊来たるとばかり、各地で歓迎をうけた。又前記の二宮大隊は東海岸のラモン湾方面へと転出した。

サンパブロに着いた高浪連隊の周辺は、当時まで駐屯の各部隊が浮足たった動静の中にあり、連隊はさらに南方へと移動を開始した。前報の加く小山内中隊の場合は、十月二十五日に到着し、馬受領の兵五名を本部に派遣し＜三十日＞、四日一時にサンパブロを出発した。五木田大隊はルソン島を離れて、サマール支隊となったが、同大隊の程川中隊をカプール島警備に派遣して、サマール島北西都のアレン地区に駐屯する事となった。

此の移動について、サマール島防衛部隊として既に着任していた歩兵第九連隊の金野第Ⅱ大隊長には、通知されていないと思われる、否知らすべき同連隊本部が、レイテ島東部で上陸の米軍を避撃する激斗の火中にあり、金野大隊もサマール島中部で孤立戦斗中であった。高浪連隊の竹中第 II 大隊はルソン島の南端に進み連隊本部と共に在り、松本第 III 大隊はナガ附近に駐屯という分割の布陣となり、その年も暮れんとする頃、第 III 大隊は、急ぎ北上の命を受けるという、軍旗なき連隊の宿命であろうか、

其の後も目まぐるしい移動の連日となり、さらに輸送船舶の不足による海上での遭難をも惹起(じゃっき)し、この大戦の天王山となった北島各地に於て、精魂を尽した大多数の将兵の御遺体を残す結果となった。

〔註〕

前報に重複するが、小山内中隊の移動概況は、七月二十五目新編成開始七月二十九目一二九三六部隊(独混第二六連隊)に転入七月三十目神武屯発　七月三十一目チチハル着　八月十三日チチハル発　八月一七目釜山着　八月二十一目同出航。門司、三池、馬公沖経由　九月八日北サンに主力上陸　十一月二十三日ソルソゴン湾出航、同日サマール島マオーに上陸。ルソン島に転出の船待の処空襲砲撃をうけ、三方より包囲されたマオー陣地を三月一日夜脱出。新陣地に向う途中で、垣兵団金野大隊と合流して九月十一目軍使と会う。

四、編成

連隊長	高浪　金治(戦死)	同副官	梅津　武夫(戦死)
第 I 大隊長	五木田　清只(戦死)	副官	井坂　信勝(戦死)
第一中隊長	小山内　裏二		
第二中隊長	程川　喜代治(戦死)		
第三中隊長	田沢　博		
IMG 中隊長	高橋　正事(戦死)		
第 II 大隊長	竹中　外吉(戦死)		
第五中隊長	加藤　直弥(戦死)		
第六中隊長	松田　吉勝		
第七中隊長	畠山　正雄(戦死)		
IIMG 中隊長	吉原　義則(戦死)		
第 III 大隊長	松本　直純(戦死)	副官	山谷　清(戦死)
第九中隊長	高橋　忠信		
第一〇中隊長	畠山　達夫(戦死)		
第一一中隊長	飯野大三郎(戦死)		
IIIMG 中隊長	米山　卓二(戦死)		
通信小隊長	内村　武夫(戦死)		
連隊砲中隊長	郡山　辰彦(戦死)		
速射砲中隊長	山本　実(戦死)		
工兵隊中隊長	藤本　五郎(戦死)		

この大部隊の編成と異動は極秘に実施され、神武屯の場合、近くの山に露営して陣地構築中の戦友も知らなかった程である。チチハルより高浪連隊が出発した後、約一ケ月遅れて軍馬十頭をつれ、連隊を追及した三〇名の小部隊がいた。獣務曹長の指揮する日沢隊の任務は、部隊幹部の乗馬を比島に輸送する事であるが、その出発が遅れる見込と、関係する輸送部隊の混乱する間に、支障が発生しては困ると判断した梅津副官は、輸送関係各隊に「人馬輸送に協力を」という連隊長の書類を作製し、これを渡して本隊と共に出発した。後発の日沢隊は人馬の海難事故もなく、比島に上陸して任務を果し、以後連隊本部と共に戦力となり活躍した。

《独混第二六連隊には在満の歩兵部隊に、日頃縁の淡い各部隊が配属されており、戦後厚生省名簿の中に記入の方でも「私は関係ありません」の返答がある程で、現地で編入されたと思われる将兵も含まれて居る。

ここに工兵隊を紹介すれば、その主力はハルピンの工兵隊で、ハイラルの第一八部隊や独立守備隊第四九〇部隊と以前奥七二三二部隊等から転属した者等が居て、全国各地出身者で構成されていた。大工、鍛冶屋の経験者だけでなく、多くの部隊から選抜された工兵最適の頑健な壮丁である。

一寸書きにくい事だが「実はあくたいもくたいの兵が多く、常に異様な活気が溢れており、気の弱い者にはとても恐しい中隊である」と元隊員が自認する程であるが、小銃、軽機、重機は勿論、大隊砲、機関砲、高射砲、速射砲、それに鉄道隊の出身者が含まれて、その操作に熟達しており、実戦斗では頼もしい万能選手を網羅した中隊で、未教育兵には「縄の結び方」等から厳しい基礎教育を行った。

バイカル丸に乗船、北サンに上陸マニラではへ(二十三目)田沢隊と会っている。アシンガン地区、スアル地区と落付く場を知らぬ移動の間、工兵隊員は大型建造物の作業に就き、猛烈な活躍を続けて、気候食糧の故か体力が劣えて伝染病となり、入院する者も出た。本部と共に南進の問鉄道の枕木補修等に従事し、再度北上の間にもゲリラによる妨害箇所が多く、その改修に従事して部隊の前進に活躍した。

〔註〕

1、工兵の本領は「作戦経過の全局に互り、其特有の技術的能力を発揮して、作業を実施し以て全軍戦捷の途を拓くにあり」と聞く。

2、本領よりわかり易いのは軍歌で、古めかしい事と思うが戦没の工兵隊員に供えたい。

一、道なき方に道をつけ敵の鉄道うちこわし
　雨と散りくる弾丸を身にあび乍ら橋かけて
　わが軍わたす工兵の功労何にかたとうべき
北満の桔梗の原を匍匐せり

阿部喜代太 (関特演編成時中隊長)
雪征かば雪積む屍大君の
辺にこそ死なめ
かえりみはせじ
北辺の防人

TOP へ 次へ

第二章 五木田大隊の戦斗

第一節 大隊本部の北進

一、サマール島出航

十九年十月二十日、レイテ島東海岸に面するタナウアンをほぼ中心にして、タクロバン近くの北サンホセよりドラグの間、約三〇キロに亘り、米軍は艦砲射撃と空爆によって、巾二キロ内の火砲人員を鎮圧し、約四個師団上陸という大規模作戦を決行した。その一部は隣接するサマール島南岸ラバスに上陸し、同地日本の守備隊を攻撃した。

それより約一ケ月後、マニラより南進した五木田大隊は、海峡を渡ってサマール島のアレン地区に駐屯したが、その兵力は二個中隊と重機一ケ中隊で、マオーの海岸には、配属野砲一門という小勢力であり乍らも、「サンベルナルジノ海峡の扼守（やくしゅ）という重要任務を拝命して、サマール支隊となった。大隊本部と小山内中隊が、ソルソゴン湾を出航する目的で、ニッパーの繁茂する海岸近くに接近した処、部隊の乗船を待っていた、秋田丸という船の近くには、米軍の飛行艇（下駄履という)が浮いて、ゲリラと連絡中という状況で、兵は戦況の不安を感知、いよいよ戦場だと覚悟を決めて乗船し、その夜は無気味な海峡を無事に渡って上陸、アレン地区の警備に就いた。

十二月五日頃サマール島北海岸には米比軍が上陸、アレン北方の陣を防戦しつつ田沢中隊と本部が、マオーに集結したのは二十二日頃である。（アレン南方約八キロのマオーはマオー川が南端にあり、マオー北方山裾を中心に陣地を築いた)二十年正月早々ルソン島の防衛計画に急変が起り、高浪連隊の移動が決定した。

「五木田大隊はサマール、カプール島、ダルビリ島警備の任を解き、輸送船を送るので、速かに出航し

て、ルソン島南部の野口兵団の指揮に入る事」と下命を受けて待つ事久しく、二隻の上陸用舟艇が到着したのは、一月十七目五時頃である。この二隻で四回の往復輸送が、当時としては可能な最良の移動計画となったが、陸海共に切迫した戦況下にあって全兵力の輸送がいつ無事に完了するのかは、全く予想もつかなかった。

《この第三次輸送にて乗船予定であった田沢中隊菊二小隊長(市原少尉:大阪市出身）は当時の輸送途中に於て、マオー川南方からの襲撃を防止する乗船援護の命により、既に南方より攻進したゲリラが、出没していた南山の陣地を確保して警戒していたが、ルソン島行移動が終了するまで、当分の間マオー周辺に残らねばならぬ事を覚悟すると共に、船舶を誘導してきた将校の情報からして、マニラ迄の乗船は不可能であり、且又南部ルソンのゲリラ活動も活発なりという説明もあり、ルソン島上陸後も行軍の苦労多しと推察していた》

その目の夕方二隻の内、甲船には大隊本部とMG中隊の原田小隊と患者が、乙船には田沢中隊主力の、第一次輸送船隊は・マオーを出航して海峡に向った。

その夜不幸にも風強く、予想外の悪天候となった。舟艇後方には荷をのせたバンカーを二、三隻曳航していたが、ロープを切って流出、船底の浅い本船は波にもまれて激しく揺れる、さらに乙船の機関故障が起り、太いロープを用いて、甲船がこれを曳くという救援作戦を実施したが、そのロープも切断した。

船底には水もたまり生きた心もなく、難破船同様二隻の船は隔れてしまい、曳航の無理がこたえたのか、甲船の機関も故障して海峡を渡る力を失い翌朝サマール島に漂流する、という無慙な結果となった。

連日の機関修理がようやく出来て、再度出航したのは二十一日の二十一時頃で、此の航海は無事にルソン島前味のマトノグ港に当着し上陸する事が出来た。マトノグは早くも平和な町ではなかった。空襲と米艦船の砲撃により、上陸用舟艇は破損焼失という最悪の悲運をうけた。何という事であろうかサマール島に渡った大発(秋田丸)同様に輸送後に焼失という不吉な記録を残す事となった。

二、レガスピーへ、

ルソン島南端の要所マトノグ地区の、防衛に就いていた連隊本部と第 II 大隊が、既にマニラに向って北上した後であり、一日も早く追及したい処であるが、サマール島とカプール島に残った中隊とそれに、どこへ漂流したのか連絡の全くとれない田沢中隊の安否も問題である。早急に代船を準備しなければ、大隊主力の輸送が出来ない、五木田大隊長は八方に連絡をとり、配船を依頼した。しかし近くの友軍に船舶はなく日毎に空襲も頻度が多く、ゲリラ活動も挑戦的で指揮官の苦悩を深くした。

世間には「親の心子知らず」の言葉があるも軍隊の上下には比較にならぬ強い絆の軍律があって、各

地に分散した各中隊としては、早期乗船によりルソン島に移動したい気持には同じものがあった。
しかし親である今の大隊長にしては、部下中隊の掌握が出来ないという悩みは、苛立に似た苦痛となり、歯軋りしたい気持であったろうが、一面好機到来の天運を待つより術がなかった。

《此の状況をかって五木田少佐と同期の陸士少尉候補一七期生であった宮前氏は、戦後の「いなき会報」にその心境を洞察し明記している「五木田君よ、君は幾夜も眠れなかった、食も喉を通らなかった。切歯其の身を震わせたであろう、指揮官として其の部隊を割かれては我身を刻むよりも酷である。老生熱涙を禁じ得ない」と》

昨年十月の末南進の途中に、サンパブロに於て、MG中隊と小山内中隊等から馬受領の者を下士官以下約二〇名を派遣した。当時の状況からして軍馬を受領し、本隊を追跡する事は不可能かと苦慮していた処に、十頭の馬(内日本馬二頭が残っていたが、兵の一部は連隊本部と共に北上した）をつれて年末よりマトノグに着きMGの者が待機して居た事はせめてもの慰めであった。

戦局の変化と配船不可能の情勢から、これ以上に滞在する余裕もない、島に残留の部下将兵の武運長久を祈って、マトノグを出発したのが二月十四日である。

イロシンでは、ゲリラの連日攻撃で手をやいていた小部隊を救出したが、道中夜間さらに強力なゲリラの待伏に会い、猛襲をうけて負傷者が出たばかりか、不運にも資材食糧等を載せた馬を放逐した。軍馬としての訓練不足の馬は、教育手腕に勝れた兵の手綱をも振り切って遁走した。中国大陸の野砲隊では、敵の急襲をうけて砲車を曳いた軍馬が兵と隔れたが、その夕方には馬が部隊に追及した、という美談があったと聞くも、そのような奇蹟は起らなかった。昼は空襲あり夜はゲリラの攻撃を反撃しつつ、先を急ぐ北進の間、ソルソゴン市では市街戦となり、学校に篭城の小部隊と邦人の救出に活躍した。この行軍の間戦没者十余名を出して、ダラガに着いたのは二十一日頃である。

野口兵団と共に北進の部隊本部は既にマニラ方面に移動して、その追及を敢行するには小部隊の兵力を、壊滅させる結果を覚悟しなければならない、レガスピー地区警備隊長の要請もあり同隊と共に米軍上陸時に邀撃(ようげき）戦斗に参加する事を決心して北上を断念した。

《ルソン島南部の地形はケソン州ルセナより細い半島となり、妖怪の尾の如く東南にのびて細い処はその巾十教キロ、ルセナ、レガレスピーの直線巨隔は二百五十キロ程であるが橋梁は各地で破壊されていた。 大隊長としては島に残した部下の事が気になる、自力脱出により北進する事あれば此の地で再会し、共に戦斗出来るその希望を待っておられたのではと推察される》

三、レガスピーの部隊

此の地区には十七年来、垣師団の一部が残敵とゲリラの討伐戦を繰返し駐屯していた。、日本人会がありその会員の中には比島攻略の初戦を飾った後に、日本の戦勝を信じて現地除隊をした者がいた。除隊後は軍に協力し駐屯部隊の御用商人として、必要物資を納入する筝の活動を続け、それはかっての満州国の如く、比島建国に向い希望に満ちた平和な日々であった。

二十年春この町には陸軍の石原基地大隊員約二百名が、最後の戦力として駐屯、それまでには杉山大隊約千名も駐屯していた。レガスピーのアルバイ兵舎の軍酒保を経営していた森下氏〔福井県)は垣部隊の現地除隊者の一人で、動兵団第一〇六六六部隊(香川県編成一の経理部に商品を納入する仕事も兼ねていた。兵舎の備品不足を補充する為に、軍の命令で兵一名と共にマニラに出張した。

商用が終り本隊に戻ろうとしたが、一月六日ドドバン駅近くの鉄橋が爆破され空襲も続いており、資材を輸送する事が困難と判断して引返し、購人物資を倉庫に返納、レガスビーに戻るべくアンチポロの黒宮支隊で状況を聞いた、処が「レガスヒーの部隊は既に出発して、北上中であるからここで待つのが良い」という訳で待機して本隊に会う事が出来た。出張の報告後聞いた事は「レガスビーの地方人は、男子一九才以上現地召集となり、富北日本人会長は通訳として軍に費用された」等で、早速この御用商人は再度軍服を着用する身となった。この部隊が杉山大隊であり、当時の情況を示す一例である。

又レガスピーには第一二陸軍病院の分院があって、十九年に閉鎖される事となる。後任はマニラの第六三兵站病院威七八六二部隊二半部(長中林中佐・・ナガ)の大隅中尉以下二十五名が、レガスピーに移動し患者約五百名の診療を行っていた。十二月には海軍部隊の乗った列車転覆が発生し、負傷者も増加し治療に当ったが、三月に病院は閉鎖している。

〔註〕

1、傷病兵の多い病院の移動は悲惨である。ナガで合流し、マニラに向う為東海岸を迂回して北進したが、カテグ山北方山中で中林隊長以下一七三名の隊員が終戦時一二名となった。2、レガスピーの町を説明するのに大切なものは、北方にマヨン火山(二四五〇米、ルソン富士)がそびえておることで、世界の三大円錐型山の中で最も均衡のとれた山として有名でもある。この山が不思議に異国人を迎える神秘性か、それとも敵を呼ぶ魔性を持つように思われてならない。一五二一年三月スペインのマジェランがセブ島に上陸以来、レガスビーには軍隊や宗教家の上陸が多くなり、スペイン人の初代総督がレガスピー卿でありこの山を目標に航海したのであろう。十六年十二月十二日未明には第三三連隊等が敵前上陸を決行し、今は米軍が二の地に重装備の大兵力を輸送して上陸を計画してしたのです。

四、ダラガ

五木田大隊本部が着いた頃、ダラガには海軍の第三五警備部隊が駐屯し、防戦準備と反撃の訓練に日夜活動していた。以前はレガスピーの町に駐屯していたが、レイテ島に米軍が上陸の頃、陽動作戦かそれとも部隊の出航を牽制する為なのか、B 二四の編隊による爆撃で飛行場を破壊した。海軍部隊では一三ミリ MG を発射して、これに反撃を決行したが、射程不足の故なのか戦果はなかった。その後補修の不充分な同飛行場に、友軍機約十機（冬服着用の由)が急援に着陸した。しかし不整地の為に、着地が乱れ機体を破損したのがあった。

戦況の変化により、市街地から南面のダラガ陣地に移動したもので、佐藤円四郎海軍中佐が他の小部隊を再編成して指揮をとり、約七百名の部隊となっていた。その年令は未教育の老兵というべきか妻子を残して応召された、入隊後日の浅い四十才前後の者と、年若い志願兵で、二十才にも満たぬ紅顔の青年達であり、中には十六才という通信兵もいた。

二月のある日佐藤隊長は樹陰に二百名余の隊員を集合させ「敵はレイテ島、北はリンガエン湾に上陸した。次にはこのレガスビーに上陸する事は必至である。今こそ御奉公の好機到来と思い、全員決死の覚悟をするように」という意味の訓示をされた。米軍上陸時に備えて、魚雷攻撃隊はその魚雷本体の上に、丸太を二本ロープで取付けて浮子となし、海中に押出し敵船艦に接近した処で狙いを定め、推進機を始動すると共にロープを切断するという正に決死的攻撃の訓練を、飛行場で反復実施していた、又震洋持攻隊(第一〇五石原隊・・マル四)の小部隊も極秘新兵器を海岸の壕に隠して、特攻の猛訓練を日夜続行していた。

五、米軍上陸

米軍機による偵察と攻撃準備は、十九年秋より活発になり、九月グラマン七機の初空襲の頃より住民は町から離れ、十月のレイテ上陸の頃より、敵機は自由に飛来していた。十一月小山内中隊がソルソゴンに向って南進の途中にも、そのトラックに向って機関砲を発射して来たが、港と飛行場を重点に爆撃を繰返していた。三月二十一日東方のアルバイ湾に浸入した米軍一五八連隊は、その護衛戦艦より連日艦砲射撃を続け、港と町を徹底的に破壊して上陸地点に接近した。

《湾内には敵船の侵入防止の為機雷が敷設されていたといわれるがレイテ湾上陸時と同様に処理して航行したと思われる》

四月一目の朝ダラガの陣地から眺めた海軍の兵は、湾内に新しい島が出来たのかと思うような黒い塊

を発見した。一寸の間に教え切れない上陸用舟艇と変化して、陸地に向って急速に進んで来る。

八時頃岸に着いた処で、船の前方が割れたようにパッと大きな口をあけて、**戦車を先頭に続々と無数の敵兵が、上陸するのを双眼鏡により認められ**て、河か悪い夢を見ているような強い恐怖を感じたという、その上陸は終日続いて、配備につくと早速友軍陣地に砲撃を開始してきた。海軍部隊の装備は貧弱というべきか、一式小銃すら全員になく、寄せ集めの小銃と、飛行機より取外したマンドリン型機関銃が、少数あるだけで、壕内に入って銃弾と砲撃をさける日課となった。初めは敵の弾着が余りにも正確に集中するので、日中は陣地から脱出し他の密林に隠れて居ると、砲弾は留守の陣地に炸裂しているのがわかる程である。

海軍部隊には幸にも少数のロケット砲弾があったが発射台がなくこれに代る土製の台を作りこれに砲弾をのせて、尻部の発火点をハンマーで打ち発砲し、敵陣に炸裂させる事が出来た。しかしその直後に敵砲弾の猛烈な集中反撃をうけた。敵はあせる事なく、己の安全を当然考慮したかのような牛歩前進によって、ぢりぢりと我陣地に接近し、我方は壕内にいても砲弾の炸裂により戦死者が続発する。砲撃による穴が一米間隔程に作られて、その砲弾の中には要塞用と思われるものか、それとも不発弾であるのか炸裂する事もなく地中深く穴を掘り、夜間はその深穴に足をとられる者が出る程その教が多くなった。

敵の接近により海軍部隊から斬込戦を決行したが、訓練の不足と夜間の照明弾が連発され、その間の銃.砲撃に妨害されて予期した戦果を揚げる事は出来なかった。

此等海軍部隊の戦況と隔れて共同作戦中の五木田大隊本部の陣は飛行場の近くにあり、少数乍ら海軍部隊の期待に恥じる事なく、重機・軽機を活用して防戦に必死の抵抗を続けて斬込隊も出たが敵は戦車を楯に手摺弾攻撃等をかけて来た。この侭ではダラガの第一線障地の壊滅が明らかとなり、九日の夜陣地の変更作戦をとる事となり、レガスビーの町後方を北に抜けてマヨン火山山麓のカマリグに脱出した。陸海軍共にその半数程の戦没者を出したが、この急造の陣地で火力の優劣な大部隊を九日間も支えた斗魂は、讃えられて良い。

此の防御戦斗の最中に「後続の陸軍大部隊が救援に来るから安心せよ」という激励情報も聞かれたが、その兆候は全くなかった。アルバイ造船所の沖所長とレガスピー食堂主の大石氏等は現地召集をうけて、この戦斗で戦死したと聞く。陸軍の石原部隊はやや西方の陣にて交戦した模様である。

六、カマリグ戦

九日の夜隠密に元厚地を脱出した将兵は、カマリグに向った約五時間程で、負傷者等は夜明けにも

移動を続けて敵砲撃をうけた者がいた(MG の佐藤兵長は十一日に着いた)町から山麓を登った処に以前駐屯の部隊が住民の力を動員して、構築したといわれる散兵壕や洞窟が完成しており、移動して来た将兵には直ぐに役立つ事にはなったが、ダラガや第一線から一夜にして消えた日本軍を追うようにして、米軍は再度戦車を先頭に新陣地の攻撃を開始して来た。

負傷者もおり半減した五木田大隊は再編成により防戦に敢斗する。戦没者が増加しても、夜毎悲壮な決意で斬込隊が敵陣に勇躍侵入しては戦場の華と散り、帰隊する事はなかった。

敵戦車はその騒音も軽く先頭になり山を登って来る。食糧も弾薬もなく、全線この兵を以て（陸海軍合計八０名程か)死力を尽して防戦したが、急坂を登る強力な戦車の銃砲に蹂躙(じゅうりん)されて、玉砕する事は時間の問題となった。しかし敵と相対して緊張の日々、将兵は一週間程食事らしいものを口に入れず、斗魂のみが生命を支えていた。

背のうも砲撃で飛散し、少数の銃弾と兵器を握るだけの姿となり、今夜か明日は俺の戦死の日だろうと覚悟を決めたという。海軍指揮官の申出によって防戦はこれまでとし、今夜は陣地を脱出しようと提案されたが五木田少佐は「舵は一人になっても斗う」と斗志益々堅く、同意しなかった。二十八日と思うが海軍の若い通信兵が伝令として本部の壕に入って驚いた事に生存者なく、数名の戦死者が倒れており佐藤隊長ではと思われる姿を見た。

五木田少佐は田沢中隊の部下を呼んで「皆良く斗ってくれた。此の戦場もこれまでだ、君はご苦労だがこの戦況を部隊本部に報告してくれ、部下と共に任務を果してくれ、これが最後の命令である、早速行ってくれ」と持っていた煙草を渡し一緒にすった後、部下と別れた。

《田沢中隊員はマオーを出発時乙船に集ったが一部の者が命令受領の為に甲船に乗り大隊本部と行動を共にしていた》

海軍の佐藤部隊長と陸軍の五木田大隊長の指揮する将兵は「海陸共に最後まで」の合言葉で士気旺盛な戦斗を続けたが、各隊長戦死という悲しい結果となった。しかしダラガ、カマリクと二陣地に於て約一ケ月の問、重装備の敵一個連隊を相手に抵抗の戦誌を残した。このレガスピーこそ、マヨンの美しい山容と共に末永く忘れてはならぬ土地である。

〔註]
(1)レガスピー地区には海軍第三五警備隊の他、航空隊、震洋持攻隊、魚雷艇等の兵と陸軍海上挺進基地第五大隊の一部が駐屯しており石原基地大隊長は転進中に戦死した。

(2) MG 隊衛生兵が伝令を兼ねていたが、大隊長の戦死を確認出来なかったという。しかし戦死の日が二十九日が正しい事がわかり、他文書による六日説をここに訂正します。
(3) 大隊副官後任の伊藤准尉(青森県)の戦死は二十九日カマリグである。大隊長が平賀曹長(岩手県)を再度呼ぴ、前記命令を出したのは夕五時頃である。
(4)平賀曹長はマニラに向い北進したが、終戦となり連隊長の戦死を聞いて概歎、戦後一方の五木田家にも報告すべく、その住所が不明の為東京の新聞社の協力を得て、ご遺族に戦況を報告している。

七、転進

レガスピー市を中心に約一ケ月、重装備の米軍により猛攻撃を受けて死斗を続けたが、各隊指揮官の戦死によってその組織は崩れた。陣地周辺の生存者は負傷兵を助けて少数の分隊を作り、日没後北へ向って転進する事になった。生きている喜びも湧かない、河か重苦しい陣地の撤退となった。 どこまで行けるのか、いつまで生きられるのかは全く予測出来ないが、生きられるだけ、否生きているだけ北進してみるのだ、という気持て出発した。敵の追撃を進ける距離まではと遮二無二歩き、気がついてみると地理不案内で友軍がどこに居るのか、どう進めばよいのか、それに空腹で食糧もない、多くの分隊は西北に進み密林に隠れて休息した。

《転進用の地図がある訳でない、マヨン火山を時計まわりに進んだ者と、途中で三三〇号線をバラヨン方向に向った者とがいる》

一息入れて出発、たよりになるのは北へ進めば何とかなるという気休めと、死んではならんぞの根性だけ、前方に待っているのは飢餓と病気、部落には武装ゲリラが待つ、戦斗をするか、それとも警寂の網目を縫うようにして、重い足を引摺るように、北に向って果知れぬ転進を続ける事になった。

ある海軍の、兵は陸軍の者十名程と西海岸に出た処で、海上の米艦に砲撃され近くの密林を逃げ二み、一人ぼっちになり北上の途中で老水兵と会い、二人で行動を共にし、ナガ近くまで進む事が出来た。或る夜彼は部落の人の大きな家に入った、処が寝床の下に銃のある事に気付出き、ゲリラ宿舎とわかったとき、しまったと思ったが小銃を構えて彼等を室の隅に追いやり、殺生する前に早く逃げる方法をと思案した。ナガーハサカ方の道路と思われる処に出た時、米軍衛生部隊のトラックが、走っており、その間隙に道路を横断し北に抜ける事が出来た。ナガに行けば野口兵団の一部と石原基地大隊の一部も居り、どうにかなると聞いていたのに、友軍の駐屯はないと予想されて、全身のカが抜けたように、落胆して行末に不安を感じた。

《五月二目小野田部隊イザログ山へ移動》

高橋 MG 中隊の者もパサカオ附近の北進には苦労したが、さらに北進を続けオンダグアの近くでは、どうも前方には危険が起りそうに思われて、東方に進路を替え山中に入った。此の附近の村娘は、飢えた日本兵を見ると「チャオチャオ、サービス」と言って呼びかけ、甘藷等を恵んでくれたが、気安く食べているとゲリラに包囲される、という例を数多く聞く。

山に入れば畠もなく、山賊生活に耐えない者には、病死か餓死が待っていた。正に飢餓の彷徨となり、友軍に救われる見込もなく、星座をたよりに夜路を歩いた。MG 隊の者は九月二十目ハコに着いた（位置が不明)という。前記レガスピーの衛生部隊はナガより西海岸を通り、カテグ山に侵入していたが、その附近に迷いこんだものと想定される。此の頃レガスピーから転進の軍中尉がおり、転進者の世話を積極的に行ってくれた。当時の生還者はあの山中を回顧するとき、親切な良き指導者であり、命の恩人と験える者も居る。

終戦を知ったとき陸軍の者で降伏するのはいやだと強硬に言いはる者もいた。自分の姿が痩せ細ってこの侭で何日生き得るか自覚していても、かつての敵軍に下るという恥辱(ちじょく)と次の不安もあり、突然に知った終戦に強い疑問を持った故であろう。この降伏反対論者も先任者の説明でようやく納得した。

陸軍の者は海軍中尉に、米軍との交渉を一任したが、この海軍中尉は「俺が○○時まで帰って来ない時は、皆は山中に入り退避する事」と言って、単身山を降りた。終戦処理の交渉から戻った中尉は米軍の食糧を土産に持っていた。語学は堪能であり聞く処によればハワイに生活の経験があるという。降伏後海岸に出るのに病弱の者は、日本企集の木材運搬用軌道馬車を利用する事が出来た。

日本企業の進出があった故か、親日住民も居たようで危害をうける事もなく、カタバガン(カタバンガン?)より乗船してマニラ着三十目、米軍収容所には十一月一日入所している。レガスピーよりカテグ山(高さ約五百米)までの直線距離は約一四〇キロ、山や野の道なき密林を歩いた距離は二倍か、三倍を越し敵中従断の辛苦は計り知れず、サマール島を出航以来戦斗と転進に耐えて、生きのびた敢斗禰神を讃えたい。

〔註〕

(1) 戦後、元 MG 隊佐藤繁雄氏に聞いた江之木海軍中尉に会うべく各地を捜してみたが、遂に会う事は出来なかった。五十五年岡山県護国神社にて海軍第三五警備隊の慰霊祭があり、元通信兵が遺族より聞いた話によれば、「中尉さんは広島の宇品の江之木さんじゃろう、おしい事に終戦後間もなく死亡されました」という悲しい訃音でした。

(2)五十五年に開発社発行の戦記「生還者の証言」によれば、カテグ山西方にて軍医大隅中尉が山中

で病気の処に、柚木海軍中尉が訪ねて来る。レガスビー病院で軍医が世語をした以来の再会で、元の患者に給食をうけて、回復したという挿話がある。二十四目に終戦を知り、二十七日に投降しているが、この柚木中尉こそ宇品出身の江之木中尉と思われる。

八、工兵隊北上

マトノグに駐屯の連隊本部が一月十日、マニラに向って移動するときに、配属工兵隊の一部(約一個少隊一を残して、五木田大隊と共に、本隊を追及するよう指示して出発した。

連隊本部と共に出発した工兵隊員の中にも少数の者が、イロシンの小学校で停止した。校舎の床下に壕を掘り、地区警備隊長(准尉)の指揮に入り警戒に就いていたが、ゲリラの活動が活発となってきた。二月十一日南の方に米軍の上陸かと思われる砲声も聞かれたが、その日校庭では紀元節の式典を実施中で、東方遥拝の直後、突然ゲリラより銃撃をうけて負傷者が出た。日頃より怪しいと注目していたニッパーハウスが、前方の河近くにあり、その夜これを爆破して溜飲を下げた。

翌日の朝八時頃、教会の鐘が「カン…カン…カン…」と静かに鳴り始めたが、急に強い連打に変ると共に学校を包囲した形で、一斉に銃撃を開始してきた。床下の壕より応戦したが、敵は銃撃を止めようとしない。近郷のゲリラが多数集合して、警備隊の壊滅を策してか終日の銃撃を続け、これに対抗して銃身が焼ける程防戦を続けた。二、三日も続いた戦斗中に、五木田大隊の百名程がイロシンに到着し、その尖兵の伝令が二名、川伝いに接近して来た。「打ちかたやめ」と友軍の射撃を中止した頃と思うが、全く予期しない事が突発した。

学校の裏山に壕を掘り、貯蔵してあった大量のダイナマイトに、銃弾によるものかどうか、不思議な事に引火して炸裂した。「ボッガァン」という大音響と共に学校が吹飛んだ。耳をつんざくとは正にこの事であろうか、耳鳴りが当分続いて頭痛、何も聞えない、土砂と塵埃によって息がつまる。（戦死傷者発生)友軍が驚いたと同様にゲリラもこれには肝を冷して退却した。

大隊長の到着にて警備隊はその指揮に入った。「私物を全部捨てろ、弾薬のみを持て」の命をうけイロシンを出発する。当時は馬もいたようである。（日本馬二、驢馬二、水牛二と思う)

何日か夜行軍を続けたある夜、先頭の MG 隊が破損した橋を渡り切った頃、道路右側の小高い丘から一斉に銃撃をうけた。直ちにその発射光を出す敵陣に向って射撃を開始、反撃を続けたがゲリラの計画的待伏攻撃は続く。隊員の中には全滅になるのではと思った者も居り、後に自分の小銃を見た処床尾板（木部）に弾痕があったという兵もいた。 この銃撃戦の間、兵が伏せて射撃の処に、軍刀を抜いて、

号令をかけている我大隊長の大声が聞こえた。「敵の弾が当るものか、撃て」「尖兵、山を占領せよ、前方の山に突撃、前進」闇夜に鉄砲という、どこへ飛んで来るか予測出来ぬ危険な戦斗中、一列に並んだ隊列のやや中央部で、軍刀を振る大隊長の度胸と今にも、おりしきの姿勢から、先頭に立って暗闇の中に飛出しそうな、その気魄には近くの兵が驚嘆した。

反撃の末、敵は攻撃を止め退散したので、ソルソゴンに向って前進した。ソルソゴンは大きな町で立派な教会があり、その教会に入る予定を変更して小学校に進み、邦人を収容してレガスピーに向った。

ダラガよりカマリグへと工兵隊員も小銃を握っての戦斗する、敵機の銃撃による重傷者も出た.カマリグ戦では工兵隊員も斬込戦に参加し、戦利品の信号弾を、何物かを知らずに点火した処が、米軍飛行機が、日本陣地に食糧と弾薬を投下して呉れたという事もあったが、連日の戦斗で死傷者が多数出た。

第二節　孤島の程川中隊

一、カプール島上陸

程川中隊は、神武屯に駐屯の奥七二三二部隊の第四中隊(編成時東海林隊)を基幹として、第一大隊にて編成されたもので、小山内中隊や高橋中隊と共に威風堂々、営門を通りチチハルに向って出発し、釜山で乗船してから南方行とわかった。

輸送船の名は天日丸(七、八〇〇屯、十八年製造、杉師団の秋田歩兵一七連隊と、同船)で甲板には門司港沖で積込まれた南瓜の山があり、兵は『カボチャ丸」と呼んでいた。神武屯を出るとき、小銃の負革や銃口蓋(真鍮製のキャップ)を返納した事から考えるとこの船が無事に航海出来るとは考えていないのであろう「いよいよ俺達は消耗品になるのだ、どうせ生きては帰れない」と覚悟を決めた者が多数居た。

このように不吉な想像を助ける女神が、此の世に住んで居られたのか、護衛艦の指揮官による航路決定の手腕が成功して、米軍潜水艦の接近はあったが、他の船団に作戦中の間隙を通過し得たと思われるように、無事ルソン島に上陸が出来た。魚雷による海没を今か今かと待つ不安に、連日連夜暗い気持の兵が上陸出来て、夢ではないかと互に喜び合う程、バシー海峡を無事に航海出来た事は幸運である。

《八月二十三日門司港出航、九月八日北サンに一部上陸した。これより前の七月十九日門司港を出航した「ミ一一船団」の二三隻は高雄で四隻が合流し、七月三十一日未明に攻撃され、大破又は撃沈されたものが二〇隻近く出る程。他の船団でも被害多く、八月だけで五〇隻を超す》

第一小隊（鈴木少尉)の場合、マニラ港埠頭に上陸して荷揚作業に就いた。米空軍の大編隊による空襲に出会って、ドラム缶が爆破する。バガンバガンとその物凄い音響と共にガソリンが燃える、海に吹飛ばされて泳いでいる者に火の海が走る、悲惨な戦場と一変したが、中隊員には死者なく港の整理にも出動した。

空襲三目日使役交替の者が、ある学校から空襲を見ていると、敵機は次々と急降下して爆撃を開始、友軍の高射砲弾が上空で炸裂するが、編隊までは射程距撃が不足の故か三機の墜落を見たのみ、港は大損害を責けた。

駅で勤務中の中隊員に、高射砲の不発弾が地上で破裂して、腹部を負傷した者が出た。急報の連絡を受けた小隊から兵が出て、野戦病院に入院させた。……後日退院した兵は、単身中隊を追ってカブール島に着き、よく帰隊したと賞讃されたが、後日傷部が因で薬もなく軍医不在の島で死亡した。その後小隊はマニラを出発して、リンガエン湾のスアルに着き中隊の指揮に入った。落つく間もない其の後の移動で第一大隊はマニラに移動して、ボルネオ島行の命により、乗船の待機中に、又も命令が再度変更された。

マニラより南進して、ナガに着いた処で、中隊に重大な新命令が下された。

「程州中隊はカプール島の警備に出発せよ」である。ルソン島南端とサマール島の間にあるサンベルナルディノ海峡の西口に浮ぶような小島の事である。ナガを出発に際し、この任務は重く且決死的な移動という訳で、日本酒の特配があり「恩賜の御酒」という事で、一同の胸に何か熱いものが走った。

早速ナガより西海岸に出て、パサカオ港より出航せよと命が出ており、乗船の準備を開始したが、海上は敵飛行機の来襲も多く、危険という情報により、陸路をさらに南進する事となった。ソルソゴン市を通り、半島先端のブルサン火山(一五五八米)の西側を通過してイロシンより西方(右)に曲って、ブーラン港に着いた。此の町は以前垣師団の第九連隊が、強力なゲリラの討伐戦を敢行した土地であったが、ゲリラの攻撃もなく後続のトラックを待った。

《野砲小隊と思われる》

甲板を疑装した船(SS 艇)に乗船してブーラン港を出航し、夕方より海峡を渡る予定で近くの河口に入り待避する。

出航の情報が洩れたのか敵機が飛来して、爆弾を投下、命中せずに附近の海面が泡状になる。きらに反転して銃撃する。甲板より高射砲を撃ったが、勇敢な名砲手は戦死した。

この河口には岸に突出した崖があり、天然の造形が船を疵護して具れたようだが、丁度その時、甲板

上では幹部が集合して海上輸送、特に上陸時の機敏な行動について、中隊長から指示をうけている最中で、コンソリデーテット機の急襲には肝を冷した。

一旦ブーラン港に戻り、船はダルビリ島を経由してカプール島に向った。ソルソゴン州から五木田大隊が転出するのに、船泊の都合とスパイ活動を惑す為に、一括出航をせずに分散させたのは賢明な計画と思われる。

《一中隊はソルソゴン湾よりサマール島へ、二中隊はブーランよりカブール島へ、三中隊はレガスピーよりサマール島へ各隊に海難なし》

輸送船は海峡を渡り、サマール島に近いダルピリ島に佐藤小隊を上陸させた。サン・アントニオ町に接岸する場所がなく、連絡下士官が先頭となって海に入り陸上を偵察の後に、上陸を開始して食糧弾薬を急ぎ荷揚した。暗い海岸での作戦であったが短時間に終了し、船はカプール島に向った。

町の住民より情報を人手すると共に早速高台に地下壕(二×四米)二個を連下士の指導下に構築して、その一個には食糧等を格納し、戦斗用の壕も作り非常事態に備えた。小学校に宿営して警備に就く間に、兵は其の床下に現地で製作されたと思われる日本軍の木銃を発見した。以前に日本軍が駐屯していたのか、さらに住民の中には日本軍の手榴弾操作法を知った者がおり、日本の歌(蛍の比等)を歌う者も居た。

一見親日的であるが何を考えているのか、皆目油断は出来ない。中央衛兵所の他に分哨を二ケ所に設置して、不意の襲撃に備えた。サマール島のマオーには大隊本部があり、海上約五キロをバンカーを操作して連絡がとられた。(連下士と兵一名が住民の服装で笠を用いたが潮流があり、往復に大汗をかいた)

数回の連絡で正月を迎えたが、マオーが攻撃をうけている時には「危険だ、あの南山にも故がおるぞ」と大隊長に叱られた後に「第一小隊に舟を出すから、カプール島の中隊に帰隊せよ」の命をうけこれを小隊長に報告した。

十九年末までに親しく接近していた住民も、なぜか島の南端ピラ方向に移動して、一寸無気味な情勢の中に出発の準備にかかった。

ゲリラの蜂起や、米軍の上陸のない内に木造船が来たのを幸に、急遽資材を積込み乗船した。短期間ではあるが、少数でダルピリ防衛の任務を完了した。

《ダルピリ島には、サマール島やレイテ島方面より武器弾薬を輸送して、攻撃の機会を狙っていた。という

情報がアレン町長より出ていた》
　サン・アントニオを出た船は、櫓を用いて島の南端を廻るように、夜明前西海岸(ダルピリ町近く)に着いた。

　小さな湾に投錨して、昼間は上陸し待避予定の作業中に、天運と言うべきか神風とも思われる東風が、スコールと共に吹き出してきた。船頭は「今なら追風で早く行ける」と言うので出発準備に切替て乗船した。
　帆を半分も揚げぬ間のあっという間に、快速の船は六キロ余のカブール海峡を横切って、カプール町の南方に着き上陸する事が出来た。

　積荷を上陸の間中隊本部に伝令を出し、荷運搬の応援を依頼したが、積荷を上陸出来た直後船は急ぎ逃げたので、後日の輸送計画に重大な支障となった。

　中隊本部から出た使役兵と共に積荷を移動して、カプール町の本隊に復帰し、民家に分宿した。
　これより先、ブーランを出航して、ダルピリ島に第一小隊を派遣した船は、急ぎカプールの西岸北方に着いたが、接岸するに波も荒く小舟に乗替えて、腰程の海中に入り上陸したが、胸までも濡れ乍らの作業で、弾薬食糧殊に海水で溶け易い品の荷揚には苦労した。

　中隊幹部が山に登り野砲隊と連絡をとり、翌日山を越えて東海岸のカプール町学校に宿営した。（上陸は十二月八日頃)

　此の島には以前第九連隊（垣六五五四)の一コ小隊が警備に就いた事があり、北方岬台には野砲中隊と海軍の通信分隊(十名程)が居た。町は戸数六〇戸程で、学校と教会が建てられており、中隊はニヶ所に分哨を置き警備の任に就いた。

二、転出命令

　一九年末までは敵機の直接攻撃もなく、ダルピリ海峡の上空を大型の敵機が北に向って、飛行するのを連目の様に見ていたが、此の島は米軍の作戦から無視されたと錯覚が起る程、比較的平和であったが反面戦況不明という悩もあった。

　正月四日ルソン島から高浪連隊長が突然に、巡視に来島されたが、新命令が入りこれは単なる視察ではなくなった。中隊長に対して、「中隊はマニラに向って移動せよ」という作戦命令の伝達となった。
　その夜第三小隊の主力は連隊長の船に便乗して、ルソン島に渡り、中隊長はルソン島への転出命令

を達成する為の準備を指示した。

予想もしない事が発生するのが戦場である。一八日未明東海岸中央部に友軍の船が漂流して、田沢中隊長以下八〇名程が上陸した、しかもその頃より敵機の往来が頻繁となった。カプール島は南北に二一粁、巾四粁程の小島で食糧の補充もなく、田沢中隊の上陸は食糧問題でも心配が増加した。

米軍のビサヤ地区に対する攻撃は積極的になり、サマール島の中央部にも新部隊が上陸し、サマール島北部とミンドロ島には年末に上陸しており、カプール島とマスバテ島には二月十八目頃と決定していたのか敵機はマオー、アレンを含む銃撃と旋回を日増しに多く実施した。

十八日敵爆撃機がレイテ島方面よりルソン島方面に飛去り、昼グラマン二機がマオー・カラボクを銃撃の後、カプール島北部を銃撃する。その頃南方の海上より快速艇がカプール町の近くを通った、これに同町南台の野砲二門が発砲した。不意の砲撃で船は速力を上げて北方に逃げたが、一四時三〇分頃幕度現われてダルビリ島間を南下した。

攻撃に必要な偵察が総て終ってか、翌日は大部隊で接近して来た。島の各陣地では早朝より爆音が激しく、船団が来る狙いの的がこの島でない事を祈った。併、此の日の戦況を対岸のマオー南山陣地より遠望した田沢中隊の市原小隊日誌によれば、…昼前になって南の海上レイテ方面に、白浪をかすかに発見、やがて敵艦続々姿を現わし、海一杯に白浪をあげて北上して来る、愈々敵来る。

併まだ何処に向うや彼の意図不明、念の為警戒区署で監視を続ける。艦艇やがてカプール島、ダルピリの間に入る。カプール島の部隊より撃ったらしく船も停止したらしいが、島の蔭になって良く見えず、間もなく戦斗機二機、続いてコンソリ重爆二、グラマン戦斗機四飛来し、忽ちカプール島に対し(爆撃は北方を重点)反復の銃撃。

昼過ぎから一六時三〇分頃迄島をなめ尽さんばかりに猛撃、(カプールの部隊手も足も出なくなったとみてか)艦挺島の間より出て北上す、其の数二〇数隻、アレン北方の岬を曲って見えなくなる。何れにしても近く何らかの情勢に変化あるべし…その夜南山の陣地を撤収す。

一方その日はマオー陣地にも異常が察知されて、船の機関音が聞こえて来る。陣地東方の高台に登って双眼鏡で見れば、カプール海峡を米軍輸送船団が北上し(艇遂艦一、高速艇五、大発級一七隻)カプール島に砲撃を開始した。

町の野砲陣地から反撃の発砲があり、船団の海面に立上る水柱は、その昔映画や絵にあったように勇

壮な戦斗ではあるが、残念にも命中弾を確認出来なかった。又北方岬に対する銃爆撃は執拗に繰返されて、灯台附近には堅固な秘密要塞でもあるのかと噂した。

輸送船を避難させる事もなく砲撃を続けた船団の目的は、カプール町への敵前上陸を敢行するのではないかと推測されたが、砲撃を中止して北方に移動したのを眺めた我々は、一時安堵した。

船と空からの攻撃という常套作戦によって、カプールの街は破壊されて後方の山陣地に移動したが、その間敵機の銃撃には木蔭に隠れ恰も稲穂にとまる稲子の様に、木の周囲をまわった。戦死者なく数名の負傷者が出た。

葉の夜米軍の約一ケ中隊が北方に上陸（約千名とも言う者があるが)して東海岸を進み、翌日よりカプール町に砲撃を開始した。程川中隊は夜襲を決行して敵を一時後退させ、米軍糧秣を取る事も出来たが、後退した陣地より連日砲撃を再開した。

三、カプール島脱出

高い山もない小島に非常事態がやって来た。分哨を撤去し山に登って防戦に就く。中隊長は幹部を集めて作戦を検討した。

友軍の船艇が来ないのなら、当方で小舟を集め満潮時に出航すれば、引潮にのって行けるという者が出た。潮流八ノットの海峡を渡る事は可能であろうか、米軍の攻撃を避け得るやと危険要因は数多く、安全の確率は僅少である。それにしても友軍の船は一体何故に来ないのかと、苛立つ心を鎮めては、待てよ此の身に何とか防戦する手段はないものか、島に残って草をかみ戦斗を続けても、敵は増強もあり我に砲も重機もない、所栓手持ちの銃弾も尽きて、玉砕となるだろう島を死守せよとの命令はない、兵力保持の為にも残る事を考えてはならぬ。

ルソン島への転出命令には絶対服従しなければ大義に反す、万難を覚悟で転出しなければならぬのだ。ルソン島に渡れば糧秣があり友軍も居る。大隊長は我々を対岸で待っているだろう、早く追及する為には躊躇してはならないと、人生最大の決断期を迎えた。

反趨する如く熟慮の問、関特演編成時に小隊長を任命されて以来三年余、訓練を共にした部下と共に早く渡るべしという、最終の決断を行い其の準備を命じた。

《即、バンカーと筏を用い、一旦ナラホス群島に渡り(西方約一五粁に桜貝の如き小舟六がある)大型船を徴発してブーランに渡れば、以後元来た陸上を北進出来る》

これより一寸前であろうか、もう一つ不快な難問があった。或部隊の兵で歩行困難にまで衰弱して回復見込の全くない、悪臭を発する伝染病の重い患者が二、三名、以前より隔離されていた。

島の戦斗や小舟で移動にも耐えず、主兵力が島を脱出後取残されて、敵の侵入時の事を考えると虐殺か捕虜になるであろう。戦陣訓に銘記された『生きて虜囚の辱(はずかしめ)を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿(なか)れ』の教えにより、彼等の名誉の為に早く処分する事が良いのでないか、という冷酷な意見も出たようであるが、**最終的に非常の場合は手榴弾により自決する事を、説明の伝達役を命じられた某下士官が、手榴弾を持って小屋に向った。**

愈出航の夜(二五日頃と思う)西海岸に出てバンカーを運び数名づつ分乗した。それまでの舟捜しも容易ではなかった。島住民の財産を隠密借用の指示でも、ゲリラの警戒と、巧に隠した小舟は見当らない。不足を筏作りで代用としたが、南方材はその比重が大で浮き具合が悪い。ローブ不足で不安定のものがあって補強の為上陸する者や、**装具を捨てる者等の混乱**が早くも発生した。

古参兵の中には小形の上陸用舟艇による渡河訓練や、又筏によるクリーク渡河の経験者もいたであろう、だが此島最悪の潮流難所を、未経験者が渡る事が可能だろうか、の心配を超越して生きるか死ぬかの瀬戸際に、命じられたら何でもやる軍隊の特性を発揮して、出発はしたものの、小舟と筏は複雑な潮流に翻弄(ほんろう)される結果となった。

四、カプール島に戻れ

指揮班の場合、中隊長と指揮班長、それに当番兵と書記の五名が乗った、指揮班には重要なものがある。第一は戦没者の納骨箱で、他に名簿と陣中日誌等があり、隊長の為にと中でも大型舟を融通したが五名は重い、沈む事なく沖に出ると波が飛沫となってバンカーに浸入する。まるで穴でもあるかの様に海水が溜る「水を掻き出せ」の号令で、兵は飯盒を取出して排水作業を開始した。

舟足も遅くこの侭では助かる者も全員駄目になるのではと判断した中隊長は、指揮班長と相談して一人舟から下す事を考えた。バンカーは既に百米も声より遠くなり、舟から兵を下すという事は、即ち海に入って泳げという事である。これが最後の離別となるかもしれぬが、他の者を救う為には止むを得ない手段となった。「この侭では全員駄目になる、N、お前はこれから泳いで島に戻れ、がんばって行け、生きるんだぞ」「ハイ」と返事し直に軍袴(ズボン)を脱ぎ、舟が動揺しないようにと船縁を握って海に入る。

この手を離せば隊長殿との別れであり、不幸にして人生の別れになるかもしれないという感傷を断って、

島方向に向い泳いだ。「がんばれよ」という声を聞き乍ら、どうも半袖の襦袢(シャツ)が泳ぎの邪魔になるが、**裸で死ぬとはどうも恰好が悪く、俺の良心が許さない、潮を横切るように泳ぐのであるから疲れ易い、必死の行動**である。海水が口に入る、こんなとき慌てたら駄目だと子供のとき誰が教えてくれたと思い出して、泳ぎを緩めると流される、とにかく頑張るだけだと已を励まして、無中で泳いだ。一時間余の力泳によって、浅瀬に立てた処より四這になって浜に上り、しばらくの間俯伏の侭呼吸の回復を待った。

或分隊の場合小屋の材木等を集めて筏を作り海に運搬した処、浮くのが精一杯それでも銃や背のうを積み、兵は筏に手をかけて泳いだ。分隊長等はバンカーで出発しており、遅れぬ様にと努力、潮に流されてか五・六〇米と離れる頃背のうや雑のうが海水に濡れて筏は沈み、行く末が心配になる。まるで海没船の遭難と同じでないか、友軍の救助船が来ない限り目的を達成する事は出来ない、島に帰ってやり直しを、古参兵は考えた。

「おいこれで良いのか」「駄目だ夜中に皆死んでまうぞ」「とにかく戻ろう、それ、泳げ」筏に分れて島に向い励まし合って泳ぎ着いたとき、疲れて誰もが無口で動かなかった。中の一人は、小銃を海中に下げて泳いだという、元気な兵がいたものだ。

第一小隊長の場合、数名の兵と共に出航したが、舟底より浸水して沈みかけ近くの舟に救を求めた。隊長は信頼する連下士の舟に乗替え、今度は安全と思ったのに小型舟に三名はどうも無理の様で、ダルビリ島、サマール島間の連絡で腕に自信の下士官が懸命に努力しても、遅い(近海の潮流には三本の筋がある由)巧に操従するのが中問にも進まず、僚舟は先航して見えぬそれに夜明が近い。これは無理と考えて連下士は、カプール島に戻る事を進言した。

隊長は「命令だから強行せよ」と反対したが、明日再度出発しますと言う提案と前方に銃声が聞こえるので、引返す事を命じた。此の銃声を浜辺で聞いた兵の中には、幽かに見えるライトの動きで快速艇に発見され銃撃をうけているのではと、安否が心配で出航者の無事を祈り、水際に放置された装具を拾い山に入った。翌日五人乗の舟を捜して乗航の直前に、散歩哨に発見されて近くより銃撃もあり、小隊長の出航は中断した。

〔註〕

1、此の夜出航の者は海上で哀しい最後を遂げたのではと、長い問考えていたが其の後の調査で、中隊長以下二四名がナラホス群島のマラゴト島(当時はモゴロモゴロ島と呼ぶ)に集合して、後日住民の船に乗替てブーラン港近くに上陸(三月一日の説あり)したが、ゲリラに包囲され銃撃をうけて分散、生還者三名を知るのみ。2、ルソン島へ渡る願望強き当時の潮流状態を知る為に、私は明石市の天文科学館を訪ねた、二月二五目は旧暦の一月十三日で大潮の日(日本より約一時間遅れて潮が動く)でしかも此

の海峡は此身最悪の急流を示す符号が記入されており驚いた。

五、隠忍の孤島

筏補修の為に不取敢山に入った者は、集団脱出の機会を失い、再度の計画の為に筏を隠して残留者の相談を行った。

約二〇名は居たようで、筏を補強して再度の脱出を決行して本隊を追うべし、という強気の者もいたが、この島から脱出の為に海峡を渡る事の困難性を体験した者の考えは、離島の前に此の島に残り、どれだけ生きられるかを当分続けるべきであるという胆を決めた。

部落や海岸に出る事は危険、島全体が珊瑚礁で猛烈に堅い。携行する小形の十字鍬ではとても洞窟を掘る事も出来ない。敵の動行をみて遊撃戦をやろうと、山奥に入った。早速夜間数名で食糧探しに出た処、**暗闇の中で怪しい人影**に出合う。吐嵯(とっさ)に必死の格斗となり、殴るしめるの大乱斗、相手も強い、「なんだこの野郎」という相手の声で、彼等が日本人である事がわかった。脱出作戦に失敗して上陸した他の一群の中から、同じ目的で食糧探しに来た事が判明した。

それにしても銃剣による攻撃でないので、双方に負傷者がなく何よりであった。彼等の説明によると、小舟も筏も潮流でどうにもならずに島に戻ったという同類の者である。

島に戻るべく泳いでいるうちに見失った者もあるようで、この島からの脱出が非常に困難である事を話してくれた。

彼等も約二〇名程居る様子で、生存者の居る事に安心したが、一団となって行動する事は危険で、食糧も無い事から別れて行動する事を話合った。「互にがんばろう」と別れて、独立行動をとる事になった。
昼間は米軍が日課のように迫撃砲を発射する、ゲリラの銃撃もある、大木の根本に隠れたり、竹薮の中に入ったりで、夜はその露営地を替える。食糧はない。小さな沢に隠れて水を呑み乍ら動けない日もあった。

歩哨を立てていても兵の衰弱した視力に勝るゲリラの行動が敏捷で、銃撃される事もあった。
敵は軍用犬らしいのを先導して、銃撃をしてくる、此の島には全く米がない、さつまいも、パパイヤ、それに椰子の実があるだけ。野草も試食した、或日小馬を捕獲して解体、その油脂を集めた処、何と十五立もあり、最高の恵と歓喜、貴重な保存食糧として分配し大切に携行した。

島東西方向の巾が約四キロで海岸が近いのにその警戒が厳しい。浜に出る事が危険で食塩の欠乏による体力の妻弱は哀れなものである。

牛を殺して肉を分配、水炊きや焼肉で空腹を満した処、長い菜食生活に衰弱した胃腸が変質したのか、仲よく下痢患者となる事もあった。その後は一度に食べる事なく、保存食に加工した、鶏が草薮にいたら捕えその生肉を食べて休んでいる処を、銃撃される等が日常生活で、敵は自動小銃で乱射する我方は単発の小銃と擲弾筒だが、これは密林で発射する事が出来ない、せめて重機があれば反撃出来るのにと無念に思い、その都度遮蔽するか転出しなければならなかった。

塩採りの危険を知り乍らも浜に向い、待伏せのゲリラに蕃刀や銃で襲われた者も居た。これ等活動出来る者は逐次減少して、伝染病となる者に薬もなく衰弱の為自決する者が出た。前記小隊長の一群は再度出航の作戦が敵に発見されて中止、山路を登る間に海軍兵二名と出合い、その前方に敵兵を認めた、手榴弾を握って攻撃に出た処逃げられ、一旦凹地に戻って警戒した。其の夜前方稜線に出ていた一群は銃撃をうけて偵察中の小隊長と共に南方に移動して、別行動となり五月末の夜、焚火の処を襲撃されたという。

二、三名で小分隊を作り行動したが、他の集団がどこに居るやら情報も無く、無事を祈る頃友軍のものと思われる銃声が聞えても、ゲリラも日本軍の銃声を待っているので、油断が出来なかった。七月頃より砲撃が少なくなって米軍の作戦に変化が起った。十月の或日銃声もなく静かな山に向って「オーイ日本軍はいないか」と呼ぶのを聞いて、二名の斥候が出された。

元垣部隊の将校が軍使として上陸「夕刻まで山から出て来る様」と伝達を聞いた。この島には将校不在で友軍の戦況も知らぬ、長い軍隊生活に終戦の言葉も知らぬ、戦勝の友軍が我等を救出に来るのではと考えて生きて来たのに、何という結末であろうか、直属上官でない将校の説明を信用して良いものか、とまで其の夜は話合い、結論として軍使に従う事に決定した。

里に出た一同は再度食糧を集め(軍使にも食糧なし)山中に残る戦友を捜したが、ここで小山内隊等の者がレイテ島に集合して居る事を聞いた。これより先何が待ちうけているかが不安、カプール町に集合して兵器を取りあげられて学校に入った。早速予期しない不思議な申入れがあった。住民は何を感違いしたのか、それとも終戦に興奮したのか「音案隊に続いて町を一巡してくれ」と言う。一寸体裁は悪いが元気な者がこの終戦記念パレードに参加した。

彼等住民が熱烈歓迎をした理由は、長い間婦女手を島外に疎開させた戦争の間、野盗と化したハポンゲリラが島に住むかぎり、一夜たりと安眠が出来なかった。しかし今日からは島に平和が来るぞ、万才と

いう訳で、日本流に考えれば旗行列に花火も打揚げたい気持と推測出来る処であるが、別に考えれば、これだけのハポンゲリラを降伏させたという、戦勝行列がもしれない。

世にも珍らしいこの祝賀行事は比島に数ある諸島の戦記に類を見ない事で、この行事を考えた町長が聖者なのか、許可した米軍大尉もこの現象の真意が理解出来たであろうか。

他の収容所で終戦時に、日本兵が聞かされた「ドロボー」「オールパタイ』等の罵声と投石が一つも起らなかったのは、サマール島のガマイと同様である、終戦時に悲しい隊長となったキャップテン、ホドカワの名を島民は伝承する事であろう。

十月二十九目全員が米軍の船に乗り、途中マスバテ島に上陸し、一部の者が同島の終戦処理に協力をするよう申入れがあった。

その島でゲリラの服を着た此島人の中に、ダルピリ島の分哨地に、接近しては親しく言葉をかけてくる住民の居る事を知り驚いた。

主力は船でレイテ島タクロバン第 2 収容所に入所した。(三〇日と思われる)其の中には長い杖をたよりに戦友のカを借りて、痩せ細った骸骨何様の者が居て、ズボンは破れ、其の足は健康な成人の腕程で、よくも生きて居たと他部隊生存者より激賞された。

同島に戦犯者はなく、早い者は十一月二四日に出航して名古屋に上陸した。併生還者にはカプール島脱出作戦以降を考えると、フィリッピンという国名を聞くのもつらい才月が長く続いた。

〔註〕

1、タクロバン収容所で発行された「レイテ島曙光新聞二一年二月二四日号」によれば、カプール島より四九名の救出に成功した…佐俣中尉・・の記事がある。

2、同中隊でバンカーによる出航者教は不詳、島に残った者七〇名で戦没一九名、海軍二名を含む五一名が生還といわれる。

3、カプール島より部隊長と共にルソン島に渡った一コ小隊の将兵はマニラ東方振武山の戦斗以来大半が戦没された。(生還者未確認)

第三節カプール島の野砲隊

一、灯台岬の野砲

一六師団の野砲兵第二二連隊(垣六五五八)はバターン半島と、コレヒドール島の攻撃作戦に活躍した後、一旦マニラ市に移動して、本部を極東大学校に置き、防衛隊の任に就いた。一八年になり、ルソン島南端に拡がるサンペルナンデイノ海峡に位置するカプール島が、海峡に於ける船舶の監視と敵艦攻

撃の要として、同島を要塞化する計画が出て、工兵隊による砲塁構築を実施した。

此の野砲陣地部隊として、師団砲兵隊より後藤佐武郎大尉（秋田県)指揮の一コ中隊を派遣する事を決定し、各中隊より抽出された将兵で編成された。軍医に代って古参の衛生曹長(九年次)を第III 大隊より、他大隊より衛生兵二名を加えた、野砲隊は一九年二月頃にレガスピー港を出航しカプール島に上陸し、北方岬の灯台上に監視哨を作り其の宿舎を本部とした。

近くに高射機関銃を据えて、トトノグ岬の先に砲二門と、後方丘上に二門を、工兵隊による掩体に据えて、敵艦邀撃（ようげき)の陣地が完成した。

海峡北方の彼方はルソン島南端に近接するカランクアン島まで六粁余であり、当時は誠に平穏なもので士気高揚と技術訓練の為に、海上の浮遊物に向って発砲演習を行い、二週間に一度の連絡船が糧秣等を運搬しており、島内治安の為隊長の指揮する島内巡察を、海岸線中心に二回実施したが、他の部隊も駐屯せず異常はなかった。

或月作業中の事故で手掌に重傷の兵が発生し、バンカーに乗せて海峡を渡りブーランに上陸して、車を借りてレガスピー病院に護送した事がある。当時はゲリラの襲撃にて或分哨が全滅という情報もあったが幸にして、患者輸送は成功した。

同隊には無線通信器(手動発電）があり定時交信を日に二回実施していたが、除々に不通のときも発生して離島部隊の悲哀を感じた。

六月頃内地編成の篠原中尉（平市出身)の中隊が着任し、下番の後藤大尉は原隊復帰の命を受けた。歩兵出身の兵も混成の篠原中隊には、砲の操作を懇切に申送りルソン島に渡った。《陸士出身の後藤大尉は原隊に帰り第 II 大隊（七五ミリ野砲)第四中隊長として、レイテ島ドラグの戦斗で米軍と交戦中十月二十一日壮烈な戦死をされた。一方衛生曹長は第 III 大隊(一〇一ミリ榴弾砲)に戻り、バレテ、カラングランの激戦に参加して、カガヤン河上流に移動し生還した》

後任の篠原中隊には松本市出身の青木少尉が居たが、其の主力は関東地方の者で、異色の隊員には七年次兵という京都出身の兵が居た。《現役当時は平壌の野砲第二六連隊で、一六年の召集で原隊に入り山砲隊としてニューギニヤに渡り、作戦中マラリヤ患者としてマニラに転送後、一九年に一〇五師団(勤野砲一〇六六三)の篠原中隊に転属して、カプール島に派近の猛者》

《カプール島には以前垣第九連隊の五中隊の者が守備に就いた事があり、同大隊附の三寺軍医がレガスピーを出航して、静かな島での任務が終り夕方島を去ったが洋上でエンジン火災という、大騒ぎに出合うという秘話がある。(日付不明）。又陣地構築の時に警備の為に三ケ月程任務に就いた者と、第九

連隊の暗号手で、サマール島のカタバロガンよりカプール島に約一ケ月派遣された兵がおり、当時の野砲中隊長は篠原中尉であった》。

二、野砲隊の戦斗

米空軍は灯台附近の陣地偵察後、猛爆撃を繰返し、その炸裂音はマオー陣地にも響いたが、陣地は壊滅し（一門は予備陣地に移動する)米国製の砲は自国の爆弾にて使用不能となり、死傷者が多く出た。

米軍の上陸により陣地後方山中に待避して数日後、小島での集団活動が困難と判断した隊長より「部隊は解散する」他の島に移動するも良いという訣別の命が出されて、各分隊毎少数の者が自衛自活の生活に入った。

京都出身の古参兵の場合は、砲兵一名と海軍二名と共に密林に入り、他の歩兵部隊と出会った事もあるが、ようやく入手した牛肉を携行して米をしの生活を、辛抱強く続けたが銃撃により若い砲兵が戦死、この侭では米比軍の捜査攻撃と食糧難から生命が保てない、海上への転出は危険だが、どうせ死ぬならルソン島に渡る事を相談した。

三名はバンカーを捜して(五人乗)住民の衣服に着替え夜間出航した、若い海軍兵の努力にも無情な潮流に、航行は遅く夜が明けた海峡に大型汽船も見えて、撃たれたらそれまでと覚悟したのに、銃撃もなくニッパーの茂るルソン島の浜に上陸した。八月頃と思われる。

山に入って食糧を捜す毎日であったが、山を登っている時ゲリラに急襲されて、長い蛮刀で足を切られ、どうする事も出来なかった。駐屯の米軍がレガスピーに移し、更にタクロバンの病院に入院した、ルソン島で通訳の台湾人は「生きて返れ」と励ましてくれたが、海軍兵とカプールの戦友に就ては不明である。

三、カプール町の野砲隊

一九年末五木田大隊がサマール島西北のマオー、アレンに駐屯の時、カプール島には程川中隊を派遣したが、同時に野砲の一コ小隊が配属されて程川中隊の防衛陣地を強化した。

灯台岬の砲台を北砲台とすれば、南砲台と称すべきであり、偶然にも野砲両隊長は同姓である。五木田大隊とは不思議な奇縁をもつ事になった。《南砲台の小隊長は、一七年六月広島の野砲兵第五連隊に入隊、当時の広島には第五師団（鯉)が置かれて各種部隊が駐屯し、広島城は日清戦争時大本営として使用されたという歴史から、誉高き軍都として活気があり、夜間は数本の照空灯が交叉点滅しており、宇品の要港もあり海外派遣者には思い出深い都市であるが、各隊の訓練は酷しかった》

一九年六月第一〇五師団(津田中将一が編成され、二〇日門司を出航した＝二隻の船団は、台

湾沖で敵潜艦の攻撃を受ける海難もあったが、七月一〇目マニラに上陸した。

同地に司令部を置き野砲兵隊(漆谷少佐一〇六六三部隊)に南部ルソン防衛の転出が発令された。米空軍の第一次マニラ空襲の頃、その爆撃音を聞き乍ら南に向って移動を開始した。

レガスピー当着。マヨン火山東方海岸線に出る。アルバイ湾に向って敵上陸時に備えて、水面撃破を想定の砲列を讃えたのであるが、此の砲列はゲリラ情報を攪乱の作戦がそれとも方針の変更なのか、完成した処で山地へ移動の命令が出された。

此の時篠原小隊のみが本隊を離れて、カプール島へ転出の命をうけた。(砲兵隊は三コ中隊であったが当時の実力はニコ中隊程の兵力)

レガスピー湾を北上すればサントドミンゴの町があり、その中程のリンドン附近に兵と共にようやく構築の陣地を、急ぎ撤去して本隊から別れ陸路プーランに向った。トラックを利用して急いだが、橋の破壊されたものを補修等で思わぬ困難があった。

ブーラン港で乗船した歩兵部隊が、有難い事にカプール島に布陣するという。《十二月上旬であるが小隊長に、ダルピリ島の寄港は記憶にない》カプール島西北部の浅瀬に停泊し、砲二門を上陸させて林に隠した後、歩兵中隊長と共に山を登り岬砲台の隊長に着任の挨拶と、爾後の防衛について打合をした。

岬砲台は平静で各隊の上陸を歓迎してくれた。歩兵部隊は山を越えて東岸のカプール町に出発した。肝心な砲を山越させる事が出来ないのでレガスピーに連絡をとり、船を借りて砲を積載し北側の海峡を避けて、南岬を迂回して海岸線を探す。結局サンルイスの海岸で満潮時を利用して下す事が出来た。

海中から浜へさらに、海岸道を南下してカプール町へと搬送したが、弾薬等は程川中隊の協力があって助かったが、さらに幸な事は米軍の攻撃がなく、嵐の前の静けさに似た無気味さがあった。

四、南砲台の戦斗・転出

カプール町に着いたが思わぬ日時を消耗した。小隊長は陣地構築を急がねばならない。町南方の海岸に近い台上に突出した地形を利用して、南洋上に向って砲（三八式野砲口径七五ミリ)二門を据えた。第一次作業の終了は年末となり連日の作業で負傷兵も発生した。

宿舎は小学校の歩兵隊に隣接の建物を用いて、隊員約三〇名は山芋団子で新年を迎えた。

正月早々に歩兵隊がルソン島に転進して本部に復帰の命を受けたとき、野砲隊もルソン島へ転出の命を受け、米軍上陸がレイテ島からルソン島へと変り、決戦場が移向する事を知った。

砲を運搬するに船を受領しなければならぬと、小隊長は当番兵と舟に乗りレガスピーの南方海岸バコン

附近に上陸し、トラックを利用してレガスピーに向った。当時陸海軍の各隊はマニラ集結の移動命でその準備に忙殺され、混乱の坩堝、軍隊とは非情な集団なのか、此の様な時自己中心の活動に忠実でも他部隊の世話は避けて、全く交渉が出来ない。

正直腹の立つ事だがここでは無理と北方の師団司令部(リガと思う)に行く。ここも同様の混乱で話相手も捜せない。《津田中将は松本大隊等と既に出発済》任務不履行になるのかと当惑の処、司令部勤務という同郷の知人将校に出会う。地獄に佛の邂逅（かいごう)と援助があって、大発 2 隻をブーランに緊急廻漕の指示を受ける事が出来た。

当番兵と急ぎブーランに着いたのが一月中旬で、どこから来たのか大発二隻を確認して歓喜、しかし次の試練が待ち構えているとは予測し得なかった。一人でも多く輸送したいと考えて当番兵と行李をブーランに残して、一路サマール島マオーの五木田大隊本部に向った。(程川中隊の上官を先に乗船の礼による)年始早々より待機の五木田大隊長に、恩賜の清酒三本を渡し、マオーを出航するのだが前記の如く機関故障の乙船に乗ったが故に漂流した。

或島に流れ着き夜明近く島を見ると、どうも不思議と驚くべきか喜ぶべし、此の島影はカプール島の東海岸で昨年末砲二門を搬送した、思い出の浜とわかった。同船の田沢中隊を案内してカプール町に着き、部下砲兵と再会出来た。配船の見込が当分絶望と知り、砲列の予備陣地も構築した。

約一ケ月後二十隻余の米船団がカプール町に砲撃の時は、予備陣地より反撃の発砲により正面からの上陸を阻止した。氷船団が北方.に上陸してからは歩兵部隊に協力して、夜襲にも参加した。

程川中隊がカプール島脱出作戦の夜、月明りをたよりに舟捜し等に協力して最後に乗船した、後発の三隻は潮の流れが変り南方に向って流された。互に連絡して着いた島は目的地に反して南の孤島デスタカドである。(カプール島南端より七時の方向一三キロ、饅頭形で長き約三粁)幸ゲリラ化してない平和な小島で優遇してくれたが、その村長の言うには「此の島に居るのは良いが、この事が米軍に知れると戦場になる。隣の島に行けば日本軍沢山居る。我々は大きい船に皆さん乗せて送ります、どうか」の提案がありその方がルソン島行が決行出ると乗船した。(砲兵隊八名、海軍四名)

着いた処がマスバテ島の東岸で、元関東軍で陸士出身の大尉より協同防衛の依頼があった。しかし任務執行中と断って西岸に向い山路を急いだ。

初志貫徹の為西岸に出て船を出し、ルソン島へ渡る計画は多少甘いもので、米軍が上陸警戒中の浜には出られず、小戦斗を継続中に終戦となる。

《瀬戸内海に近い町で育った小隊長は海の知識があったのに加えて稀に聞く水上運の強い方である。だが元隊員の消息不明は哀しい思い出となっている。その昔、文治元年の壇の浦合戦同様に、潮流は勝負を決し人命を左右する力がある。父マスバテ島には小山内中隊に縁の深い第九連隊（垣)下士候隊が、上陸した米軍と激戦し、三二名中八名が戦没された》

第四節 田沢中隊の戦闘

一、編成

前報の如く十九年夏に、高浪連隊は北満に於てソ連軍との戦斗を予想して、戦車壕の構築等に総員多忙の第五十七師団(奥・司令部は山神府)各部隊より、抽出されて新連隊の主力となり、チチハルで編成されたものであるが、チチハルの近距離に駐屯の各部隊からも多数の将兵が充員されて、完結したものであり、中には意外な部隊からも編入されて、その戦力を強力なものとした。

田沢中隊の場合、十八年十月秋田県で紀成された部隊が、満州里とチチハルの間にある昂々渓(コウコケイ)附近に点在して、鉄道守備隊として活躍していたのであるが、軍令陸甲五十五号による、新編成により独立歩兵第七連隊(長、米本大佐)となった処で、その中より一部の将兵に独混二六連隊へ転属の命が下された。

その新中隊名は田沢隊(三中）、畠山隊(七中)、飯野隊(十一中)、米山隊(IIIMG)で当時の小隊長要員の中には病気等理由により、他の将校が後任者として急ぎ任命されたり、他中隊との入替人事が実施された。又、戦後の調査により、元の部隊名は、ムーリン八〇二部隊、独歩七連隊、二四九部隊苫米地隊、チチハル坂本中隊、牧野中隊、五二連隊等の隊名があり、関東軍の歴史的任務である南満州鉄道の守備部隊にはじまった、独立守備も十八年末より満州国外の各方面へ、戦斗部隊として勇躍派遣されていた。

〔註〕

(1) 中隊編成 中隊長 田沢博

一、小隊長 佐藤昌平 二、小隊長 市原謙太郎

三、小隊長 羽田又吉

(2)小山内中隊が神武屯の赤炊瓦建兵舎と別れ出発したとき、大隊の編成にしてはどうも人員が少ない。一部の隊は先発したのかと口したもので、戦後生還者名簿の地名から元隊の確認に当惑したものです。幸に元第二小隊長に会い編成の確認が出来た。(五六年於大阪)

二、移動

チチハルで五木田大隊第三中隊に編成後、釜山で乗船し航海も無事にルソン島マニラに上陸した。ラグナ湖南方に移り、レガスビーに移動して乗船、サマール島マオーに上陸した模様は、小山内隊の行動と類似のものである。九月十九日マニラに上陸した部隊は、荷揚作集に就き徹夜作業で部隊の資材等を完了したが、荷物運搬と第一次マニラ空襲による港の整理作業等に就き、輸送間の疲労を回復する間もなく、リンガエン湾方向に移動する事になり、二八日出発した。

ダグバン、ビンマレーを径てラブラドルの陣地構築に就き三日目、再度マニラに向け移動十六日に到着した。その三日目第二次マニラ空襲がありボルネオ征きの内命が中止となり、次はラグナ湖東方を通ってサンバブロへ。ここで列車に乗りナガに着く。二小隊の場合は十一月六日列車にてレガスピー駅の近くで下車して港に着いて乗船、サマール島に向う事が決定した。

市原小隊等は、ラブラブ島を経由して、九日未明マオーに上陸したが、レガスビーでは他部隊の兵九名が垣部隊に編入の為乗船を共にした。

(レガスビーの参謀によればアレンには垣部隊の一個小隊が居るので、そこまでの同行が目的である。又第一小隊と MG 隊は第二小隊と別の船に乗船した)

マオーに上陸した田沢中隊はアレンに駐屯する事になり資材の運搬等を続けたが、後続船より野砲の陸揚げを見て近く戦斗開始とみたのか、住民の一部は山に入った。

アレン町長のルビン氏は親日的な大男で、田沢隊に協力してくれた。二十日教会に住民を集めて中隊長の宣撫演説は、市原小隊長が英語で町長に伝え、これを町長が住民に説明するという方法を行ったが、ルビン氏もなかなかの弁士であり、中隊長の真意が伝達されたと思われるがしかし、町には軍票をきらう者が居り、(ゲリラ軍票が町で使用中)町長もゲリラに干渉されていると予想された。

小山内隊がマオーに上陸後、田沢中隊の一部が西北端の岬を通って北海岸のラベザレスに駐屯した。これは北海岸の警戒と垣部隊との連絡を執るためのものであったが、米軍の飛行機と思われる偵察が十一目より開始され、小山内隊を輸送後、ルソンに向った秋田丸が、銃撃されて焼失する等の攻撃が多くなった。

ラベザレスの町は教会もあるが町長サムビロ氏はゲリラを恐れてか消極的で協力せず、中隊は陣地を築き警戒を厳しくする。

アレンに駐屯していると思われた垣部隊の不在が判明し、ラベザレスより東方約二十キロのカラニアンには、沢小隊が居るという新情報により、二十九日違絡の為レガスビーで乗船した六名の者が出発した。しかし約三キロ程進んだウルダネタ附近で約三〇名のゲリラに襲撃されて(戦死一名)連絡兵は帰って来た。

田沢隊より死体収容に出たが、ゲリラの姿なく、沢小隊はウルダネタに十月上旬まで駐屯の情報を得たが、其の後の転出先が不明の為に、爾後垣部隊に編入予定の八名は田沢中隊と共に行動する事となった。

十二月に入って連日陣地構築の処、五日一八時グラマンによる銃撃があり、重傷五名、軽傷四名の被害が出た。翌日はかねて辞任を申出ていた町長も逃げたのか姿を見せない。アレンとの途中にもゲリラが出没して道路遮断を計画して増強、敵機の空襲も多くなる。

五木田大隊として、田沢中隊を後退させる事となり、中隊は十九日アレンに着いた。程川中隊がカプール島に派遣されて居り、歩兵二個中隊による陣地は逐次マオーに集結を計画された。アレンの裏山にもゲリラが進み、マオー南方の部落にも米比軍二百名上陸(ベリアド)の情報があり、一方ダルピリ島にも(カプール島の中間の島で程川中隊の一個小隊派遣中)兵器輸送の情報があった。

此のようにして緊張下のマオー部隊に対して正月早々重大な移動命令が入電した。「サマール島、カプール島ノ警備ノ任ヲ解キ、南部ルソンニ移リ野口兵団ノ指揮二入ル事」
マオー陣地を三方の山地から包囲する如く徐々に接近して来る。討伐隊が出てその一角を静かにしても、信号弾を打上げて他方向より小銃を打ってくる。飛行機の偵察も連日という状況下、ルソン島より船がいつ来るであろうか。待つ事二週間。上陸用船艇二隻が来たので、その一隻(乙号)に中隊指揮班、第一小隊、第三小隊(大前分隊を除く)が乗り、甲船には大隊本部、患者等が乗った。

乗船時の援護隊として市原小隊が警戒に就き後発隊として取残された。戦場の分れは常に無情である。追及再会を予想された市原小隊と、先発隊の前途には各々の戦場があり、乗船梯団は必死苦斗の運に巻込まれて戦没者多く、追に劇的な再会は出来なかった。
一月十七日の夕、乙号船に乗った中隊主力は甲号船と共に出航した。潮流と強い風雨による動揺で舟足が遅い。甲船に負けてはならんと波をさける操従の処、海峡の中間で第一の事故が発生した。エンジンの故障である。

船泊工兵隊員が懸命の努力も虚しく、補修が出来ない。悪評を許されるならば開戦以来連日の酷使によって老朽船である。それでは甲号船が洩船となる為に、太いロープを必死の作業でかけてルソンに向った。しかし無情に荒れ狂う風波にて、頼みの口ープが切断するという第二の事故が起り、遂に波まかせの漂流船となる。行方全く知れず、心細き事この上なし。夜明近くにある島の浜に流れ着いた。

僥倖とか幸運は此種の事を表わすように、この島がカプール島でその東岸の事が判明して上陸する。
同島守備隊の程川隊にも食糧なく、カプールの町より離れて自給自活の生活に入った。

程川隊も船を待つ連日なのに、着いたのは漂流船で食糧と輸送の問題は、深刻なものとなった事に加えて、米軍の攻撃目標とされた。

空爆、艦砲射撃に続いて上陸された。カプールを脱出してルソン島への決意と、運を試すように捜した機帆船に乗って、約三十名は出航した。《どこへ着いたのか不詳、ルソン上陸後北進したが各地の米比軍に攻撃されて、転進の間その兵力は減少した》

三、ルソン島へ

機帆船を操縦出来る兵の居た事を幸に多くの者が出発した。残った者は住民のバンカーを捜してこれに分乗したが、田沢隊の者がいつ何名程という数が不明である。

出航を前に風を利用する事に気付いた佐藤小隊長の場合は、兵用の携帯天幕(一・五米正方形綿布、防水加工)に棒を取付、別に帆柱も準備した。この代用帆は追風の幸運もあって、快調な速力で他のバンカーを抜いていた。指揮班の丁上等兵は三人一組となり、出発前に櫂の代用に円匙を使う事を考えた。途中で柄が抜けないようにと円匙の小穴に麻糸を通して結びこれを携行した。

《指揮班の兵には九名が円匙を支給されていた。鉄の匙部には八ミリ程の穴があり、柄には麻綿が巻付けてあった》

バンカー操縦の経験のない不安もあったが、波の少ないのを幸に三人は無中で円匙の櫂を操作した。海流の流れを利用したものの流れを横切るのは重労働であり、海水を頭からかぶるようにして、ルソン島の方向へと向った。

《円甦を櫂にした着想はよかった。第二次大戦のある洋画で見た渡河作戦では、銃の床尾板(木部)を櫂にしてボートを櫂ぐのを知ったが、日本軍ではそのような教育をしなかった。小銃には菊のご紋章があり天皇陛下よりお下賜されたものとして、神聖な兵器である事と、その木部巾が狭かった》

夜明け前椰子の木がある小さな無人島に着いた。バンカーを草むらに隠してへとへとになった体を横たえた。小島の名も位置もわからないが、とにかく休養する事を考えた。

《おそらくルソン島のマトノグ近くと思う》こ、三日して小舟で来た住民が日本兵を発見して逃げ去った。この侭では通報されゲリラの襲撃が予想される。「おいどうする」「向うの島がルソン島だろう、向うに渡ろう」とその夜再びバンカーに乗り、平坦な海岸に上陸して直に山地に入り偵察した。

他のバンカーがどうなったのかは不明。近くに日本兵が居たらと捜した。部落の近くには銃を持ったゲリラで油断が出来ない。

「上陸したら北に進め」の指示を守り、とにかく山路を北進する事にした。あの夜出発した中隊の戦友に

早く合流したい。マニラに向って進まねばならぬ。脱落しては大変だ、万一中隊の者に出会う事のない場合でも、友軍の居る処まで早く行きたい、苛立つ心にも昼の行動は危険。夕方になると方向を定めて行軍の日課を続けたが、その速度は甚だ遅いものであった。

マトノグ港に着いたらイロシン、カシグランを経てソルソゴンに至る、主要道路(一号線)の概況を聞いてはいたが細部の地図がない。それに英会話や住民の言葉を全く知らないのも心細い。此の地は開戦以来強力に組織されたゲリラの巣であって、道路を行軍する部隊を待伏せしては、攻撃に都合の良い小山が無数にあり、各部隊が多くの死傷者を出して居る。

三名の深重な行動は裏道も避けて山間を進む事になった。三名にわかる事は太陽による方向だけで、目的は北進のみ。

途中でどうも湯が湧いているような村《イロシン》の近くを抜けて高い山に入った。何十日過ぎたであろうか高い山の北側中腹まで、たどり着いた《ブルサン火山　一、五三六米》密林の隙間より北方を眺めると、ソルソゴン湾(彼等は西海と呼ぶ）とグバット方面の大平洋(東海と呼ぶ)に挟まれた陸地の巾が、どうも一里程に見えた。

《実は十二キロ》その殆が水田のようで三名の突破はとても不可能と判断して、これ以上の北進を中断し戦況の推移をみるために、自活自衛の独立分隊となる事を覚悟した。

北進の命に反するが生命の保持も大切と、足跡を残さぬように小川を登って安全な沢を探した。住民も入る事はないだろうと思われる谷に木の枝と草で小屋を作り、芋を蓄えて山賊に似た篭城を開始した。(六月頃の由)

九月も過ぎたであろう、食糧採取に山を下りた処を突如審刀で足首を切られて、逃げる処を銃撃された。腰部、太股貫通と負傷した三人が必死で逃げた。途中で「俺は歩けない、殺してくれ」と泣き叫ぶ戦友を激励して、ようやく小屋に戻り、どうにか生きのびた。三名の傷が全治せぬ**十一月下旬**頃、遂に小屋が発見されて住民と元日本兵が来た。そこで戦争の終った事を聞いた。

四、市原小隊の場合

ルソン島北部西岸の北サンヘルナンド港に停泊した船団の中から一部の将兵が上陸した。(小山内隊は九月八日)本隊を乗せた船団はマニラ港に向ったが、その侭船足を早くしてマニラ湾に急ぐ事は出来なかった。

リンガエン湾を横断して、ポリナオ岬で左に向をかえてマニラに至る、航路は約四百粁あり、米潜艦が待機している状況で警戒を厳にした、マニラ港に接近したのが十九日の朝である。思えば八月二一日釜山

を出航以来、超満員の船旅は、暑く窮屈な苦しい緊張の一ケ月であった。

上陸直ちに荷揚作薫を開始した、その日の情況を市原日誌によれば「朝マニラ湾内を少し入る。ビルディング並びあり流石に大都会、白亜に赤い屋根青い屋根。久し振りに都会に来た感、又外国の街に来た感あり、昼食後埠頭に着く。第七突堤、湾内に船多数碇泊す。

輸送指揮官に挨拶、逐次上陸開始。当連隊は最後に上陸、埠頭荷積所に入る。荷役開始佐藤少尉(第一小隊長)第四船倉にて指揮、各隊の荷物こんがらがって伸々見分つかず混雑す…中略…夕食後雨降り出す。荷役一時中止、雨あがってから夜を徹して荷役、埠頭に銃撃をうけた弾痕生々し」

「翌日も荷物監視と荷揚。一四時昼食一六時出発しフランシスコ、バラクタス小学校に入る。五〇機をこす空襲にて輸送船に被害あり」二二目も空襲は続行されて、連隊砲の兵に重傷者が出る。荷物の消失も起る程の混乱が続く中でこの重傷者は、上陸後初の戦死者になったという悲報が入った。

二七日まで使役に就き、北に向って行軍を開始、リンガエン湾のタクバン・ラブラドルを経て西に進み、スアルの陣地構築が未完成の侭、再度マニラ集合という朝令暮改的移動命を受けて、大隊の資材食糧を運搬するためのカルマタ、バンカーを借用する役に、市原小隊長が任命された。これは語学に堪能である事と住民のボスに対.する交渉技術が優れていた為で、大隊長と経理将校の信頼を厚くした。

マニラでボルネオ行きが中止となり、南進する命を受けた。サンバプロ、ロスパニオスを経て二月五日夕方ナガに着いた処で、中隊はサマール島に移動の命を受けた。

翌日汽車に乗りマヨン火山近くの駅(レガスピーの二つ手前)で下車、トラックで港に向い同行の師団参謀と別れた。

野砲一門と垣部隊行の兵九名と共に、秋田丸に乗船し七日の一時に出航する。暁方ラブラブ島に着き待避(日中は航海が出来ない)一七時出航した。風雨強く船はアレンを通り越して流される。船員と通訳兵を岸に上陸させて聞いた処、マラガ附近で三二キロ程戻って夕方アレンに着いた。この港は桟橋不良にて野砲の上陸が出来ないと、マオー港に移動して上陸する。上出来と言えぬ航海が終って、町の空屋に分散して宿泊の処、台風に似た嵐の為ニッパーハウスの屋根が飛ぶものありで、市原小隊は歓迎されないサマール島の夜をむかえた。

中隊主力は二日前に上陸し、アレンに駐屯している事が判明して、アレンに移動し中隊に復帰した。

前記の如くアレン、ラベザレス、再度アレンの警備後マオーに移り山裾に布陣した小隊は、五木田大隊がルソン島に転出の命を受けそれは「止むを得ない場合は、体だけでも急ぎ出発せよ」との内命である。中隊主力が先発し、小隊は第三梯団として南山確保の命により残留する事となった。

小山内隊陣地後方の山頂で斥候が米軍と戦斗する日もあり、グラマンの銃撃、迫撃砲がマオー陣地

に集中して三方より包囲されたが、三月一日夜遂に転進を決意した小山内中隊長と共に、包囲網の一隅を通過して山中に進んだ。
三日高橋 MG 中隊(一個小隊欠)の指揮下に入り、重い重機関銃と銃弾を携行する MG 隊員の苦痛を分担した。

長い転進の間、小山内隊の如く関特演以来の同県人が主力の中隊と異なり、各種警備部隊からの編成で、戦斗訓練も少ない部下の掌握には、小隊長の苦労を多くしたと推察されたが、部下を思う小隊長の誠意により軍規ある指揮の下に、斥候、尖兵等の任務に連日活躍した。転進部隊は前後に敵兵ありで、各小隊は交互に戦斗を行い市原小隊では同月三〇日初の戦死者が出、その後も戦没者と戦病者が多発し、元第三小隊であった大前分隊を解体して、他の四コ分隊に編入した。(四月二〇目)
三月末に小隊長はアパカで作った草鞋(わらじ)をはき、戦斗や芋掘りの陣頭に立ったが塩分もとれない生活で、熱発や食中毒で衰弱した日もあった。

栄養のない長期の転進により八月頃より病人も多くなる。マオー出発以来戦没者一七名を出したが生還者三四名を数える事が出来た。ここで終戦を知った当時を市原日誌により説明すれば、「九月十二日朝、垣部隊石本隊の歩哨線に海軍の中佐参謀と憲兵中尉と住民若干名、日章旗をもって現る。停戦協定締結せられたという。とりあえず斥候、物資蒐集等出発を見合せ、大隊長等会見、はじめ兵隊達も米軍の廻し者ならんと、仲々信用せず。

やがて各隊長集合、詔書、軍司令官告示等により**終戦を確認、**"爾後、米軍に収容されたる者は捕虜として取扱ばず"との山下司令官の告示により山を下る事に決す。各分隊長集めて伝達す。流石に声つまり感無量なり。

直ちにガマイ向け出発の為、大急ぎ炊飯、銃は御紋章をけずり、特殊弾薬は埋没(手榴弾、擲弾筒弾)し昼開墾地にて各隊整列し、詔書奉読式を行う。言々句々身にしむ思いなり:…一〇時出発、朝から何も食べず身体の調子悪し。素足にて行軍、途中僅かに砂糖黍一本かじったのみ・:最後尾より只二人、途中何度か倒れるようにして露営地に着き武装解除、比島兵が警戒に当る。

一三目九時出発、刃物、国旗、書類とられる。大河ありバンカーで渡る。(健康な者は約五〇米を泳ぐ)又歩く。椰子林あれどとれず、ガマイ部落に着く。住民は案外親しげに迎える。どうも怪しいと推察されたアレンの元巡査は、髭をはやして北軍隊で勤務していた。

〔註〕
1、サマール島に残りルソン島に渡る事の出来なかった小山内隊の戦況は前報に綴ったが、途中で垣師

団第九連隊の金野大隊と遭遇して行動を共にした関係で、昭和五六年に京都新聞社発行の「防人の詩」レイテ編第一一章には、サマール島小山内隊の記事が出ている。(ネニタの戦斗まで)

2、**終戦を伝達する軍使を迎えた小山**には前日の夕方、転進部隊が到着した。私は前方の偵察の為に斥候を命じられて、古参上等兵と三名で前方の部落に入り、終戦のピラニ枚を拾い、素足で茨の密林を歩き、夜明けに戻り報告した。その後**樋口将校**斥候が出発している。

3、軍使の一人、根本憲兵中尉(福島県出身)とは五四年春、横浜市で再会し「遂に見つけたサマール島放浪部隊」なる貴重な原稿を頂戴する事が出来た。尚、前記の詔書と軍司令官告示の写しは、四九年三月一〇日、ルバンク島にて孤独の小野田寛郎少尉に伝達する為に、谷口元少佐が使用したという。

4、市原日誌によればニニ日ガマイ小学校に着き、二〇日、米軍輸送船に乗り翌朝出航し、二二日昼レイテ島タクロバン海岸に上陸す。

明日よりは何処に求めて糧の道　深山深く造れてあれば　北村

車をかみ戦いぬきしわが身には　敗れし言葉強く響かん　北村

外業に出でたる幕舎ひそとして　病みたる人の塵ひろいいる　佐藤

残りたる部下みな国の柱にと　願ひに燃えて逝きし将軍　根本

転進(ウツリ)　ゆく夜々をさだめて雷雨猛け　この夜も三人(ミタリ)落伍せしとか　中村

一本の縫針得んと引返し　友の屍を掘りてさぐりぬ　神谷

戻る TOP へ 次へ

第三章　竹中大隊の戦斗

第一節マニラ東方へ

一、マトノグにて

十九年十月マニラ市に集合して、ボルネオ島征きの命で待機の処が変更となり、ルソン島最南端のマトノグに連隊本部が移り、竹中大隊はソルソゴン州の警備に就いた。

松本大隊はナガに、五木田大隊はサマール島に布陣して、海峡より上陸する米軍を防禦の任に就いた。配属の工兵隊は早速作業に就き、洞窟陣地の構築に発破作業を続けていた。工兵隊は本部の命により、鉄舟を一隻ソルソゴン港より受領する為（サマール島への連絡が、又は一部の兵力を他に派遣する為か不明)中隊長以下七名程が、魚船にて出発したのに、全く不測の事件が起り、その夜兵一名が小舟を漕いでマトノグに戻って来た。

その急報によれば「ある海岸に上陸して飲料水を汲みに行った処を、ゲリラの襲撃により全員戦死」という悲報である。激怒した工兵隊員と歩兵一コ小隊が、三日三晩の予定で討伐戦に出かけた。

中隊長の弔い合戦の斗志強く、報告に帰った兵の案内で千葉曹長(未確認)以下陸路を通り問題の部落に入ったが、入口附近は鳴子で警戒されて、どこえ消えたのかゲリラの姿なく、しかも戦没戦友の遺体も確認出来なかった。此の部落に間違いないとすれば、ゲリラはどこかに潜んでいる何とか捕える策略は、と作戦を練った隊長のの指示で、要所要所に潜伏斥候を配置して、本隊は軍歌を合唱して引揚げた。その直後作戦計画が見事に的中し、地から湧いたようにゲリラが現われて、本隊を見送っている処を句囲して、捕獲する事が出来た。

ゲリラの自白によれば、水の容器を持って日本の兵が港に上陸し飲料水を汲に来た、部落に案内の途中を銃撃(一名は谷に逃げて隠れ、夜になるのを待ち浜に出て小舟で脱出)一方港の船に残った隊長と下士官は附近の船から、待機中のゲリラにより銃撃したという計画的な攻撃である事が判明した。

小部落ではあるが兵器弾薬共に、他より補充して充分に蓄えてあり「日本軍の一個中隊程が来ても負ける事はない」と自信を以て豪語、併「この日本軍の知恵は、我々を上手に補えた」と面相を変えて残念がった。このようにマトノグ周辺の治安は悪化して、ゲリラの活動が喧噪になったことは、平和工作も進展しているだけに予測出来ない事であったが、レイテ島の戦況より米軍がルソン島に再上陸する計画との指令により、武器の支給をうけ蜂起したもので、比島全域に激しいゲリラ感情が現われた証拠である。マトノグ周辺の兵には初めて迎える。南国の正月に何か落付かぬものを感じていた。

気候や景色ではない敵機の偵察や、ゲリラ活動の不穏な動きの故と思われる。
正月早々に北部へ移動の命令を聞き、カプール島からは、連隊長と船に乗り程川中隊の一個小隊が先発として上陸して来た。

二、マニラ東方へ移動

十五年の末第八師団長に振武集団の編成と、マニラ東方地区に移動して、中南部ルソン作戦を担任する事、野口支隊のサンベルナルジノ海峡守備の任務を解除する命と、さらに秘密保持の指示が出されていた。横山集団長の命令(元日一時)とは「高浪連隊(第 III 大隊欠)はマニラ東方地区に前進せよ」となり《二日マトノグ出発の資料もあるが、連隊長はカプール島を巡視中に命令を受けたと思われる》この移動命令によりサマール島の五木田大隊が復帰すれば、連隊長の下に二個大隊が集合し、戦力が発揮出来るのに船舶の都合で、その見込みもなく、五木田大隊が早期に海峡を渡り、追求する事を祈り乍ら本隊は十日に出発した。

竹中大隊がこの地に着いてニケ月にもならず、マニラ方面に移動の命令は、リンガエン湾に米軍上陸の兆があった故であり、出発時には米軍が上陸して、これに反撃の友軍とが日夜激戦中であり、北進の移動は急を要した。途中の道路や橋の爆破とゲリラの襲撃と、敵機の銃撃等で各隊の行軍は夜間となり、重い背のうは肩にくい込み長い苦痛の進軍となった。

この間既に北上し勤兵団に編入された松本大隊は、マニラ東方よりさらに移動して、米軍上陸のリンガエン湾東方に向い出発後で、竹中大隊との再会は不可能となった。

竹中大隊にはカプール島を先発した一個小隊と、小山内中隊(サマール島)の兵が一〇名含まれていた。十月末馬受領の為に派遣された梅津兵長(西置賜郡)以下五名と、八月六日本部要員として転出した須藤上等兵(山形市)と暗号要員等である。

ここでマニラ東方拠点の戦況を説明すれば、十九年末レイテ島の主要陣地を占領した米軍は、ミンドロ島にも二個連隊を上陸させて基地を作り、一月六日より空海綜合の攻撃を開始して、九日リンガエン湾に焦点を絞り、大部隊の上陸を開始した。必死に突入する反撃隊をも鎮圧して砲陣を築き、其の一団はマニラ攻略の為に南に向って進撃を急いだ。

その進軍に抵抗する部隊殊に、クラーク地区の建武集団(塚田中将指揮約三万名内生還者一、三〇〇名)に対しては、二十五日頃攻撃を開始その反撃を、西方山地に圧してマニラへと進み、二月三日浸入を開始した。

マニラ攻撃は南からも挟撃を行い、これに対し海軍主力の防衛は、窮鼠の如く斗魂を燃し、死力を尽して月末まで防戦を続けた。さらに東方山岳地帯の振武集団（横山中将指揮約八万名）の陣地に対し、米軍は猛攻撃の砲火を集中していた。

三、マニラ東方布陣

マニラ国内飛行場の東約二二粁に位置するアンチボロに、野口兵団長が二月十二日に着き、十四日には北方五粁の神威山に移動したが、ここで振武集団の担当守備陣地を説明すれば、形という字の右三本を「毛かざり」と言うが、毛かざりの様な形に分れて、、北から河島・小林・野口の各兵団陣地となり、ラグナ湖の南は藤重支隊(一七連隊第 III 大隊)が担当した。

南部ルソンから後発部隊を掌握して当着の、藤田大隊長が神威山に着いたのが十六日で、高浪連隊長は二十三日に、着いて、直ちに小林兵団の振武山に就くよう命を受けた。

木村大隊は神威山に着き、その後三月五日にレガスピーから到着の杉山大隊(独歩一八五)は一ボ

ソボソに向った。《野口兵団長が小林兵団陣地に高浪連隊長を送った真意が不明であるが振武山こそ集団の拠点であったのか!戦場は日増しに騒然となった》

マトノグを出発した松田中隊は、マニラ東方四十粁地点を目標に行軍した。そこはピリリヤ・タナイに当り、次の前進先を聞いたと思われるが、この先アンチポロ方面に向う道路は、敵機パトロールとゲリラ活動の盛んな地区であった。当時は砲弾の落下地に友軍ありが常識で、松田中隊が本部位置を捜すのは、早く出来た。だが五〇〇粁余の移動中戦没者を含む二〇名を失った。

《同大隊の畠山中隊は田沢隊同様に、満州第二〇一都隊より派遣され、編成時山岸少尉が小山内中隊に移り、同中隊より太田准尉が編入されており、北サン上陸後スアル・マニラを経てソルソゴンに移り再度マニラ東方に向い、一度ボソボソに行き振武山に向ったという》

竹中大隊が着いた頃、振武山より八時の方向約八粁の大和山には、強烈な砲撃を受けてその山容が変形する程の、被害があった。指定された位置に着いて、第一の作業は壕を堀る事で早速蛸壺堀りであるが、観測機の旋回と砲撃をさけての行動で交替に、己の墓穴となるを考え乍ら懸命に作業した。当時の志気は旺盛で連絡壕や偽装もも完成した。(第五、第六中隊が第一線に布陣)

この頃まで杉兵団第三一連隊の一部はイボダムに出て、戦車攻撃隊が(一月二十六日)故障に潜行したり、カロカン飛行場への反撃隊が出発する等(十三日～二十二日)活発な戦斗を開始していた。

四、高浪反撃隊

三月になり敷島台一日、大和山朝日山三日、信義山五日と前面の各陣地は、敵の猛爆により浸入されるのに対し、友軍は奪取反撃の激斗を続けていた。小林兵団は大和山に池田大隊を七日に、無窮山には金井大隊をと、逆襲の斬込を決行させたが我方の損害が多く、戦果は揚らなかった。

米軍は正面の六コ連隊を七日に九コ連隊と増強して、振武山こそ重要拠点と信じてか、八日より前方各陣地を撃破して突入の攻撃を開始した。

振武集団中央の要として、その名を持つ振武山を守備する為、前方敵陣を攻撃する作戦をたてた小林兵団長は、高浪大佐を反撃隊長に任命し、指揮下に竹中大隊、杉山大隊、小林大隊(歩三十)荒太大隊(鉄道第八部隊第 III 大隊)を編成して、十日に行動を開始させた。

振武山の西二粁が振武台で峯続き、南面は緩い傾斜で二粁前方に中山、大山があり友軍陣地は激突の死斗が続いていた。《アンチポロの黒宮支隊は死斗を続け、米軍指揮官を死傷させ乍らも、遂に玉砕》

三月十日は陸軍記念日であり、「友軍機の大反撃があるぞ」の情報があった。併気休め的な飛語が

あったのか、この頃 B 二六編隊による油状の投下と焼弔弾にて着火、と言う卑劣な焼土戦術をかけられた。

消火の街なく、咽の痛みを耐えて憤激するばかり、焼野原となって敵陣が見えるが我方も陣地が露出して行動が丸見え、黒い山にカーキ色軍服の動きは銃撃の目標にされた。

反撃隊は夜間に限られ、各種警報装置や照明で侵入が妨害される。畠山中隊では米軍テント近くで電線にふれて銃撃され、中隊長等が戦死された(十二日)

昼夜の砲撃に対し斬込隊が出る、今一歩の処でその戦果は期待出来ない。苦斗は続き撤退命令も伝達出来ぬ程、混沌たる戦場に釘付けされた将兵が、刻一刻と生きていることが何と不思議に思ったという小山内隊より転出した前記一〇名は全員戦死。第三一連隊より第五、第六中隊にて編成の小林大隊は反撃戦に参加して全滅したのか、部隊に追及した者が一人もいない。当時歩第三一連隊長は軍旗と共に後方より進み、戦場の部下を案じ乍ら視察していた。

〔註〕1、第三一連隊長は小林島司大佐、ニコ大隊編成の中より第五、第六中隊を抽出して、重火器大隊長の小林達也大尉を長に任命して、高浪大佐の指揮に送っている。

' 2、空の特攻隊生みの親である航空軍最高指揮宮は飛行機少く、再建を計る目的で台湾に移動する程、友軍機なき戦場は悲惨である。

第二節振武山より転戦

一、振武山より脱出

三月七日アンチポロに進出した(同地守備隊玉砕)米軍の攻撃は、空爆と砲撃ありでその物量は予想と現実が桁違い、想像を絶する破壊力を見た者は驚き、その表現は種々である。「恰も密柑箱から密柑を落す様であった」という戦記がある程で、悪魔の仕業と見えた事であろう。

一つの陣地を占領すると米軍は、携行資料を用いて直ぐに堅固な砲撃の陣を築くという確実な戦法で、次の陣地へ攻撃してくる。反撃の斬込隊員は突入前に犠牲者となるという繰返しが続いた。

友軍の新鋭兵器を持つ池田大隊は(レイテ島作戦要員が小林兵団に編入された)ロケット砲の偉力を発揮したものの、砲弾の補充なく旦発射後は、即刻尨大な仕返しが飛来して、効力をフルに発揮出来なかった。

竹中大隊では加藤中隊長が十三日、畠山中隊長十二日と数多くの.戦死者が発生し(二十日、二十三日、二十八日、三十一日等に多い)撤退命令も前俄に伝達がされぬ事もあり、戦没者を多くした、畠山中隊陣地には神徳山方面からの砲撃があり、その後北方や嵐山や、必勝山方面という右後方からも攻撃され、戦死の秋が切迫し精神的脅威に似た苦痛をうけていた。陣地からの生還を予測し得ないと、中隊指揮班の名簿等は地中深く埋めた。

脱出命により移動するにも後方の谷も砲撃されて傾斜が急の為、一旦南に移動して東方の谷に入り、全員の手足が負傷している身を進めて、数日にして本部に着いた者には、「良く生きてくれた」と連隊長に迎えられた時の感激を、終生忘れ得ぬ瞬間となった。

鉄対肉、鉄の巨人と生身の子供等と、評される程格差の大きい戦力の中で、生ある侭に反撃を決行して、敵の進撃を寸時でも遅滞させる為に、頑強に抗戦した生存者には次の苦難が待ち構えていた。

〔註〕1、連隊砲、速射砲の一部が第 III 大隊に配属されており、その半数が第 II 大隊と共に戦斗したと思われるのに、その戦況は不明である。

2、連隊砲の場合第一小隊長(小林融少尉)が三月二十二日振武山で、中隊長(郡山辰彦大尉)が振武山北方六粁の八州山で四月二十日に戦死されているが、戦況を知る隊員はいない。

二、転戦

マニラ東方山岳第一線は、北のモンクルパンより、南はラグナ湖畔アンゴノに至る。約三百粁の陣地が崩れて、生存の将兵が第二陣地へと徐々に移動した。,

振武山振武台で戦没された将兵は多い。連隊副官梅津武夫大尉(三月二十七日)戦死、竹中大隊長は斬込戦の陣頭で咽部を重傷、数日後当番兵と本部に当着の頃は声は出ない。全神経の関所であり後遺症としで半身不随を案じた者がいる程疲労が見えて、歩行も困難であったが転進を続けられた。その後松田中隊の者とは再会出来なかった。

畠山中隊の者は連隊長に申告の後、太田第三小隊長指揮の下に約三十名が、東北の巌山方向に移動した。竹中大隊が振武山を撤去した時、野口兵団に復帰しているが、各隊への食糧支給もなく、松田中隊長は転進後約一ケ月後、沢を潜る様に奥地へ移動の処、偶然にも「本部があるぞ」の情報で、部下を集合させて連絡員を出した。《巌山の近く》本部とは名ばかりで驚いた事に数名の将兵が食糧捜しを行い、岩陰の全員が衰弱している様に見えて、此の附近の小部隊は前進の方向を模索していた。

振武の指令部はワワを三月十二日に出発し、三月二十日巌山に当着しており、附近の警備に就いた竹中大隊の兵もいるが、反撃隊として、振武山でその戦力を消耗した竹中大隊の組織がある戦斗はなく、レイバンに向っていた。

巌山南方の友軍陣地はその後も攻防の戦斗が続き、野口兵団指令部は徐々に東方への移動を続けていた。《二、一二アンチポロ発。二・一三神威山。三・五神兵山。三・二一神力山。三・二三－五・三〇御光山。六・二-八楠木村北方。六・九-一八レイバン》

巌山に砲列を築いた部隊があり、野戦重砲兵第二二連隊(滝沢連隊長元関東軍、振武集団に編

入し、忠孝台の陣では有効な砲撃により武勲をたて、横山司令官の感状を受け、五月十二日巌山南側に移る)の陣地構築中に落下した石が、下方の軍医(高浪連隊)に当るという事故が起り、高浪連隊の名を記憶する主計将校が居た。

敵の砲撃は五月二十日頃にも激しく実施され、二十二目振武司令部は東方約十粁の報国山方面に移動した。連隊本部は其の後移動したと思われるが、同地で六月に戦没の方もおる(畠山中隊の有村小隊長五日、太田小隊長十二日)レイバンに進む路は、高根山、歓喜嶺が敵の陣地と化し、その中を流れるサンイシドロ河の上流に向い進んでと思われるが、観測後の施回と砲撃により安全な谷ではなかった。

前記主計将校が六月初旬の事、集団司令部より「レーバン地区に、八師団輜重隊が米を調達集積したから取りに行け」の命が出た。この朗報に対し、兵四、五〇名と共に四、五日して着いたが、糧株は何故か全くなかった。途中餓死者が倒れており、レイバン近くには海軍関係の死体が数多く見られた。《レナチン河七粁の間七〇〇〇名の餓死者ありといわれる・・マニラ三宅部隊》この糧秣受領の命がどこから出たのか、全く空しい結果となり、甚だ腹の立つ話となったが途中で高浪連隊の一団と出会った。

振武山を撤退以来全く食糧がないので、兵は皆弱って、ふらふらの者が二、三名づつ高原のような処を歩いていた。《レナチン河に出る途中と思う》「あの花は食えるぞ」等の話をしていた、連隊長は当番兵と歩いておられたが、兵も大分弱っていたので、その銃を代りに持ち、一方の手には草花を握っておられた。(連隊長はレイハンで六月七日戦死陸軍少将に追贈その二、三日前の事である。

三、飢餓戦場

松田中隊長が連隊長に会ったとき「**この侭では兵を餓死させる事になる。東に進めば(レイバン)食糧があるだろう。元気な者を編成して出発させよ」の指示**を受けた。十名程出発後中隊長は後を追った。連隊長はさらに遅れて出発された。

レイバンには食糧があると聞き、期待し乍ら着いてみると時既に遅く、東西両岸地区より食編捜しに移動した先着の部隊によって、芋畑は荒されており、早くも餓死者の累々たるを見た者がいた。

大隊長は重傷の身をやや回復されて、レイハンに着かれたが、十日敵の攻撃によって戦死された。各隊の者は少数の分隊を作り、敵の間隙を縫うようにして細身の体を進めた。

連隊本部や大隊の中には転進の間に、輜重隊や他部隊に編入されたり、復帰したりで行動の詳かでない者が居る。日沢隊では農園耕作を計画した事もあるが、収穫まで駐屯の保証がない事と、その日の

食糧集めが先決となり、レイバンより西に進み既に敵が浸入の地区を抜けて、瞼山(マスンキットロック)東方の渓谷(タナイ河上流)を北上した模様である。この隊員の中に元営林署勤務の兵が居て、異国の山岳ではあるが植物や地形の智識があり、転進に役立った。

通信小隊が振武の陣地を出発して、どの路を進んだのか不明であるが、タナイ河を下り六月十日小隊長が戦死、その.数日前食糧採りに兵二名を川下に向って出発させた。だが二名は途中で襲撃されて帰隊しなかった。

振武の陣で中隊長と第一小隊長を失った畠山中隊の場合、巌山にて第二、三小隊長も戦死して、他より松田少尉が入り指揮を執った。

レイバン地区まで約二十名余が居たが、次の転進は数名の班を作りレナチン河を下り、途中で東の路を進みサンタマリヤ方面に向った、と思われる者が居るが迷路の如き川や谷を、食を求めて無中で赤いた。体の不自由な者は何隊であろうと、マラリア、赤痢に倒れ餓死する者銃撃をうける者と、再び故国に帰る事はなかった。

餓死寸前の者には、関東軍兵士であった面影も、郷土代表の出征兵士の姿もない。餓鬼!の一員であり、指揮者なき少数を遊兵と呼ぶは誠に哀れである。

衣は破れ靴はなしの者も多く、松田中隊長の場合は、小銃と手榴弾を携行しての転進となった。銃撃砲撃を受ける毎に兵は倒れて、二人だけ(加藤准尉》で前進を続けた。九月中旬のある日、椰子を切っている他部隊の兵に出合う。そこで「戦争が終った」事を聞く。夢ではないかと驚き本部の幹部を案じ、部下**戦没者を想い二人でしばらく泣いた**。

〔註〕

1、マニラ東方の陣地は急造の物が多かったが、将兵は戦力を最大に発揮して反撃を続けた 9 第八師団の(杉)場合第五連隊はレイテ島に、第一七連隊はラグナ湖南西にあり、師団は第三一連隊が主力となった。

2、第三一連隊では五月中旬に、前記小林大隊全滅の弔合戦の如く、光明原より敵陣内に深く侵入して、神徳山を攻撃する等敢斗したが、七月中旬より自活態勢をとり、武器糧秣もなさ苦境を南下して、終戦の命により軍旗俸焼、明治二十九年以来武勇の誉高さ、第八師団終焉(えん)の地となった。(第三連隊生還者は一〇四名、内山形県二六名)。

3、マニラ東方での戦記は少いが、野口兵団副官秘録によれば「六月一日マヨム川厚地(楠村北方)

に着き、三日レイバンの偵察命をうけて出発、五日糧秣蒐集中の主計将校に会う『泥棒に気をつける事、自衛手段を充分にとれ』と注意して、昼レイバンに着く十日には高根山東方合流点(サンタイネス〉附近に敵四、五〇〇名進出の情報を聞くと、あるが高浪連隊の記事なし、尚レイバンの地名は広範囲をさす模様。

4、歩第三一連隊第一大隊長の説明によれば「高浪連隊は当連隊の指揮に入るよう」との命を聞いていたが、終戦まで掌握出来なかったと聞く、又六月中旬の事、海上挺身基地第一四大隊員約二十名が、高浪連隊と共に東海岸に向い、食糧収集に向ったがその後全く不明という情報等があり、マ東山岳地帯には謎に包まれた問題が多い。

5、食糧欠乏の小集団の場合、北部ルソン島の山岳と同様に狂ったゲリラと化し、友軍相殺という非人問的な、恐怖的事件発生や下刺上という、陸軍刑法を犯す無秩序な場面もあったという。

戻る TOP へ 次へ

第四章 松本大隊の戦斗

第一節 勤兵団北上

一、ナガにて

松本大隊が南部ルソンのナガに着いたのは、十一月十九日で、レイテ島に上陸したマッカーサー将軍の、写真入りのビラが大型機によって散布された後である。

米軍の上陸に備えて警備と陣地構築に、多忙な連日を過す事約一ケ月で移動命令が来て、当地区司令官の率いる北進の部隊に編成された。《ルソン島右下が細い半島で、これをビコール半島という、ケソン州以下五州があり中心部がナガ市、十二月中旬の配備では、津田兵団がその任に当り、津田中将北進後は野口旅団長の指揮する方面軍直属の野口支隊となる》松本大隊は着任早々の U タウンとなり、移動準備に忙殺されたが、当時のレイテ島は米軍が東海岸に上陸後も、物量攻撃の猛威を揮う最中で、ルソン島に対してはミンドロ島を足場にして、どこを攻略するのかと日米両軍主脳が肚の探り合いとなり、津田兵団(勤)が急ぎマニラ東方に移動した。

ナガ駐屯の部隊では黒宮大隊と前後して、松本大隊は二十日出発したが「タヤバス地方(ラグナ湖南東部)大討伐」という名目で北進した《勤兵団長は十九日マニラ東方アンチポロに向った》松本大隊はルソン島南端の連隊本部と、他大隊とも分離されたが連隊長としては、片腕を失う程の淋しさがあったと推察されるが、新しい作戦に就くのであればこれは独混連隊の宿命かと、松本大隊の武軍長久を祈った事

と思う。

勤兵団の輸送計画は八梯団に分れ(主力人員は第三まで第四以下は資材を、二十二日深夜まで続く)ナガには飛行場があり、多くの部隊が駐屯し、米空軍は逸早く銃爆撃を続けた、死傷者が発生し高橋中隊の兵も十二日の空襲で負傷、.当地区兵站病院に入院の為中隊と行動が共に出来なかった《退院後病院勤務となり、北方山中に入り長期の密林内苦斗に耐えて生還する・長野県〉

ナガでは十二月中句に、在留邦人婦女手の内地送還命が出る等で、東方に美しいイサログ山を眺める町が、俄然異常なものに変化した。

〔註〕

松本大隊がマニラを出発して南下したとき、レガスピーに着き、その後反転してナガの警備に就いた。という説がある、しかし、その日程は詳かでない。

二、マニラ東方へ

鉄道を利用する事が出来て、マニラには早く着いた、ラグナ湖北方に布陣となり行軍する。タイタイ、アンチポロを経て山路を南東に進み、テレサに着いたのが二十五日、この周辺が勤兵団の防衛陣地となった(マニラ東方二十五粁程の地で東方に通じる重要な作戦道があり、後日竹中大隊がアンチポロに向って通過す)十五日バタンガス南方のミンドロ島の、南西部サンホセに米軍は上陸し、次はルソン島のどこに上陸するか等議論の最中に、山下将軍はマニラ固守を否定して、イボに移り(二十六日)振武集団によるマニラ東方の防衛を命じて、三日バギオに向っている。

《この頃野口兵団によるサンベルナルディノ海峡守備の任務が、解除されて高浪連隊北進の移動が発令された》

勤兵団としてはマニラ方面の防衛と、背後のラモン湾、タヤバス湾に対する警戒も重要で緊張の日々となった。四日空母十隻を含む米輸送船団が、パタン半島西方洋上を北進の情報に続くリンガエン湾攻撃中という戦況下の八日、驚歎すべき命令を受けた。

《振武集団長は津田中将の指揮する概ね五個大隊の部隊をガバナツァン(サンホセ南方三五〇粁)附近に派遣すべし、部隊の一部はマニラ、サンミゲル、ガバナツアン国道を確保の任務を継承すべし》

松本大隊はマニラ東方の任を解かれて、津田中将と共に（二宮、牟田、井上、大薮の各大隊)北進することとなり、十一日頃テレサを出発し車を用いて、五号線の北部山岳地帯入口であるサンホセに向ったが、昼間行動が危険な状況となり、前進が遅れて、ムニオス(サンホセ南西十三粁)に着いたのが二十四日頃となった。

第二節 撃兵団へ

一、ウミンガ、ルパオ

他の三個大隊がサンホセを通過するのに、松本大隊に停止の命が下り、早くもその一部が戦争中という撃師団(戦争第二師団)に突然配属される事になった《サンホセ北方には鉄兵団(第一〇師団・・姫路・・一部パターン半島)がバレテ峠を死守せんものと、巾広く幾重にも防禦の陣を構築中で、その輜重部隊はサンホセの軍事物資をバレテ峠を越すのに、懸命に努力していた》

サンホセより一〇時の方向に進めば、サンイシドロ、ルパオ、サンロケ、ウミンガンと続き(その間約二十五粁)ウミンガンには松本大隊本部と畠山中隊、ルパオには高橋中隊、サンホセには飯野中隊が布陣する事になった《この項は高橋メモによる、だが飯野中隊の生還者は不幸にして不明》

再度特に選ばれて戦斗師団と共に、最前戦に就く事になった松本大隊の兵には、正直の処戦車部隊についての知識はなかった。《戦車部隊の活躍では、十五年末上映の「西住戦車長伝」(西住小次郎大尉は徐州会戦で戦死、主演上原謙)を見た程度で、対戦車攻撃訓練は模型を用いて実施する程であり、陸軍の花形新兵機を近くに見ることもなかった》

古参兵の中にはノモンハン戦での、ソ連軍戦車偉力を見開した者も居たが、何故か異国の軍隊に配属されたような緊張感が出たのは、米軍近しの戦況とが荷重されていた故と思う。撃師団には機動歩兵連隊が編成されていたが、その歩兵部隊主力は高山支隊として、タルラック(サンホセ南北五五〇粁)アンゲレス(さらに南方三七〇粁共に三号線)方面に位置して、別の作戦に参加中であった。
ここで当然気付く事は正規の配属歩兵部隊に代り、北進中の五個大隊の中で、欠員の少い最も信頼出来る松本大隊が指名されたと、考えるべきだろうか。

今就いた戦線の西方では、リンガエン湾に上陸した米軍の進撃に対し、戦車の重見支隊(六〇輌)が旭師団と共にサンマヌエル、ビナロナン、ウルダネタ等の各地で十三日より、撃実しており、空軍支援の大型戦車群に対し反撃していた。

《正面攻撃は不利、且無謀な策とし、壕内に偽装隠蔽の装車トーチカとして戦い、遂に一月二十七日には蒙存の戦車に分乗して、旅団長、前田連隊長が先頭に全車敵陣に向い、突如突入して壮烈な玉砕という撃魂を発揚されていた》勇将の下に弱卒なし、隊員の中には開戦時の上陸作戦に参加して満州に戻り、再度の参戦という猛者も含まれていた。

二、撃師団

五号線の要害バレテ峠の最前線にあって、戦車部隊の指揮下に入った松本大隊の為に、戦車第二

師団を説明すべきと思います。

日本の戦車師団は四個師団あり、その通称号は拓、撃、滝、鋼で、撃は北島唯一の戦車師団である。その編成は十七年七月満州の勃利で、二個旅団で編成、その主力は、戦車四個連隊(六、七、一〇、一一）であるが、一一連隊は十九年二月に千島方面に派遣されていた。

十九年七月二十四目動員下命にて九月九日門司港を出航し九月二十三日高雄発、六連隊はマニラ(二十八日)他は北サンに上陸した。

編成時**一万五千名近い大兵力と戦車装甲車が約四〇〇輌、自動貨車.約二千輌に、機動砲兵、速射砲、工兵、整備、輜重等を含む、日本陸軍自慢の機械化部隊**であった。

海上輸送時は重量の故に速力が低下して、潜水艦の攻撃受け易く損害を多くした。

上陸後は敵上陸地点に素早く攻撃出来易い機動性を考慮して、リンガエン湾とマニラ間のサンミゲル（マニラ北東一五〇粁)に師団司令部を置き、ロスバニオス(戦六)サンマニエル(戦七連隊は重見見支隊となる)ガバナツァン(戦一〇)に待機した。〈二十年一月総兵力約六千五百名、**戦車約二百輌、自動貨車約千四百輌に減少**していた》

〔註〕

1、上記拓師団は寧安より本土防衛の為に、日本に転出し、鋼師団は関東地方にあり、中国では滝が戦力を発揮した。

2、編成摂況　○師団長、岩仲中将　　○第三旅団長・重見少将○第六連隊・井田　○第七連隊・前田　○第一〇連隊・原田○機動歩兵連隊.高山　○師団通信隊・管理　〇速射砲隊・板垣　○機動歩兵第二連隊・松岡　○工兵隊・固武　○整備連隊・米田　○軽重連隊・繁田　○患者収容隊・千葉。この総員は九一八六名一生還一六一〇名)

3、ウミンガンの兵力

○松本大隊一本部、畠山中隊、米山重機中隊他)○歩兵第六三連隊前田中隊 O 対戦軍戦斗仙波小隊

4、ルパオの兵力(米田支隊、コメダと呼ぶ)　○戦車整備隊、米田　○松本大隊第九中隊・高橋○同砲兵砲小隊・諸井○戦車第一〇連隊第三中隊(整備一個小隊)・上野　○戦車第七連隊第二中隊一個小隊欠)・江木　○同一個小隊沢西○機動砲第二連隊第一中隊(一個小隊欠)岸上、○撃工兵隊一個小隊・柿崎　○工兵第一〇連隊一個小隊・大橋　○機動歩兵第二連隊第一中隊(一個小隊欠)・吉尾　○撃師団司令部の一部(中戦車三輌) 総兵力約八五〇名余で戦車三十三輌、砲六門、機関銃十六と推定される。

三、高橋中隊の布陣

サンホセから北西に向って、カラバリヨ山脈西側の山裾が続き、その近くに道路があり、ウミンガンに通じるもので中程を過ぎた所に、ルパオ(LUPAO)という町がある。東西約五〇〇米南北約一軒の町で、南端の三叉路からムニオスに通じる三七五号線が接続していた、町は海抜ニニ八米で北のサンロケ、南のアリマルよりは低いようで、南側にはオルヒイ川、北はカマナイ川の支流が流れ、町を包むようにまがって南に流れている。

カマナイ川支流と町の間は潅木が茂り、やや高台となってそこが重任下命の決戦陣地となった、戦車整備連隊の当着が十六日頃で、高橋中隊は二十三日以降二十五日頃である。
米田支隊には元関東軍の高橋中隊配属を歓迎し、使用中陣地の一部を早速明渡してくれた。最前線の川で、川中が約二米程、.干期で幸にも水が少く連絡には便利、射撃には立射の壕として使用出来るが、一発の砲弾で多数が爆死の危険があり、横穴を掘る事になった。

俗に**蛸壺という個人壕作りの技倆**を発揮して、勝手の違う横向きの熊穴掘りに汗を流しながら周囲を見ると、後方の戦車はその姿を地中に隠し、砲だけが偽装されて出ている。西の方では砲声が聞こえて「いよいよすごい所に来たもんだ」と話しがら、志気旺盛なのに刻々とせまる異常事態を感じていた。

戦車部隊がルパオに着いて陣地構築と、弾薬輸送に活動の項、友軍の戦六(第六連隊)がゴンサレスからムニオスに、戦士主力はサンニコラスからサンイシドロ(ルパオ、サンホセ間)に、速射砲部隊主力がサンキンピンからリザール(サンホセ南東十五粁)にと各隊は一刻を争う移動の最中であった。

通信隊のいた壕に一見精悍な歩兵部隊が来たので「どこの部隊で.すか」と聞いたところ「うん俺か、杉だ」と返事するだけ、どうも無精な連中が来たものだと思いながら陣地を変った。

(通信兵は杉兵団を知っていたが、松木大隊の事は知らなかった)ルバオに着くまでに、ガバナツアンで早くも敵戦車来襲に対する、肉迫特攻隊に編入された為遅れて着いた兵もいた、ウミンガンに行けと言われて行ってみると、ルパオに行けと変り急ぎ町に入れば住民の姿をく、中隊の陣を探して戦友と会い互に安心はしたが、この陣とて近く戦場になる不安を知ったという。

四、松本大隊本部の戦斗

説明が前後するが、マニラ東方の任を解かれた勤兵団の五個大隊は、カバナツアンに向い先頭大隊はゲリラを排除してサンホセに着き、遅れた大薮大隊は再度ガバナツアン方向に戻り戦斗する程戦局に変化が起ってきた。

大隊本部が畠山中隊と共にウミンガンに着いたが、広い地区を防衛するのに余りにも貧弱な兵員である、幸にも鉄兵団第六三連隊の一個中隊(前田）が残っていた事と、撃の山波小隊が四八ミリ砲数門を構えて待機していた事は、甚だ力強いものとなった（野砲隊も居たようだが、サンホセ方面に移動!)

サンホセが五号線上で山岳地帯の関門であるように、ウミンガンはサンホセに向う道路があるばかりか、北に進めばサンニコラスを経て、サラクサス峠に至り、西に向ってゴンサレス、さらにロザレスありで、敵は今、東向きの道をウミンダガンに向いている。

ロザレス南方にある小さな三角山の正前に、敵が現われて潜伏中の前田中隊監視小隊は、二十五日ウミンガンに帰隊した（約二〇粁）二十三日ゴンサレス付近に現われた敵に対し、前田中隊より斬込隊が出撃し、同地区は決死の戦場となった。ゴンサレスはウミンガン西方一〇粁の地で戦車を含む敵(二七 R）は東進中であり(二十四日)前田中隊は二十九日松本大隊の指揮に入り鉄兵団より離れた。

ウミンガンには撃の司令部が駐屯した事もあったが、既にキラキタ方面に移動した。

二十七日に敵は優勢な攻撃を開始すると共に、一個連隊（三五 R）を南西より迂回する形で攻撃を開始した、この町が包囲され孤立している事は、余りにも明白で、日に日に接近する敵部隊の砲撃に対する歩兵部隊の反撃は、夜間の斬込戦法となった。

二十九日夜出撃の大隊長は腕を負傷した。翌日の夜も敵砲兵陣地に接近中の前田中隊では三名一組となり、三百米程手前よりほふく前進の処を、感知されて猛烈な銃撃をうけた(その夜は尾沢少尉以下四名戦死、戦傷多数）前田中隊下士官が負傷兵と共に後退の途中で、大隊長に出会った。部下の負傷兵に手当をしようと、自分が前夜用いた腕の包帯を解いて、負傷兵に用いようとしておられた。

暗闇の中で大隊長の部下思いに感激した下志官は「大隊長殿、一寸お待ち下さい。包帯は自分が持っております」と包帯を差し出した。

大隊長の慈父の如き愛情と、他部隊の負傷兵に己の生命をいつか守ってくれる貴重な包帯を、進んで提供した前田中隊員に感謝する、共にウミンガンに残る美談である。

大隊長は斬込の前進を一旦中止し、負傷兵をつれて後退するように指示すると共に「俺はしばらく残る、敵は引受けた。早く出発せよ」と命じられた時に〇三・三〇の事で、その後前田隊の者は二度と大隊長に会っていない。

二月一日爆撃はなかったが、P 三八機による銃撃とゴンサレス、タユグ方面よりの砲撃が共に激しく、夜間斬込隊が肉迫したが、遂に二日は三方より戦車を含む攻撃を受けて、戦没者を多く残す事になった。《大隊長同副官は一日戦死され、前田中隊では隊長以下六〇名が戦死、プンカンに脱出し得たのは、

四八名となり後日パレテ峠の戦斗に参加した畠山中隊では指揮班長、第一、第三の各小隊長が戦死され、大半が戦没し後日エチアゲでは二十名程を数えたのみ》

〔誌 1〕歩第六三連隊が満州三興省興山に駐屯したのは、十五年八月で南方派遣の命により(一九・七・一四)二千三百名が八月十六日に出発した、釜山出航九月二日門司で乗替えて、玉三七船団と共に南進台湾に上陸後警備につき、十二月高雄港で乗船し出航する(玉一七船団)北サン北方では第 III 大隊の乗った乾瑞丸が、二十三日に轟沈し、二九〇名の犠牲者が出た。

北サン上陸後資材の揚陸作業を実施、二十七日に出発した、アゴー、ロザレス、ルパオ、サンホセと行軍し、バレテ峠の手前プンカン付近に向う急行軍の途中で、前田第二中隊は三角山(三八二米)に陣地を構えて、兵団の通過を掩護する為の前進拠点の任につくため、暮の三十一日に先発している。

その任務先丁と共に一月十八日、長谷川小隊と通信分隊を三角山に残置して部隊を追うが、撃兵団の工兵隊作業(橋梁爆破等)支援の為に、再度ウミンガンに戻り、松本大隊と類似の宿命(選ばれた)を体験した。
（歩六三連隊は銃撃と資材損害の為に、プンカンよりさらにパレテ峠へと前進した)

〔註〕ウミンガン戦の米軍資料
ウミンガン、リサール間に対する米軍は、第一軍団(スイツト将軍、二五師、六師)が担当し、ウミンガンには二五師(一五五ミリ砲大隊、八吋曲射砲大隊、四、二吋追撃砲中隊、中戦軍中隊を配備して攻撃、二六連隊は一日に北と西から接近して、西は二三〇米まで進んだが、日本軍の MG と小銃の反撃で釘づけにされた、日本軍の対戦車砲も戦車を撃退させた、三五連隊は南方のサンロケに進み同時に一コ大隊を以てウミンガン南方より攻撃し)、二日一三時までに大部分を掃蕩した、日本軍は夜間山裾に移動したが、残りの陣地は三日夕刻に制圧した。米軍の戦死は二個連隊で四三名、日本軍一五〇名と発表す。
《畠山中隊の横沢小隊長の戦死は三日で、頑強に抵抗した隊長と推察される》

五、米田支隊の戦斗

決戦の年が明けて、米軍はリンガエン湾に上陸、三号線沿いの整備連隊は命により十日出発、カバナツアンを経てサンホセに向う。
整備軍輌等を山間に送りルパオに着いたのが十六日頃である。
部隊長は同地区の指揮官となり、二十三日師団長の命令が参謀より伝達された『何れ増援予定の配属部隊を掌握して、ルパオ陣地の死守に徹する事」戦斗用の壕や重火器の掩体構築、戦車の要塞化

等が略完放のとき、高橋中隊等が二十五日頃に当着、これらの増援部隊によって士気が高揚、翌日は整備第二中隊も復帰して総勢約九百名の米田支隊が編成された。

その頃前線の戦斗で負傷した者と、空腹を訴えながら歩く者や、移動部隊と共に邦人の避難者等が多数通過して、恰も**大震災時の如き混雑**が続いていた。

米田支隊としては、これより決死的激斗が展開される事を予想して五号線上から戦車用等の弾薬を陣地に搬入した、戦軍内はその砲弾で充満し鉄の火薬庫となり、隊員はその空間で待機した。一方サンホセ方面よりウミンガン方面への食糧輸送は、戦況の悪化と共にルパオ北方への行動が不可能となり中断された。

整備部隊本来の任務は各車輌等の整備が主であるが、この非常事態においては工具に替る兵器を握り、歩兵の行なう討戦車肉迫攻撃隊を編成して、満州で研究開発された刺突爆雷と、布団爆雷が支給されていた。戦車にて敵陣を躁蘭（じゅうりん)するか、その構造に精通の兵技兵がその立場を替えて・爆雷と同体になって行動するという、正に決死の構え、悲壮な気概に満ちてきた。

通信隊は各隊連絡に貴重な活動を続けていたが、一日夕敵砲弾にて壕が崩れて通信器は故障し、調整不能遂に本部通信も途絶して、米田支隊は聴覚を失った。

敵砲撃にて二日より戦死者が発生、三日より反撃を開始して強力な大部隊の接近を許さなかったが、南北からも包囲されるようになり完全に孤立して、七日夜支隊は脱出を決行、その最終時は戦車による囮作戦を決行して、東後方の山裾に移ったが支隊長（佐賀県）以下三十二名の戦死者を出した。

〔註〕

1、刺突爆雷とは円柱爆弾の先端に、長さ三センチ程の撃信尖頭があり、下方に長い竿が取付けてある、戦車体に刺突して爆破する。

2、布団爆雷とは小型座布団大の爆弾をランドセルのように背負い着火紐を握って車体に体当りする。

3、米田支隊がルパオ布陣の目的は、後方パレテ峠の陣地構築を援護、サンホセより物資の搬出、北上部隊の援護であり、その目的は完遂出来たと思われたのに、支隊転出令が遅れたともいわれる。九十余名が戦没。

4、ルパオの戦斗は当部隊のみを記入と思ったが、全般の説明なしでは理解出来ぬと思い、又他人との出合いを尊重する考えで、配属された撃兵団の事をここに説明した。

5、撃兵団生還者より貫重な資料と説明をいただき、感謝します。

六、高橋中隊の戦斗

ルパオ陣地の構築中に、本部のあるウミンガンには敵接近の情報が入った。中隊陣地より約二粁前方に出ている分哨では、米北軍の襲撃により重傷を受けて、三十日に後退してきた兵がいた。観測機が飛び、ルパオ陣地を詳細に報告して、撮影も実施しているだろう。

各隊の偽装が巧妙で判断に困ったのか爆撃機は来なかった、整備隊では小型の観測誰をタコ（凧）と呼んでいたが、陣地の存をを隠匿する為に、これ射撃も出来ず、悠々飛行する傍若無人の行動を許さねばならなかった。

中隊陣地はウミンガン道に近く、支隊右翼の前方にあったが、その左正方に敵兵が認められた、一日の朝八時ルパオ攻撃の砲弾が飛来した、各種火砲が前進してルパオ壊滅を意図する悪魔の第一弾であり、これより一斉砲撃となり次から次へと打込んで来る。夕方にも終る事なく夜間も続いた、翌日八時にはお寺の時報の如く正確に発射再開、,はじめの標準が後方なのか中隊陣地の直撃はなかった。

立木に登って敵状複視中の兵が狙撃されて負傷するやら、三日には分哨から帰り夕食中に迫撃砲弾にて戦死する者等が出た。敵を接近させ有効な射撃を行う作戦も、遂にその時機が到来した。ウミンガン方面を迂回した敵部隊は、五日より中隊正面を狙うように対陣し砲撃が続く(化学物資の弾もあり)負けてなるかと反撃すれば、敵は正面突破を中止して東側を遠回りに南進した。

昨日から孤立化が始まり、南面のサンイシドロも敵手に落ちて四方が敵、支隊としては当初敵の進撃方向を、三角山方面とみて戦車トーチカの位置を定めたようであるが、不利な方向に来た敵に対しても、灼熱の車内で年若い戦車隊員は渾身の反撃を続けた。

五目軽機の射手が頭部貫通で即死、六日には負傷兵を手当中の兵が砲撃で戦死(治療を受けた兵長はヨネス方面で戦没)と戦傷者が増加して血生臭い戦陣となった。

ルパオが包囲される前に、重傷者をサンモセ方向に移した衛生兵が、山裾の細道から中隊の陣に戻ろうとした処、戦車隊（戦十と思われる)の下士官に呼び止められた『どこへ行くのか」「ルパオの中隊に帰ります」と答ると「向うをよく見い、ルパオは攻撃を受けて、とても行けたもんではない、しばらく様子を確めよ」と足留めされ、**後日一諸に山中へ移動**した。

支隊には野戦病院はなく、本部に布村軍医と中沢衛生准尉がいて、二日頃までは手術も可能な状態であったが、以後応急処置のみで、医務室は三日頃位置を変えた。この頃の夜間逓信隊の兵に、医務室位置を聞いた包帯姿の二名が通った二人は高橋隊准尉と思われた)死傷兵が多く小隊長に代り下

士官が代行、中隊として患者を後方に移す事を考えたようであるが、今やその希みは銃砲声の中に消えてしまった。

七、ルパオ脱出

ウミンガン、サンホセの防衛陣も厖大な火砲を有する物量戦に崩れかけて、最後の砦となった。脱出の計画は六日頃より出でいたようであり、遂に七日夜に決定した。

「不要品は持つな、地下足袋着用」合言葉は『山と川』と定められ山地に向ってどの道を選ぶかは各隊で決定、その巨離約五千米で且包囲された敵中の事、無血脱出は到底希めない、戦車の一部は攻撃を受けながら囮となる作戦となった。中隊主力陣より一寸離れた壕の兵が、夜の八時ごろ出発命を聞き、集合地(通信隊陣地)に来て見ると人影なし、エンジン始動の戦車と共に出発したが、戦車は破損されて暗闇を無中で進んだ、その夜散歩哨線が通過山出来ずに、溝の中に草を被り息を殺して潜伏し、翌日ようやく成功した者もいた。

東方山中に入った処は各部隊が入り乱れ「オーイ○○隊」と呼ぶ声も涸れて、中には「元気を出せ」と気合をかけられている者等り喧喋さがあった。サンホセ方向より鉄兵団陣に砲撃もあり、バレテ峠へと登った。

ルパオ東方の山路は標高七百米程を越えて、五号線に出る、デグデグ辺で中隊の集合が出来たようであるが、生き残った嬉も湧かず隊長以下バレテ峠を越す事が出来た。

哨戒機と銃撃で行軍は夜、昼は木蔭に休み食糧も少い、ある回想として「うん、まんず何もなかった、でも山中で籾を探した時はうれしかった」と、敵砲弾の苦痛が空腹に変ってきた。

八、連隊砲中隊の布陣

この中隊は満州の昂々渓第二〇一連隊より、当連隊に編入された、郡山中隊長に第一小隊長小林融少尉、第二小隊長諸井義弘少尉が任命され、各小隊は砲二門を持って勇躍チチハルに向った。
《砲は四一式、明治四十一年制定されたもので、強力な破壊力と敵陣を圧倒震骸する強力な威力は、歩兵の敵陣突撃に欠かせないもので、満州事変頃より徐々に歩兵連隊に配備されて、歩兵砲という。
口経七五ミリ、砲身一、三米、射程六、三粁》

諸井小隊の場合、レガスピー附近で北上の命を受けて汽車に乗り、ナガ付近で下車ラモン湾に向けて行軍した。住民に弾薬庫をひかせて、マウバン近くの海岸線にある椰子林に当着したが、その日は十九年のクリスマスイブであった。開戦当時日本軍が上陸した地点で、米軍も上陸するか!との想定で海上挺進基地第七大隊(内田大尉以下約百名一が駐屯して、他の各戦斗部隊も集結し、上陸阻止の緊張した

陣地構築中であった。

砲を構えて待機の処約二週間程で異動の命、馬をもたぬ小隊としては困難な行軍を続けた、ラグナ湖畔に出て《ザンタクルツ附近》船に乗り、西岸に上陸し五号線を北上の処に、撃部隊というトラックからサンミゲル付近で呼び止められた。トラック三台に分乗して疲れた手足を休めたが、どこへ行くやら不明、他の部隊から歓迎されて、客人扱いされては、入営当時の初年兵のように後が恐ろしい戦局の急変(米軍上陸)でいよいよ重要な基地に着くのかなと、新しい昂奮が起る。

ガバナツアンを通過後遠くで雷に似た砲撃音を聞く、自隊の砲に比すべきもなくでかい炸裂音に近づいて、夜半着いた処がサンホセ、北上する部隊と各種車輌の混雑する闇を抜けて、さらに北進約一時間程で停車、ルパオ部落である。各種部隊が既に当着して夜間もざわめきが残っていた。

町の西方には各種部隊が陣を築き、戦車は掩体で砲塔のみを出して開戦準備が完了、野砲や速射砲もある様子で力強い、大陸の北支山西省で八路軍のトーチカ攻撃をした事があった。その反撃が猛烈の為に、手をやいた事を思い出し、今はその守備側に居る事を悟りながら、高橋中隊の左端に砲間隔約三〇米に構築を急いだ。

部落には竹薮多く、椰子、パパイヤ等もあり陣地周囲は荒れた耕地と芒も生えてその緑も美しく見えた。二十七日頃の小隊の金子指揮班長以下五名が、小哨として前方二軒程に出ていたが、米軍二世部隊と思われる一隊に急襲されて、四名戦死という不幸な事が起った。生残りの柴田上等兵により、小隊長に報告された。

前方地形と敵情調査の小哨に対し、日本軍将校と兵の服装した小部隊が近くを通り、後方に迂回して襲撃したもので、通過を許した者の賃任ではない一歩哨線の出入老許す守則の中に通過を許すものとして銘記されている)この事を知っての許し難い好策によるもので、小隊員はその死を悼と共に「仇を打つぞ」と敵愾心を燃した。それから数日して（一日)黄色の観測機が上空に近付き、昨日までは遠くに聞いた重砲弾と、三連装と思われる迫撃砲弾の本物が、遂に飛来して炸裂した。

九、歩兵砲の戦斗

昼近く散歩兵部隊が西方二粁程に現れ、散開して除々に進んで来る。榴弾を込めて待機、巨離千五百で発射歩兵部隊に命中、双眼鏡で見れば白人の将校が、幅を握って黒人兵らしいのを立ったままで指揮をとっている。敵ながら豪肚というか度胸の良さに驚く。さらに無神経なのか日本軍を甘くみてか、観測機からは手榴弾を投下するので、上空の油断ならず、敵砲撃は休みなし、敵は負傷兵の収容の故

か独立家屋に出入の多いのを発見し、早速発砲し、三弾目で家屋を粉砕した。

初戦にしては大成功と満足したい処に、敵の三装連迫撃砲はそのピッチを短縮して打って来る。砲弾の節約を知らぬ敵兵には困ったものだ。それ等の目標に応戦中は、無中というのか敵弾の落下も気にならぬ(どちらが先に泣き出すかの子供の喧嘩並)敵敵兵は八百、五百と接近「敵もなかなかやるもんだ」と思う頃、高橋隊より重機軽機が一斉射撃を開始、敵の前進は停滞する。

小隊には砲弾が充分あり、現役三年兵は北溝の訓練技術を充分に発揮して、流石によく奮斗してくれた。分隊員十一名中三名戦死初年兵に多く、砲撃の発射間断のよみと壕内の孤独感に耐え切れぬときが危険といわれる。

戦斗の最中に、砲身の直前(O・五米程)に着弾したのが一発あった、これがもし不発弾でなければ、分隊が玉砕したと思った時に、血の止る程驚いたという(敵弾は十五米程に三発着弾の精能があるのに、不発弾は割に多かった)

砲撃を利用して前進の**敵兵第一波の進行を頓挫させた**が、その後の砲撃も衰える事なく、陣地を確保すれば死傷者増加と判断の小隊長の命により、陣地変換を開始して部落内に移動の途中、**前方五米程に砲弾が炸裂**した「ガン」という音と共に熱いものがパッと全身に飛散って来た、帽子、上衣がぶすぶすと燃え出すという厄介な代物、これは大変と手で払えば手が燃える、地面にころがって火を消す、黄燐等を用いた焼夷弾で、焼打ちとは全く腹の立つ話、これが榴弾であったならと考えると、短時間に二度も生命が残った事に感謝した。それまでの戦斗で**沈着勇敢に活躍の砲手高橋上等兵は上半身と腕に重度の火暢をした。夜まで続いた砲撃により家屋は崩潰又は焼け、椰子の木は折れて薮内の戦車砲塔は露出、焼夷弾によって小川の水が黄変し、丁度火事場の川下の様**に汚れ炊飯の出来紅一夜を迎えた。

第三節　下見大隊に改編

一、北部ルソンへ

勤兵団として北進の榎本大隊は、撃兵団に配属されて、ウミンガン、サンホセ地区で激戦を続けたが、大隊長同副官、飯野中隊長、米山中隊長以下多くの戦没者を出し、負傷者も多く戦力を半減した。

生存中隊長にて隊員を掌握して、パレテ峠を越え北部ルソンに移動する事になり、アリタオ、トパックス、オリオン、コルドンと行軍したが、各地で食糧を集め又は待機となり、他の移動部隊と同様に、出征時の

勇壮さは消失していた、この間大隊の再建のため下見少佐の率いる部隊と改編されて、下見大隊となったが、下見大隊は飛行場大隊であり、戦車部隊に続いて又も特殊部隊将兵と生死を共にする事になった。これらの移動部隊は北部山間に待機させ、バレテ峠の予備軍として、又はルソン島北部から五号線を南下する敵に対して、決戦の機会を与えようとする計画と思われる。

元松本大隊は悲惨な戦斗経験部隊で、一方は北部ルソン防衛に移動中という略無傷の部隊で攻撃精神は旺盛にみえた。その中で特に威勢の良い軍医大尉が居て、指揮権について歩兵中尉と激しく口論する場面もあった。

サンチャゴにて五号線と別れて直進し、エチアゲまで進みミリタより南進して、ヨネスに向う、即比島最長のカガヤン河の上流地区に進む事になった《部隊によりエチアゲより更に東方山中に進んだ部隊がある。父カガヤン河はルソン島南端のアパリに河口をもち、カガヤン平野を南に蜿蜒(えんえん)と伸び、節度で約二、五の間約五〇〇粁もあり、日本最長の利根川三二二軒と比較を乞う》

パンガルの河を渡りヨネスの渡河点では、対岸に武装ゲリラが構えているとの情報で、慎重な渡河作戦を実施して、大わにが住むという河を舟を用いて無事に通る事が出来た。
この頃の住民は予想に反し、隠健にみえ軍票が通用した。これより更に南の谷合に行軍する事となり、本部は河西方の道をトンカブピナパガン、デイトヨン、デピンデン、デベットと進んだ。

《高橋中隊はヨネスより本隊と別れて、西側のアダラン川を南進したと推定されるが、地名変更もあり確認出来ぬが、途中アカットにてマラリヤに感染された者多く、密林を踏破してピナバカンに着いた》
各隊が各地に駐屯し、警備と食糧収集に勤め、六月上旬には健康な者がオリオン峠に出動して、パレテを突破した米軍と抗戦し、多数の戦死傷者を出した。(前記章殿大尉は重傷を氏い、畠山中隊の外井小隊長等が戦死された)

バガバックより北方のラガウェ方向と、オリオン峠より東進する米軍の攻勢が続き、カガヤン河上流地区の各村落には、銃爆撃が反復され、ゲリラの活動が頻繁となって犠牲者も出たが、栄養不良の体には、マラリヤ等に感染しやすく体力を消耗する事が、最大の恐怖となった。
九月下旬に高橋中隊はデペットで終戦を知り衰弱した重病者をも助けて(竹を組合した棧を利用する等)ヨネスに向った。

中隊長の部下思いと同県人が多い事もあって、最後の戦友愛を発揮した。他の小部隊から見離なされた病人が、路傍に倒れ「水をくれ」と弱々しく哀願する姿もあったのに、**已の身も弱って通り過ぎねばならぬ事も苦痛**、その昔、吹雪の八甲田山で凍死体を「見てはならん」と命じられた如く、**何か非人間的**

な行軍となった。

ヨネスで米軍の車にのり、デグデグよりダクバンを通りマニラに向った。ヨネス南方にはバレテ峠附近より東方山岳の密林地帯に入り、カガヤン河上流に着いた時は、終戦後であったという部隊があり、五千余の遺体(車むす屍会資料)が残されたと聞くは誠に哀しい。

シエラマドレ山脈を東に見るヨネス奥地に、駐屯の間には、畠山中隊長や、ルパオで戦傷の千田小隊長等多数の戦没者が出た。

二、下見大隊

第二一七飛行均大隊(威一八四四八)は、十八年五月三十一日福岡県の大刀洗で編成、楠大尉以下約三百名が、十月八日門司港を出航し途中高雄港に寄港した。

魔のバシー海峡は無事であったが、マニラ湾で海没し大隊長以下約半数を失った。リパの飛行場に着き下見新大隊長が着任する。

方面軍直属の第四飛行師団(翼)の第一三三航空地区司令部(戸根木中佐)に反し、内地から飛来する航空機を迎える準備が充分に出来たのに、次の実現もなく戦局の急変となり、一月下旬五号線を北上してバガバックに移った。

新戦況に構えて各種部隊が現地の臨時編成替を実施、戸根本中佐は新設の第一六大隊長となり、オリオン峠に向った。

下見少佐は、撃兵団下で損害を受けて、北進中の松本大隊の再建に就任した。後日同大隊副官に就任した本田日誌の概況を借用すれば、一月中旬にバレテ峠を越して、トラツによる患者輸送の為サンホセ、バガバック間のピストン輸送につく、P・三八の哨戒にて昼間は不能夜間の行動を相方的に続行する。

血なまぐさいこの輸送も一段落の処に、部隊は解体されて松本大隊再建の為、大隊長と三月七日バガバックを出発す。

翌日後方のバガバックを見れば爆撃により大火災、オリオン、コンドン、サンチャゴと野営を続け、十一日は筏で渡河、ヨネスに着いて第十一中隊附となる。

前記の如く慎重な渡河の後、パラガオ、フグ、イネマータン、マサヤを経てヨネスより一粁のダヴイクには十五日着いた、当初は住民が協力してくれた、三十日よりピナパガン(現マデーラ)に六月十三目まで居り、ここで地区の監視隊長を勤めたが、米空軍の攻撃目標となり退避が日課となった。

ダヴイクに移りニケ月程して、動ける者は全員「オリオン峠防戦」の命により、約七五粁戻った、粗末な防衛陣地で、全滅的大損害をうけた。

七月下旬よりデビンデンに移り、凶悪に変ったゲリラと斗い、空襲待避と斗病の生活の連日となったが、追い詰められるように、狭谷の村落にありながら、生命を保持し得た少数の者こそ戦没者に比して幸福というべきである。

〔註〕

1、当地区に駐屯の部隊名は、次の如し、

○下見大隊(勤) ○第五輸送隊○サンチャゴ野戦病院

○第七輸送隊(海軍) ○航空各部要員○エチアゲ航空地 区司令部 ○福島部隊○イピル飛行場大隊(第五一飛行中 隊)○同気象隊 ○鉄兵団 ○師団司令部 ○徳永支 隊(高千穂部隊で五号線東方の鈴鹿道で活躍した)津田支隊(鈴鹿道の歩第一一連隊) ○戦車撃滅隊。

2、松木大隊長戦死(御遺族住所不明)、高橋中隊長は帰国後入院されて病没、飯野中隊員現在不明、戦斗の詳報を書けぬ事をお許し願います。

ルパオの壕中にありて歌える

本井邦行(米田支隊通信)

一、ウミンガンは敵に囲まれ
わが守るルパオ危うし
カラバリヨに陽昇れば
三角山がすみて遠し

二、サンマニエル丘を血に染め
戦七はすでに玉砕けぬ
砲爆はムニオスおおい
戦六はいかにしありや

三、サンシドロ戦十あれど
その東サンホセは廃墟
今ははやスパナをすてて
たこつぼに銃をかかえむ

四、高橋隊右を固めて
井手隊は左に備えぬ
薮かげに戦車の砲塔
上野隊昨夜布陣す

五、田中隊間隙うづめ

野坂隊八号路扼せど
サンロケに敵はせまりて
観測機ルパオを睦れず
六、夕闇せまりきたれば
兵らみな壕より出でて
躯をぬぐい飯を食むなり
今日一日われら生あり
七、南の星のかがやき
戦斗のまぢかき静寂
うつけくもすぎにし二十歳
ルパオ野に明日は果てむか
(前報に一部記載したが、見事な説明にで全文を紹介)

戻る TOP へ 次へ

第五章 回想集

一、現地召集

満州国が独立し、大陸に新しく王道楽土の建設をという国策に基き(帝国の生命線とか守れ満蒙、の言葉がよく用いられた)**零細な農村救済の目的**もあって、昭和七年より四次にわたる試験移民に続き、十一年には「満州農業移民の二十年百万戸移住計画」が出来た。内地で訓練をうけた開拓団の著者が(二十歳以上農業経験者)が各地より団服に身をかためて出発した。

北陸の敦賀港で彼等や、後発の「大陸の花嫁移民団」を私も時々見送ったものです。ドラと汽笛の響く甲板で、祖国に別離の胸を傷め乍ら真剣に手を振る姿を思い出します。

現地に於ける彼等の生活は、地元壮行会の如き希望に満ちたものではなく、寒さ酷しい大陸の気候と、未開発の大地に対し、粗食重労働の著者の斗いであった。中には規律健康等で新生活に耐え切れず自殺する者も出た。

匪賊対策の軍事訓練や夜警の勤務に就いた。年を経て収穫もありようやく明るい希望が持てる頃、南方戦局の悪化による召集令状を受けた者が多い。移民団以外の青年にも「狭い日本に住みあいた」拡大な大陸での成功をと夢みて、大塵に渡満した者がいたが、彼等にも召集があり、異国に妻子を残して入隊する事は内地で想像出来ぬ不安と苦痛があった。

此頃家族と共に渡満した移民団の一人、安江氏に十九年五月に召集令状が来た。「子供をたのむ」と別れを告げて、妻子に見送られて入隊、最愛の主人なき後の開拓団生活は、一層酷しくなり国策協力者として来たのだ。負けてなるかと働き続けた処に、二十年八月ソ連軍の越境、信頼すべき関東軍は微力で抗戦も実らぬ、開拓団員は避難移動の連日となる、食糧不足で幼児二人は病死、団員の中にも死者が出る。

終戦後約一年でようやく内地に引揚、夫の武運長久を祈った連日精進の甲斐があって、北満で高浪連隊に入隊後比身に征ってた夫が復員した。歓喜の中に「お互に戦争中のいやな苦労を忘れて、再出発だ」と家業に精根を傾け、ようやく子供の成長を知る四十八年に夫は満州と比島の過労が出たのか病死。

深い悲しさ、不幸な人生と泣き崩れる事もあったが、何とかして立上ろうと、思い出の深い遠い満州当時の事を、歌に書き残したいものと決意して、短歌を習い始めたのが還暦の年となっていた。

瞼に浮かぶ回想の歌集「無蓋貨車」を自費出版したのが五十二年である。出征兵士を見送った開拓団の家族にも、兵士に似た異国の苦斗があったのです。

歌集よりその一部を紹介します。

- 哀調をわびたる騾馬のなき声をまどろみ聞けり入殖の夜
- 知人らに鍬の戦士と見送られ来し北満にふる里偲びぬ
- 第二乙補充兵なる夫なりき召集令状のついに来たれり
- 北辺の守備を兼ねし開拓団まさに根こそぎの動員となる
- 六名の手等を連れの集結に前途暗らけど互にはげます
- 何物も捨てて逃れし三個頂背の子の息あるやと子等に聞きたり
- 三個頂の襲撃さるるも再度にて恐怖と不安に自殺者いづる
- この惨状誰れか祖国に伝えよと自決決意の団長の言う
- 絶望の我等の前に蒋総統の命令届きて命救わる
-

二、学童疎開

五十四年の末、神戸で「語りつごう戦争展」が開催され、各種の展示品の他に、パネルデスカッションがあり題名は「学童疎開を考える」であった。戦災から学童を保護する目的で、遠い田舎に避難させたが、当時の学童、引率の教師、受入れた村人の苦労話が発表された。当時の状況を知らぬ私は、関心をもったが何せ育ち盛りの食欲旺盛な子供が、親元から離れて、飢えた小羊となり栄養失調となったり、生活の変化、発病や人間関係で苦労した様を聞く事が出来た。学童疎開は各地方で実施され、多くの問題の中に、学童が発病しその伝染病が村の子供に感染して、村の子が死亡した例がある。

その父親が出征兵士となると、村中の大事件となり、村長から北満の中隊長に電報がうたれる、電報は人事係より本人に伝達された。出征兵士にとっては、自分の子を失う哀痛に落胆、誤報であれと祈るばかりだが、出征時に別れて今日の軍務の重要さを考えると、人前で泣く事も出来ず葬式に帰国しますとも言えない、本心は父親を見送ってくれた娘の顔を思い出し、自分の手で埋葬してやりたい、力なく哀しみに暮れる妻を慰め、村人にはお礼を言わねばならぬと考える。しかし故郷は遠く国境線は近く、軍務に忠実な古参兵は、前記の結論を出して、淋しさを口にする事はなかった。

語変るが子煩悩の兵は比島の苦しい山歩きの転進途中でも、内地に残した子供の事を思出すらしく、妻の事は口には出さぬが**子供の事は話題にす**る。マオー野砲隊の古参兵が私共小隊と共に転進のある朝、小隊の下士官に話しかけてきた。「軍曹殿の家には子供がおりますか」「まだいないがお前の処はどうだ」「女の手が二人おります、一寸は大きくなったかなと思いますが、早く会いたいものです・・・」と子供の事

を説明した。その日の午後、前方を進んでいる尖兵が敵と接触して、一斉に迫撃砲を発砲してきた。後方の川を歩いていた我小隊も、足を止めて密林に遮蔽された木の根元や土手に身をよせた。

日本軍が川添いに来るのを予知してか、砲弾が頭上で炸裂し、その破片が不連にも野砲兵の頭部に当り私の目の前で即死、近くに負傷者も出た。
「なぜ朝早くから自分の子供の事を話したのかな」と不幸な野砲兵の死に同情したものだが、父子の絆と予覚があったのか、と冥福を祈った事がある。

〔註〕
十九年六昼二十日大都市の学童集団疎開が閣議で決定、親戚をたよる縁故疎開もあり、山村僻地に移動した学童には、のみ・しらみ等の衛生害虫に悩まされた者も多い。しかし比島の学童は長い戦争中、学校を離れて山村を逃げまわっていた。

三、被服係

歩兵部隊には兵器被服、その他日常の訓練に必要な陣営具を、保管支給修理交換、又は返納等の任務を担当する古参の下士官がいた。日常の業務は真面目で、やや頑固型の係助手が実施していて、初年兵にとって助手の古参兵は、殊に他の内務班の者であれば、とても怖い存在であり、被服係の場合では修理に出す軍衣や襦袢(シャツ）の洗濯が不良であったり、編上靴の底にある鉄の鋲近くに、土でも残っているものならビンタの材料となり、「これをなめろ」と気合をかける者もいた。

十八年に私はその助手に任命されて、気付いた事だが他から見る程楽な仕事ではなく、取扱う品種が多く新品と古品、それにガーゼ袋の干パンは再度の演習にもまれで減量、員数主義の軍隊は町から購入して補充する訳にもいかぬ、季節の変化毎に交換する時や又は隊員の転入転出時、隠れた苦労があり、終日休む間もない事があった。

十九年の春内地から若い初年兵が編入のとき、私は同助手を下番して教育係助手となった。このとき日常無口な被服係軍曹を驚歎さ.せる事が起った。
長い貨車輸送で内地から北満に着いた初年兵の一人が、列車から.靴の片方を落し紛失して到着した事である。片方では生活が出来ず、一足代品を渡す事もないのが軍隊、一寸大きいが片方だけ倉庫にあるのを幸に(員数外)これを受取って渡した、初年兵に対し特殊に罰はなかったが、ちんば靴という気の毒な結果となった。

戦後三十年余も過ぎて、同小隊員であった昔の初年兵が、北海道から兵庫県の私宅に来て、話の

途中で私が忘れかけていた片方靴の主人公である事を聞いて驚いた。

又満州の同師団の兵で、国境近くの達音山警備隊に派遣中に、高浪連隊に転属した兵がいる、急いで中隊に帰り一装用(第一種軍装で非常用の新品)の支給が当然あると考えの処が「上官の命により交換せず」という冷酷な返事の為、古い服を着用の侭に出発した。《戦場に向う兵に対する奇異な取扱い！》

比島に征き早くから服が破れて苦労する、復員後昔の被服係助手に再会の秋「お前は薄情で題通のきかぬ男だ、あのボロ服でひどく苦労したぞ」と文句を言ったと聞く。
世に「食物の恨」はあるが、冷酷な取扱いを受けた軍隊に対する『被服の恨」も又、甚だ強烈である。

四、蝋燭(ろうそく)

昔海軍通信兵が糧食と、蝋燭を間違えたという失敗談がある程、蝋燭は軍隊では大切な品物であり、照明用として利用され、無煙燃料として炊飯用にもなった。

ここに書くのは一寸ばかりおかしな話です。チチハル編成の部隊が釜山に着き、乗船までの訓練の間に航海中の注意や、上陸時の訓話が休む間もなく実施された。この教育を学科と称し、大隊本部の幹部、軍医、中隊幹部と過密な計画で実行されるのを熱心に聞いた。どこの戦場に行くのか不安なとき、その量が多くて正直消化出来ない、頭から溢れるばかりの話となった。

その中で衛生に関するもので、説明者こそ忘れたが次のようなのがあった。「お前達は若くて元気がよい、某地に上陸したら女性が目につくであろう。だが一般の地方人には絶対に手を出してはならぬ、違反した者は厳罰に処す」「さらに恐しい事には皆悪質の病気を持っている故に、よいかこの病気に感染したら最後、**大切な処が先の方より蝋燭のように溶けてなくなるという情報**がある。皆は帝国軍人として不名誉な結果とならぬように、我慢するこそ肝心である」《この話から日本上陸の希望が消滅、野蛮な国に行くのだと気付いた》

地方人であれば胸中ピンと感心する余り笑顔となるか、拍手が起る処ですが、ここは軍隊兵は神妙に聞いたものです。学科が終って「おい、良く聞いたか、お前は手が早いから注意しろよ」「何を言うかお前こそ危いぞ」という冗談が聞かれた。

乗船中の海難を考えると、このお話は上陸出来たらの話であり、幸にして上陸出来た我部隊の戦況では、住民避難と栄養の欠乏により、此種不名誉疾患の話はなかった。

元気旺盛な兵を管理する軍隊では、この道の配慮も格別なものがあったようで、説明も又奇抜であった。

厳冬の北満で夜間の歩哨には防寒半袴の着用が許された。上質の素材を利用したもので、腰下の保温には優れた品であるが、寒気で指先が不自由の為股釦のかけ忘れをする事が多く、寒風が吹込み凍傷になるぞ、蝋燭になるぞと教育された兵にとって、南方蝋燭は無縁の事ではなかった。

五、出航

五十四年の秋、神戸港を出航し博多行きという県主催の団体旅行に参加した。その夜「関門海峡通過中」という船内放送で、私は客室から甲板に出た。どうしても陸地の景色が見たいという衝動によるものです。

十六年八月二十二日前日は日本最後の夜を、大阪大正区の小学校で過して、釜山に輸送船は向っていた。下関側の陸地を眺めて「日本の陸地よ、さらば」と悲哀に似た訣別をした経験がある。召集令が来るまで約二年、私は山口県に生活しており職場の人々に「さよなら」をつぶやいたようでもある。

十九年の夏、新部隊に編入された私は、南方征きの輸送船に乗って、釜山から門司に着き下関の彦島近くに停泊のとき、積荷された南瓜の横で「今度こそ二度と見る事もないだろう」と下関方面の景色を円い眼鏡を透して凝視した事を走馬灯のように思い出された。

古い事なのに胸がせまり、涙が出た、何故か軍服を着用の頃は涙がなく、「お母さん」の声もなく、あの頃は砂漠のような、軍隊人間に変身していたのか、それとも年齢の差であろうか。

昔の関門を結ぶ交通は連絡船のみ、今日では海底深き地下道あり橋ありで橋桁には赤い灯が、怪しく見える、死出の旅路という当時からすれば、少数の生還者の一人として、今日も生かされている嬉も湧く、その甲板で熱心に関門の夜景を見ていた老人から親しく話かけられた「遠い昔の、出征時を思い出し、何だかじーんと来ましたよ」と、出征経験者には全く共通の心境になったようです。 出航から航海中に大変な事は、警戒、食事、狭い、船酔、排便と数多いが、無事に航海出来た者には苦情を言う資格がないように思う。

釜山である輸送船に乗り、狭い船室に落付いた木戸分隊は「その分隊は直に下船せよ」の命を受けた。軍装を整て多少しぶしぶ乍乍ら波止場に降りたら「あの船に乗れ」の指示で乗替えたのが幸運の港、門司で山形や熊本の部隊を詰込んで出港する。何日かして航海中多くの海没船が出た、その中に初めに乗った船名(摩耶山丸一万屯と思う)を聞いた時は、「まさか！」と己の幸福に感謝したと聞く。軍隊とは別名運(ウン)隊とよぶ所以でもある。

六、野犬

マオー町の夏山に点在するニッパーハウス(車葉作りの家)を借りて、一個分隊が宿営していた頃、近くには椰子林があり、その根元に深い蛸壺の散兵壕を作り遮蔽(しゃへい)も完成した。十九年十二月には飛行機による銃撃も開始され、我々の陣地も敵の攻撃目標にされている不安と共に、補充なき食糧事情による南方給与だけでは、どうも腹の虫がおさまらない。夕方ともなると内地や北満の食事が思出されて食べる事が話題になった。

酒保や店がある訳がない。ようやく知り得たバナナの熟成方法を真似て、木箱の中にバナナの葉と共に容れた青バナナが、黄色に色付くのを唯一の楽しみに、交替で各種の勤務に出た。夜になるとハウスの近くに野犬が(飼い犬かもしれぬ)近付いて徘徊している事を知った。これを何とかして捕まえようと話が決ったが、家の四方は枯葉で出来ていて隙間があり、そこから小銃で撃つのは簡単でも、銃弾の浪費と銃声を発する事は許されない。罠(わな)や捕獲用具もないのにどうするか、相談の結論は、ロープで首を締める方法と決めた。味噌樽を横向きにして家の裏に置く、底には配給された大切な骨付き肉を、針金で固定して、樽の入口には太さニセンチ程のロープを輪にして、その一端を屋内に入れ、兵が交替でこれを握る。

準備完了、夕食後周囲が暗く静かに待てば、犬が来て、樽底の肉を発見それではと首を入れる。合図によってロープを引張ればよい、犬は我等の栄養源にと早変り、蛋白質の補強により明日の勤務には一層の活気が湧き、御奉公に精が出るという理屈である。

仕掛は悠々、屋内の会話も統制され灯火は消す。只静かに犬を歓迎するのみ、何も知らぬ犬は予想したように、首を樽に入れてと考えていた人問の知恵とは大違いで、犬は樽の四囲を静かに点検、座り込んで考えている様子、「どうも臭い、しかし肉も取りたい」おそらく舌をなめ乍ら考える事三〇分余、待ち切れぬと犬は静かに前足をかがめて、後足と首を伸して肉を咥えて引く、コト、コトと音が出る、先程から息詰る程緊張のローブ係が強く引く、ウウと声を出して、締るロープで耳もちぎれんばかりの処を輪抜けの術、手ごたえありと引いたロープ係は後に倒れて、初日は失敗。反省により改善の方法も、翌日はロープを切って逃られた。犬の行動は敏捷で歯の切れる事驚くばかり、次の夜こん棒係を得機させ、逃げる処を一撃する事により目的を達成した。

厚地が敵に包囲され、迫撃砲弾が飛来する頃には中止したが、今度は砲撃で飛散した肉片を犬が狙いそうになる。転進中も野犬を貴重な蛋白質として注目した。

七、汐汲み

この題名からすれば、歌舞伎舞踊に出てくる"海女の松風〃から、変身した、美しい人形の汐汲み桶

を肩にする娘さんを、想像したいものですが、**兵士の生活には無縁の事**です。

北部サマール島の名もなき山々に、細く続く小路や谷の小川を進む部隊の中に重機中隊指揮班と一個小隊の将兵が居た。重い銃身と脚部に加えて、多量の銃弾を分配した背のうを背負う、小銃兵に比較出来ぬ重労働であり、食糧もなく連日の暑さ、雨で滑る山路を、痩せて胸部の肋骨が見える隊員が、一歩一歩と進んでいた。

中隊長も脚部を担うという総力で、兵器を担送し続ける姿は、従軍画家の油絵より美しいものに見えた。内地の訓練では見聞する事の出来ない模範中隊として、銘記されるべきと感心したものです。

転進の間銃弾の一部を、小銃隊にも持たせたとはいえども、人間の体力は予想以上に強靭なものと感服したが、後日聞いた話では周到な準備により、活力を支えたという。

マオーの町でルソン島に渡るべく、船を待つ間に食糧の支給は徐々に減少する。北部海岸に米軍も上陸し船舶は来ない、補給が杜絶して山地に移動した場合に、一番困るものは何かと考えたのは指揮班のＴ伍長、「それは食塩だ」と気付いた着想は賢明である。

軍馬のまぐさに塩が用いられていた事と、大昔から塩を大切にしてきたではないか、炊事にも余裕のない様子、今のうちに貯えるべきと考えても、悲しい事に山国育ちで、製塩技術も知らぬ、近くの海にも塩分はある。ものはためし海水を炊いてみようと、飯盒で運び煮つめてみた。徐々に塩珠が濃くなり、底の方から上る気泡の様子が変り、周囲に白い結晶物を発見した。理科の実験する学童の如く喜び、これはいけると連日交善で塩を作り、別の飯盒に蓄積した。

行軍中此の塩を少量ずつ使用する事により、転進の重労働に耐える根性を支えたいという。
戦後私は山口県に住み、北満部隊で知った当時の士官候補生二人と共に、元の部隊長殿を迎えて会食を開いた。物質不足の時代合成酒を買って「将軍と参謀と兵」の会食となる。

元部隊長のお話によれば公職にも就けずに、徳山の浜で塩焼きが日課という、元部隊長殿の汐汲み姿を、それまでは到底予想出来なかった。
《北部ルソンの山には岩塩があり、塩分を含む川がある。大部隊では、ドラム走で塩作りを実施している。地図でアシンの名がつく地名に関係あり》

八、四角な餅

「おい、今日はどれ程歩くのかな」と小声で語し乍ら小路を進んでいると、前の分隊が止るので自然に皆が止る。どうも停止時間が長い様子で腰をおろす、今朝の行軍は速度が遅い、尖兵が進路に迷っているのか、それとも何か異常な事態が起ったのか、出来れば芋畑でも発見してくれたら良いのだが、休憩が長く小銃を握って眠りかけた兵も居る。

上を見ると南方の木は良く成長するのか繁茂して、一面に頭上を覆い一寸だけ青空の見える隙がある程度で、木や草の名も知らないが種類も多い。

「腹へった」誰が漏したのがその声で、それまで瞑想に見えた兵士が口を開く「何かたべたいな」「何が良いかな」「ぼた餅たべたらいつ死んでも良い」と子供の時の無邪気な姿を思出して話しかける者が出た。「俺は餅が一番だ、毎日でも良いぞ」こんな気休めの会話に、他の分隊からも声がかかる「処でこのくらいの餅が天から降って来ないかな」と両手で一辺が三〇センチ程の四角い餅を説明している。

賽子のような餅とは見た事もない。彼は疲れて内地の餅を忘却したかぼけたとは思われないが、話としては面白い、「何日でくえるかな」と質問するのが居る、空腹集団の話題は、こんな冗談で明るさを開発する。

一辺が三〇で、三センチに切れば千個出来て、一日に何個食べるかなと、絵に言いた餅は所詮夢に等しい、計算をするのも馬鹿らしい。

「出発準備」の声が伝わって、会話に参加せずに家庭の事や、戦況を案じた兵と共に立上り、前進を開始した。今夜の露営地が定ったのか速力が早くなって来た。

戦後三十五年も過ぎて、元重機中隊生存者の会合があり、翌日は鳥海山にバスで登る事になった。鶴岡で乗ったマイクロバスは、左に日本海が見えて快調な速力、「山道に危険な処がないのか」と聞く者が居て「今さら男だけで死ぬのは早すぎる」と本心を披露する者が出て「その通り」とばかりと、皆が首をふる。その時幹事の一人から声がかかった。「比島の山の中でよ、餅たべたらいつ死んでも良いと言ったのは誰だ。あれは嘘だったのか」途端にバス内は大笑い。

そうだ、そのような話をした事もあるが、どこの中隊も似た会話を交していた事を知る。転進中の密林を思出し、一立方尺の餅どころか一食のぼた餅も食えずに、戦没した戦友が哀れに思われた。

九、アテブリン

まとまな食料や食塩もない野戦では、栄養失調と衛生環境の悪い野原に、毎日ごろ寝の生活である。

病気するなのご意見なれど、罹ったら最後の日々である。

それにもう一つ、**いやな事は負傷する事**である。近くに野戦病院でもあれば助かる生命も、手当が充分出来ないから、長い間苦しみ故郷を想い、我身を悲しみつつ戦没された将兵が多い。このような戦場で、生命の守神であるべき軍医不在、頼りの衛生兵はどこに居るのかも知れぬ。

カプール島の孤島では連日の攻撃ありで、重傷重病の患者は助かるべき生命と、肉体が分離される危険な運命にあった。何せ高い山もない小島の中で、自動小銃を持ったゲリラと、海岸線の米軍、何時どこから銃撃されるのか、寸時も油断の出来ない連日となった。

終戦の日が充分に島まで伝達されなかった故か、たしか八月十六日頃と思う一五時頃、数名で沢を登っていた処を、不意に上からバリバリと撃たれた。咄嗟(とっさ)に伏せたが、頭と腰部が同時にバシャンとやられたらしい、頭がジーンとしてくる『これでにも駄目なのか」と思ったが大した出血も感じない、これは助かるぞと思い、発射音の間をみはからって、谷を後退し鉄帽を見れば何と、穴があいている。一寸横に当たればどうなっていたのかな、ハンマーで殴られたような痛みはあるが、幸にも傷はない。

腰に手を出して、帯剣を握ったらどうもおかしい、良く見ると剣が曲っている。近距離の小銃弾は凄い力があるものだ。鋼の剣身が曲り剣鞘はちぎれている。もし剣に当らなければ、腰か両足を貫通していたであろうと、考えただけで血の止まる程ぞーっとする。

それから左腕と尻部に、傷のある事と出血に気付いた。銃弾の破片が刺し込んだらしい、あの時戦友の一人が戦死して、俺は生きている。何と幸福な事だろう、と気付いたが、この侭では出血もあり、化膿の早い比島では生命とりになりそうだ。治療するにも薬はない、死ぬのもいやじゃ困ったぞ、何か薬になるものはないだろうか！

今持っているのはマラリヤの薬だけで、これは飲薬でヨーチンではない。だが病菌を殺す薬と名が附けば、何もせぬよりましであろう。
歯みがき粉だって薬と思えば腹痛が治ると言うではないか、やってみて駄目ならそのときあきらめよう。

早速鉄帽の中でアテブリンを水で溶解し、黄色の液を患部に塗る。脱脂綿代りに鉄帽の中にある緩衝用布団から綿を取出して、手拭で腰部と腕を巻き包帯を補強する。

常識外の乱暴な応急処置でも、痛みはあるが化膿せず、これで回復したは正に天祐である。野戦式のやけくそ智恵、専門の先生に問えば「臨床例がない」と相手にされぬ事だろう。

《マラリヤ特効薬のアテブリンは、殺菌薬のリバノールと共に、アクリジン誘導体塩類で、構造も類似》(程川隊員より)

十、洞窟

カプール島の山路をよく見ると、小路が沢山あって逃げ隠れするには楽なようでも、追いかけるゲリラの方が地理に明るい、米軍上陸以来、米の飯を一回も口にしないので体力は低下、来る日も来る日も、銃を持った集団の鬼ごっこ、「見付けた」に代ってカルピン銃を撃ってきた。

多人数をさけて、二、三名が一組となり何日目はどこで会う、という約束で自活を続けたが奇妙な体験をした者も多い。

隠れている薮の前方を米兵が列をなして通ったり、誰もいないと空家に入って、静かに休んで居るときゲリラが接近し、幸にも後退したので逃げる処を銃撃される。敵は多数でこれは駄目かと、曲りくねって逃げて助かったという話もある。

野生！と思われる小馬を殺して解体、肉をとったら骨と草は穴を掘って埋める。肉は分配するが後の始末が悪いと、その附近に砲弾がやたらに飛んで来る。谷間で夜間火を使用すれば、靄があるから安心とは言えない、高い処から見ると谷が明るく映るので危険、天幕を火の上に張って弱火を使うよう、細心の注意が肝要であった。

島内は平凡な地形のようでも、稀に不思議な天然の造形に出会った者もいる。ある日Ａというラッパ手と二人、誰も通った事のないような薮を通って、大きな岩に近づいた。よく見るとようやく通れそうな隙間がある。好奇心と冒険心が出て静かに入ってみた。

驚いた事にその奥は洞窟で四坪程もある。暗さになれてよく見ると、誰が使用したのか焚火の跡があり、しかも小川が流れているではないか、これこそ天然の隠家である「今夜はここで泊ろうか」「ここなら安全だ、雨の心配もない」「ゲリラに発見されて、手榴弾でも投げられたらどうする」「その時は、それまでよ」何となく不安もあったが、二、三日の予定がここを中心に二ヶ月近くを過したという。

地図の上で、どの辺と言う記憶はないが、今日もしも洞窟に出会ったら、昔の宿代として何をしようかと、感謝は忘れない。(程川隊員より)

十一、重傷

戦場では任務を遂行する為に、病気に罹る事と負傷する事は、当然避けたい事であろうがその危険を回避する事は出来ない、軍隊とは戦闘をする処で、戦闘は敵を殺傷する事であり、これは敵側にも共通の訳で、当然死を覚悟しなければならない。

軽傷なら孤独でも処理する事が出来るが、重傷の場合は手当の困難と、食料もなく衰弱して死を待つ事になる。急所が外れて死に切れない、七顛八倒(しちてんばっとう)の劇痛は誠に悲惨なもので、どうせ敵弾が当るなら、ずばり頭や胸に命中してくれと、斬込戦の決死隊には、鉄**帽を着用しない者が居た程**である。マヨン火山の麓、カマリグ戦は必死の抗戦によって、持ち耐えたが湾内からの艦砲と、地上からの砲撃により、友軍陣地で炸裂する猛威は死傷者を多くした。

「やられた」と気付いた時、左腕肘関接の先で腕(?)骨(とうこつ)が切られて、ぶらぶらになっている。近くの衛生兵を呼んで止血をしたが、この傷ではどうにもならんと思い、一気に「切ってくれ」と強要した。傷口にヨーチンを塗り仮包帯と布を巻付けた。貧血と疼痛も耐えがたいが、悲しさと悔しさが胸一杯になる。止血が遅れたら弱気の者ならその侭失神し、昏睡状態から二度と立上れないだろう。「俺は死んではおらん」と正気に戻り「生きるのだ」とつぶやき乍ら銃を握った。

立上ってようやく医務室のある洞窟に入る、軍医の手術を受ける事になったが、これが何と手荒いもので惨酷、骨を切り直すのであろう。手足は押えられ、口に入れた布を通して歯をくいしばる。とても我慢の出来るものではない、死んだ方がましだ「殺してくれ」と何度喚いた事か、「片腕ぐらいこんなもの負傷兵の中に入らんぞ」と軍医は言う。鬼より冷酷なのか相手にせず激励とも聞える。耐え難い苦痛を通り越して、その侭失神何もわからない。その夜、寒気と腕の疹痛で目を覚し、周囲を見ると何という事であろう。洞窟には誰もいないではないか。最後の手術を終了した処で、全員後退したと思われる。

敵に包囲されたら「これを使用して自決せよ」の意味に思われる手榴弾が一個、横に置いてある。今生きていると気付きほっとしたが、どうやら取残されたらしい、「何くそ、死んでたまるか」と決心、ふらふらする足取りで北に向って歩き出した、しばらくして四、五〇人程の移動仲間と会い「マニラまで行く間に自殺しない事、敵を一人でも殺してから死ぬ事」を皆で誓い合った。

マヨン火山に向って(鉄道線路を越したと思う)登り出したが、片手では木の枝も握れない不自由を初めて知った。切り落した片腕に、何と残念な事をしたものと悔しく思う。皆と一緒に登山出来ぬ事を自覚して、仕方なしに別行動をとり、山裾を廻るよう進路を北にとった。途中で台湾出身者の一団と(四〇名程)一緒に移動した事もあるが、銃撃を受けて四散、又増加した時もある。徐々に減少して数名となり、大きな湖《イリガ山の近くに三湖あり、BUHI,BATO,BAAO の一つ》の近くで一ヶ月程も生活した事がある。

連日疼き続ける右腕の包帯は汚れても、代りがない、縫合した傷口はとうの昔から蛆が住み込んで、良く視るとどうやら二種類の様子、小さいのは一ミリ程のが動いている。清水で洗い一流し周りを揉むと、一寸だけ痒みが止まる。こんな状態では全身が腐ってしまうだろうと、不安が増す、しかし他の処置がない、

「死んでなるものか」と口に出すと、生きる執念が湧いてくる。

仲間は増減を繰返し、朝鮮生れの者と二人になり、谷間で生活した事もあった。携帯する品も徐々に減り、武器は**日本剃刀(かみそり)だけ**でもこれは利用価値は高い、炊事用、護身用で最悪時には自決用にもなる。だが「死んではならん」と再々己に言い聞かせて北進を続けた。

終戦となりマニラ南方の病院を移動するのでトラックに乗り、他の車に元の若い戦友を発見する。レガスピーの戦闘中、砲弾の破片を顔に受け紅に染って倒れた。彼の後ろから肩に手をかけて「オーイ」と彼の名を呼んだが動かない。おしい事をしたと諦めて別れたのに、生きて居たとは想像も出来ない。向うも気がついて呼んでいるのだが、顎の傷が全治してないのか「ツーツーツウ」と聞えるだけ、あいつが生きていてよかったと涙が出る。トラックが動き出し手を振って別れた、(工兵隊員より)

十二、レイション

サマール島北東部の山で終戦を知り、山を下って露営、翌日はガマエの小学校に入る。**戦争が終った安心感と、胸を射すいやな気持が混濁**してどうも落付かない。

翌日に支給された食糧は、米軍の K レイション(携帯口糧)但一日二食分(米軍も二食にした）**山から出て来た日本軍が予想外に多く、在庫品の関係で節約五日日には、医薬品と共にレイテ島より空輸で補充**してくれた。

完全防水のダンボール箱に入り、内容品は肉の缶詰、クラッカー、チーズ、キャンディ、コーヒー、煙草までが入っている。どうやらすごく裕福な大国と、貧乏な小国とが比島で戦争をしていたらしい。

私共には初の出会であるが、米軍陣地を襲撃して成功した者には類似品を試食していた。栄養失調でいもや雑草を常食とした者には、何となく満腹感がない。しかしカロリーは充分にあるいう。比島戦場では兵器火砲の大差もあるが、**レイション部隊と、いも部隊の戦争**であった。勝敗の予測は木下藤吉郎に聞くまでもなく、明白な事と思う。

大分類すれば、K、十、五、C 等の他に病院用等もあるらしい。

レイテ島収容所で外業者用に支給したのは、Cレーションという缶詰二個が一組で、MとBユニットより構成されていた。缶の大きさは直径約七センチ、高さ約九センチ程でダークグリーン、US アミー、フィルドレーションと書かれて、内容の明細と添加物も印刷され、ゼンマイのように切取る。缶切りが底部に圧着されている。おにぎり弁当に梅漬の国では想像も出来ない。思いやりに満ちた携帯食(個人用戦闘食事)である。

内容を列記すれば、M ユニットは、①ビーフと豆、②豚肉と豆、③肉と野菜、④肉とスパゲティ、⑤ハムと卵、⑥肉とマカロニー、⑦豚肉と飯、⑧腸詰と豆、⑨豆と豚肉、⑩ハムと豆、チキンと野菜。

B ユニットは、朝・昼・夕用計二〇種を数える多種類を数えた。又五レーションのナンバー二では、o 朝食はビスケットとジャム、コケット、豆、ピーナッツ、バター、コーヒー、ミルクでこれらの中にはタバコやマラリヤ予防薬が含まれているのもあり、彼等の考えかたに何か特異なものと、もてる国の力量には驚歎するばかり。

収容所の中では、レーションと煙車、又は米軍兵士の希望する品物が交換されていたが、レイションはあくまでも戦闘用で後方の部隊には、パン焼器や炊事用器具の大型トラックが、洗濯機や発電機のトラックと共に駐屯していたと聞く。

雨のストッケード

(曙光新聞より　山田)

一、雨がふるふる　しとしとと
椰子の葉ずえに　この胸に
ああ更けてゆく　レイテの島の
ストッケードの　幾月を
つめたく光るバリケード

二、雨がふるふる　しとしとと
哭かぬ男の　胸にふる
ああはるかなる　故郷の山を
夢に求めて　枕辺に
いつまでやまぬ　雨の音

追録

一、関東軍について

高浪連隊がチチハルで編成され其の主力が第五十七師団(通称号奥)であり、昭和十六年(一九四一年)に関東軍特別大演習時に渡満した経緯を考えるとき、一見比島戦場に関係がないようであるが、強大な南方予備軍となった**関東軍の歴史概要を説明する事**は、無駄ではないと信じます。

1、日清戦争より

明治二十七年八月一日(一八九四年）日清戦争の宣戦布告により近代初の大戦争となったが、

明治六年西郷隆盛等の征韓諭にはじまり朝鮮進出の機会をねらう間に、事件や暴動があり、十八年の天津条約後にはかえって経済的矛盾が起った。

二十七年五月東学党の反乱鎮圧の為に、清国が朝鮮に出兵した。日本は居留民保護の名目で朝鮮と清国に出兵した。七月二十五日豊島沖海戦にて、清国海軍を撃滅して南満州に進出旅順、大連を占領しさらに天津、北京に向ったが、二十八年三月下関にて講和条約を結んだ。

三十七年二月ロシア軍の満州進出により、日露の外交乱れて日露戦争となった。三十八年（一九〇五年）八月ポーツマスにて条約を締結し、関東州及び南満州鉄道四三〇キロの権利がロシアより日本国に帰属(租借権の移譲）して、その警備の為関東都督府付陸軍部として関東軍が発足した。

2、発足より

関東州、南満州鉄道及びその付属行政地の警備と、在満日本人の保護を任務としていたが、中国内の革命に対する武力干渉と大正六年には、ロシアの社会主義革命圧殺の為に、シベリヤ出兵がありその兵力は増強された。

(大正八年約一万人)大正九年五月にはニコライエフスクの守備隊(第二連隊）三百名と邦人四百名が、バルチザンよって惨死するという尼港事件が発生して、対ソ感情が悪化する中の大正十一年には、ウラジオ出兵(第三十一連隊が進駐)等があった。その後昭和三年(一九二八)張作霖(りん)爆殺事件が発生し(これを満州某重大事件とよび、田中内閣総辞職となる）、六年(一九三一)を「イクサハジマル」と読む者が居たが、奉天近くの柳条溝で火蓋を切った満州事変により、日中十五年戦争は開始された。七年には満州国建設と発展して軍司令部を新京（後の長春）に移した。

国内には軍国主義を敬発して、日本人が生きる為には戦争こそ必要なり、と軍国精神を喧伝した。十二年七月七日、北東郊外の芦溝橋に発生した日華事変を契機にして、関東軍を五個師団に増大（第八師団は年末に東部満州に進駐)した。その後満州西北部では第六軍の第二十三師団によって、外蒙古軍の不法越境という事で、十四年五月十二日ノモンハン事件(ソ連ではハルヒンゴル河事件という)が発生して連隊全滅という悲劇が発生するような国際紛争は絶えなかった。

関東軍の独断専行とまでいわれる、ノモンハン事件(三次発生)に於ける敗北は、六万に近い兵力をかけながら、日本国軍の建国以来かつてない完敗という汚名を残したのであるが、大型で強固な構造と巨大な火砲を装備する戦車軍団の戦力に対して、完璧な戦争能力がないままに戦斗した作戦の失敗を、国民にはひた隠しに真相を発表しなかった。

十五年になってようやく停戦協定を結ぶことが出来たが、一触即発の国境をもつ北向きの関東軍には「仮想敵国がソ連である」という信念のもとに、十六年には十四師団から三十四師団へと膨張させて、ソ連攻撃の計画をしていた。

3、関特演召襲

一方ヨーロッパの情勢は、独ソ不可侵条約(一九三九)を無視した独軍が、十六年六月二十二日対ソ戦争を開始した。

関東軍としては、これこそ天機到来絶好の機会となり、ソ連軍極東の弱味を一挙に急襲して、徹底的な打撃をあたえようと計画した。

(ドイツとはイタリヤと共に日本は三国同盟締結中）しかしソ連領での戦争は「歴史的、気象的にみて酷寒の冬期をさけて、作戦を終了させるべきであり」その日を十月中旬仁想定すれば、開戦は八月二十九日となり、動員下命は七月五日、その動員決定は六月五日という逆算方式によって、綿密な動員計画をたてるという念の入れようとなった。

だがこの「対ソ武力的準備」に関し関東軍と陸軍省の交渉や、独走を深く憂慮された天皇陛下の御指摘もあって、除々に遅れた。第一次動員は七月十三日内地より三百程の部隊が、さらに第二次が十六日に内地の二個師団（五一、五七)を中心に、四百五十の部隊から極秘の内に関東軍特別大演習の名目で臨時召集された。(入隊時軍服を着用せず平服で衛門を入る)

4、大東亜戦争

第五七師団司令部(弘前)は「狼予防の山の神」を祭ったという北満の荒野、山神府に進駐し、第七二三二部隊は北安に駐屯した。(後に神武屯へ移動)

集中輸送は七月二十二日より開始され、関東軍は実に七十万名に増強されて三十四個師団の集結により、九月上旬には「作戦開始可能」と判断されたのであるが、当時の海軍は洋上作戦を固持して譲らず、ソ連も又ヨーロッパへの西向移動を予想より減少したので、ソ連との開戦という緒がつかめなかった。

特に紛争防止の一方的侵略の歯止めとして、杉山参謀総長による「ソ連軍航空部隊の真面日なる進攻を受くるにあたり、状況己むを得ざるときは現任務達成の為・・・・攻撃可能、他は一切不可」八月六日の如き事件発生防止の厳しい指示により、一方的に勃発しやすい対ソ挑戦が、厳正に抑止されたのであるが、一方では大東亜戦争の計画は爆発的に進行して開戦となり（十二月八日)その戦勝が報道された。

「泣く子もだまる」と異名をとった国宝**関東軍**も、この長期大戦には北に向って沈黙を守り続けたが、後半にはその虎の子部隊を続々と南方戦線に緊急輸送する事になり、櫛の歯の抜けた如き防禦の陣に八月八日ソ連軍は宣戦布告と共に猛攻を開始した。

終戦をむかえると同時に、戦乱の大陸に生れた、関東軍四十年の歴史を閉した。

〔註〕
1、臨時召集とは「戦時又は事変に際し必要ある場合に於て、臨時に在郷軍人を召集し、若くは平時に於て警備其の他必要により、帰休兵又は予備兵を召集する」をいう。

2、前記の如き最高部の作戦計画は「関特演」に応召された兵の感知する処ではなく、北満に近ずく酷寒の越冬準備と、猛訓練に多忙な日々に忙殺されていた。二十年四月第五七師団の主力は内地の本土決戦に欅える為、九州北部へと転出した。

二、高浪連隊長を思う

1、経歴

編成以来落付く時のない移動の連続で、各大隊が比島各地に分割された為に、第Ⅰ大隊の兵が連隊長の御英姿を拝する機会は幾度あったであろうか。

連隊長は新潟県東頚城郡安塚町（現高田市北東の安塚町）に明治二十五年（一八九二年）に誕生され、陸軍士官学校第二十七期卒業後、金沢第七連隊へ配属された。
大正十年ワシントン会議による海軍軍縮後、十三年に就任した宇垣一成陸相により、軍隊の近代化、科学化推進という日的で、十四年五月、二十一個師団より四個師団（十三、一五、一七、一八）の削除を断行した。

金沢で同地の芳子様と御結婚され、各地連隊が新編成に移り、富山の第三十五連隊に転属、上海事件、日中戦争に参戦し輝かしい武勲をたてられたが、十六年五月黄河の戦斗にて左腕を負傷入院して、北京病院に移られた。
病院はいやだ、腕は良くなったと、八月に退院したが野戦に復帰できずに盛岡第六四部隊長に就任されたのです。

この部隊が歩第一三一連隊であり、十六年八月十四日第六七独立歩兵団隷下連隊として駐屯していた訳で、九月軍旗を拝授して十八年五月十四日の、軍令陸軍甲四十五号による臨時編成により、青森県弘前市に移駐する事となった。

現役兵の一個大隊強の将兵が、先頭に軍旗を捧持して弘前に進み、同地歩五二連隊補充隊を合併して、歩第一三一連隊編成が完結した。高浪大佐は陸士の先輩である竹内芳一大佐に引継ぎが終ると、東京の近術師団司令部に栄転され、教育関係（大学校の軍事教練等)の要職に就かれ、十

九年七月独立混成第二十六連隊長に任命されました。

[註]
1、竹内大佐、陸士二四期は十五年夏には山形北部第一八部隊長でした。
2、明治三十一年盛岡で編成の歩第三一連隊(初代連隊長児玉軍太大佐、二十四代小林島司連隊長のとき、北満より杉師団として比島へ派遣)が昔盛岡より弘前に移駐したのに似た因縁がある。
3、歩第一三一連隊は十九年六月二十九目、戦時編成の命により第四七師団(弾）の秘匿名「かもめ」部隊として、十一月中国大陸に進み江作戦に奮斗、武昌附近で終戦を迎えた。(軍旗は八月二十三日広重連隊長、旗手秋田少尉のときに奉焼された)

2、軍旗親授

十六年九月十日の朝、勲三等瑞宝章を首にかけるのに、旗手前田洋少尉(陸士五四期、鹿児島県)が手伝って、宮中に向い出発されたが、左手首が一寸不自由で、この手が完全でないために、親授の際粗相があっては大変と、左手を気にされていた。宮中正殿にて軍旗の親授が行なわれた後、天皇の勅語があり、「勅語・今般歩兵第一三一聯隊編成成ルヲ告ク仍テ軍旗一旒ヲ授ケ汝軍人等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ我帝国ヲ保護セヨ」

これに対して奉答文が読みあげられた(西溜ノ間にて)「敬テ明勅ヲ奉ス臣等死カラ竭シ誓テ帝国ヲ保護セン」昭和十六年九月十日歩兵第一三一聯隊長陸軍大佐従五位勲三等功五級　高浪金治
紅色の軍旗は初代軍旗手にて捧持され、誘導将校と護衛下士官に守られて、盛岡に着き厳粛盛大な軍旗授与式が挙行された。
この奉答文と式辞(参考）の副書が今日まで保存されており、当時の模様を伝える貴重な資料として、又当時の御心境を推察するために記載します。

3、思い出

宮中における軍旗親授という重任が、無事に達成出来て安堵され、後日この感激を回顧しては「武人の名誉これに過ぎるものなし、多くの連隊長ある中で、この光栄を得た幸運は終生忘れまい」と時折語られたようで、マニラ東方の苦境にても回想されたのではと考えます。

芳子様には一歳の時御尊父様が日露戦素で戦死され、この大戦では最愛の御主人を失うという、戦争による悲しい思い出の中に「主人は体の大きい方でなく、骨太でがっしりした体、真面日で厳格、融通のきかない方、じっとしているのがいやな性分で、東京に来てからは早く野戦に出たいと、口癖のように再々申しており、それに花がとても好きな方でした」と大きなお写真を見せて下さいました。

元連隊本部附であった日沢氏(青森県)は「長い軍隊生活の隊長殿で一番良い人であった」と話してくれ、前記名青ある初代軍旗々手であった前田洋氏は「一口で好々親父」という印象が強く残っており、三代目旗手の広江静雄氏によれば「歴戦の武将に拘らず極め温情慈愛に満ちた、統率力の優れた方」と思いだしてくださいました。盛岡市元兵営近くに立てば、北方に岩手富士が見えて瞑想の中に、広い兵庭の壇上より、連隊長の式辞が響きわたってくるように思われます。

参考　軍旗拝投記念式の式辞

式辞

本日茲ニ軍旗拝授記念ノ盛典ヲ挙行スルニ当リ聯隊将兵ニ告グ、我ガ聯隊ノ軍旗ハ去ル九月十四日宮中ニ於テ大元師陛下ヨリ親授セラル

即チ當日聯隊長ハ斎戒沐浴シテ聯隊旗手、誘導将校竝ニ護衛下士官四名ヲ随ヘ乾門ヨリ参内シ御車寄ヨリ旗手ラ伴ヒ正殿ニ参進ス陛下ニハ龍顔イトモ麗シク玉座三拝ス、御右ニハ元師陸軍大将梨本宮守正王殿下、陸軍大将朝香官鳩彦王殿下、陸軍大将東久邇宮稔彦正殿下ヲ始メ奉リ左右ニハ待徒長、待従武官長、陸軍大臣、参謀総長及各軍事参議官等陪列シ奉ル、壮重森厳ノ気場内ニ満テリ聯隊長ハ旗手ト共ニ進ミ恭シク最敬禮ヲ為シ奉レバ長クモ陛下ニ.ハ御會釋ヲ給フ、聯隊長ハ更ニ御前ニ近ク進ミ天顔ニ駅咫(?)尺シ奉レバ陛下ニハ待徒武官長ノ捧グル軍旗ヲ採リ給ヒ御手ヅカラ親授シ給フ聯隊長ハ両手ヲ延ベテ謹テ軍旗ヲ拝授ス。

茲ニ我ガ軍旗ハ聯隊長ノ両手ニ確ト振ラル、時ニ十四時二十分ナリ恐懼感激又言フ処ヲ識ラズ聯隊長ハ恭シク軍旗ヲ捧持シテ数歩後退シ右傍ノ旗手ニ渡シ再ビ正面シ奉レバ陛下ニハ辱クモ玉音イトモ御壮重ニ勅語ヲ給フ、聖慮宏還寔ニ畏シ　終リテ陛下ニハ御機嫌麗シク入御アラセラル、聯隊長ハ西溜ノ間ニ退下シ待徒武官長ヲ経テ奉答ス。

茲ニ式全ク終リ御車寄ヨリ誘導将校ノ誘導及下士官ノ護衛ノ下ニ二重橋ヨリ退出シ同夜上野発翌十一日滞リナク帰隊ス。惟フニ軍旗ハ大元師陛下ノ御分身ナリ。

聯隊長ハ軍旗ヲ奉シテ大命ヲ承行ス、聯隊将兵宜シク御親授ニ際シテノ聯隊長ノ奉答ヲ体シ一致団結、水火且辞セズ以テ軍旗ノ名誉ヲ中外ニ発揮セサルベカラズ。

今ヤ国際政局真ニ多事ノ秋軍旗ヲ奉シテ炎熱肉ヲ爛ス赤道直下ニ進軍又進軍ノ苦難ニ就キ、或ハ酷寒骨ヲモ凍ラス朔北ノ曠野ニ突撃又突撃我等ガ碧血ヲ以テ軍旗彩ルコト又遠キニアラザルカ即チ思ヲ深ク此處ニ馳セ日夜必死千磨ノ訓練ヲ重ネ以テ待ツアルヲ待ノマン。茲ニ謹テ御親授ノ御模様ヲ伝ヘテ聖旨ニ答ヘ奉ランゴトヲ期スルト共ニ衷心我軍旗ノ将来ヲ祝福シ以テ式辞トナス。

昭和十六年十月十四日

北部第六四部隊長高浪金治

三、五木田大隊長を思う

兵が野戦に於て大隊長に出会ら事は稀な事であった。大隊長となれば軍の威厳に満ちた権化の如く、早くいえば恐しい存在である。

在満当時の大隊長がそうであったように先入感がある故か、それとも中隊の幹部が其の都度緊張する様子から体得するものでいろうか長年の軍隊生活で練磨された頑健な英姿、鋭い眼光等、頼もしいもので、戦場に赴く兵にとっては幸な事であろう。

釜山にて出航前の訓辞は、具体的で親しみのあるものに聞えて、大隊長の下で戦場に征ける事は有難いと言う者がいた、しかし大隊主力がサマール島に渡り西北地区の警備に就いていた二十年正月早々に、サマール島からルソン島に移動の命令出て、船が来たぞという伝令により、山裾の陣地から急ぎ移動準備をして海岸に出た処で乗船順位の変更が起ったのか小山内隊は後発となった。先発の大隊長を御見送りしたのが最後となり、不忠議な訣別となりました。

チチハルで編成以来ルソン島からサマールの生活の中で、我等の大隊長殿はどんな方かと、話題になり当時としては「関東地方御出身という程度を聞いたものです。

明治三十九年十二月茨城県(現岩井市)の小林家三男として誕生され、陸士少尉候補隊（一七期)卒業後昭和十二年十月水戸歩兵第二連隊附となり、十六年一月黒龍江省漱江警備隊長に、十八年六月より公主嶺第四六〇部隊附として、幹部教育隊に勤務され翌年高浪連隊大隊長に就任されました。

五木田家はその昔常盤の国(茨城県)の由緒ある豪族ですが、東一束に移られて百年以上も経て居る、同家長女と御結婚されたのです。

十九年八月公主嶺から内地に引揚げられた御家族は、戦災に会い、戦後は、夢を破る冷酷な公報により、武運長久の祈りが無慙に切られたのです。元同大隊復員者二名より戦況報告の手紙を受けその内容から、大隊長として立派に戦死された事を姉弟で話合いながら、大国柱を失った悲しみに耐えて、戦災復兵と子供さんの成育に、並々ならぬ辛苦を耐えられました。

遺品として今日残っているのは、マニラより南進の途上で出された軍事郵便のはがきだけです。私は、これを五十五年に拝見しましたが、その一部を「・・・・元気にて毒日奉公している、便りも中々思う様に出せなくなるだろう、皆丈夫ですか、生活が変ったので何彼と困るだろう、子供には父も元気で神国の為戦っ

て居ると話してくれ皆立派な日本人になる様に……」と読んで私は目をとじ黙祷しました。

遠い祖国の妻子を想う愛情に満ちたおはがきの中に、この先重要な任務により前戦に向う決意を知った事で、軍隊では厳しい古武士の如く偉い将校とばかり思っていたのに、優しい親父さんであったのだ、当然の事ながら肉親の情と戦争による悲しい運命には、将兵の差がない事を感じて再び目を閉じました。前記「いななき会」会報に宮前様の「故五木田中佐鎮魂の譜」が掲載されており、その一節を紹介します。「・・・・開戦以来最大の兵力が結集され、大戦の天皇山といわれたのであるが、結果は、はかない泡沫となりあえなく終了した・・・天命乎、草むす屍と顧(かえりみ)ることなく散華せられた君は、同期の鑑(かがみ)である、比島は今、独立した、君のいさをは永遠に輝く、同期の者みな〃君よ安らかに眠られよ"と祷ってやまない」

《正六位勲四等旭日小緩章授与、陸軍中佐に追贈》

四、慰霊祭

1、現地慰霊祭

戦場には戦斗があり、疾病もありで戦没者が出る、埋葬するのが危険な場合もあれば、中には御遺体の確認が出来なかったという悲惨な例も数多く、生還者の等しく痛恨に思う事は、戦友の慰霊祭が出来なかった事である。

戦時中は現地住民の感情が険悪であったが、年を経て日本人に対する理解と信頼が、好転するに至って、現地訪問と慰霊祭も可能となり、各部隊生還者がご遺族と共に訪ね、又は慰霊碑の建立が出来るようになった事は、当時を偲ぶ者にとって有難い時代である。

当連隊関係者にも多数の方が参加されており、その中より数件をマニラにて二班に分れ、特別参加の私はA班に入り、レイテ島タクロバンからサマール島を二日がかりで、アレンに着き、マトノグイロシン、ソルソゴレ、レガスピーと一週間の旅をしました。

レイテ島パロ海岸に始まり、サマール島各地で車を停めて慰霊祭を実施、待に伊藤小隊斬込の地、セルバンテスの近くでは、追悼の辞を読み焼香が出来、アレンからは団員で私一人マオーに行き元の陣地に向って日本の菊を供え参拝し、出航後の海峡では、海上に造花と菓子を捧げて、カプール島に向い遥拝しました。

2、内地慰霊祭

現地慰霊祭や友好親善の旅行が出来る方と、同じ思いでも速い比島に出かける事は容易でないのが現実です。各部隊関係者がご遺族と共に、各地で慰霊祭を実施の例を紹介します。

○草むす屍会

比島全滅における陸海空軍戦没者のご遺族と、各部隊生還者による全国的会合で、慰霊祭は姑国神社にて春行なわれ、日比友好の行事もある。会員の中に高浪連隊ご遺族四名がおります。

事務局　東京都文京区小石川四丁目一六ー六〇六土谷直敏様

○垣師団桃陵会

比島開戦以来の長期戦斗師団で、レイテ島にて激斗の末、その主力は玉砕した。二十二年より慰霊祭を実施、訪比による現地慰霊祭と、遺骨収集と共に日比友好の積極的活動を継続している、サマール島で小山内隊と遭遇した金野大隊生還者は、会員も多く中核的存在で、その活動も盛んである。

例祭　四月第二日曜日、京都市東山区本町一丁日　浄雲寺にて

○撃師団

松本大隊の激戦地はウミンガン、サンホセ地区で、撃戦車師団の配属となった。中でも高信中隊はルパオ陣地にて、米田支隊と共に運命を共にしている。撃師団の慰霊碑は、三根山上の比島観音像前の広場に建立されており正面の碑文には、山下司令官の感謝状があり、裏面には協力部隊名が刻まれており、その中に松本大隊名がある事は印象的である。

例祭　四月第一日曜日愛知県幡豆町大宇東幡豆大境一七
三ケ根観音にて

○混第二五連隊

高浪連隊と略同時に、北満で編成され派遣先の変更により、比島防衛の一環として、北ボルネオに渡った兄弟部隊である(編成二、二一八名生還者九〇六名)

《生還者の中には「俺が死んだら戦友の慰霊碑に分骨してほしい」と中し出る方もある由》

例祭　四月上句和歌山県高野山本覚院

事務局　茨木市中穂積一丁目五－A 五一四　片桐忠信様

○もや　いふ部隊友の会

十九年、山形の連隊で編成された比島派遣の新部隊が、二回霞が城を出発した、輸送指揮官の名を冠した両部隊は、マニラ東方と、リンガエン東方で玉砕的損害をうけた。

ご遺族と生還者の結束が強く、山寺立石寺の仁王門下に慰霊碑が並び、いふ部隊では比島ラバユグにも建立しておる《山形県下の比島関係団体中で熱心な活動がなされているので特に紹介す》

例祭　九月立石寺

事務局　一天童市寺津一四二六鈴木富男様

祖国再建の悲願

昭和２１・7・8　カランバンにて
根本　勝

一、緒戦の華は凋落し
戦ひ利あらず殉国の
血をたぎらはせ海山に
激斗こゝに四春秋
祖国は遂に敗れたり
二、既に散るべき鴻毛の
命にあれど停戦の
勅に突きて蘇へる
み恵みなんぞ極みなし
起て益良夫よ再建に
三、マレイの虎と、謳はれし
巨星山下恨み呑み
比島の果てに堕ちたれど
帰りて放れよ柱にと
永久の訓を忘るべき
四、朝陽の如く栄えたる
去りし祖国は今いづこ
国敗れしも山河あり
峻岳富士は千秋の
自妙清く空え立つ
五、廃墟の中に空高し
平和の旗は翻へり
民主の潮うねり来て
柵に燃え立つ情熱を
通はせ奏づ建設譜
六、余生は何に捧くべき
亜流に乗るか隠遁
時の流れに逆うか
ともあれ坩堝に真珠拾ひ
誠の道に生き抜かん
七、生死誓いしわが戦友よ
波涛千里に露と消ゆ
残りしわれら今ぞ今
霊背負いて荊の山
越え行く道に光あり

フィリピン戦跡訪問の歌

南国山河

作詞作曲　植山光博
一、おもいはるかな　戦場に
さがし求める　勇士のみ魂
椰子の葉かげに　香煙むせて
涙あらたな　この山河
二、南の空に　散華した
無念のしるし　弾丸のあと
呼びかけ谷に　こだまして
悲槍の最期目にうかぶ
三、慰霊のつとめ　ここに来て
記憶がなしく　土匂う
祖国の花を　手向けして
たたえまつらん　とこしえに
クラウンレコード　CW・729 唄　若山　彰
クラウン女声合唱団
クラウン・オーケストラ

新日本建設の歌

(レイテ新聞　斎藤)
一、天啓の暴風雨はさりて
新建の秋は来りぬ
詔胸に刻みて
ゆるざなき　国を興さん
二、悠久の歴史巡りて

新進の大機到れり　　新生の朝に立てり
輝ける山河打開きて　　民族の血潮沸らせ
豊かなる国を興さん　　和合へる国を興さん
三、在潤の事より醒めて

田沢中隊の戦線行動表　（市原日誌参照）

日付	地名	行動	参考
十六、　一二．八			対米宣戦布告
一九、　七．二五	昂々渓	新編成開始、威一、.一九、.二六部隊に転入	七、七　サイパン島日本軍全滅
八、十三	チチハル	出発	杉師団、下関へ寄港
八、二一	釜山港	出発朝鮮海峡へ	
八、二三	門司港	出航	
八，二七	三池港	出航	九，八　小山内中隊等北サン上陸
九，一九	マニラ港	上陸　荷揚作業（徹夜）	九，二一　米空軍マニラの空襲（八時）
九，二八	マニラ	出発　ダグバン	九，二八　撃戦車戦車師団一部マニラ上陸
九，三〇	ビンマレー	到着	
一〇、一	ラブラドル	到着	
一〇，三	ラブラドル	初年兵　一等兵に進級	一〇，六　山下軍司令官マニラ着
一〇，九	ラブラドル	陣地構築	
一〇，一一	ラブラドル	新任務受領（ボルネオへ）	
一〇，十三	ラブラドル	出発　リエンガエン飛行場へ	
一〇，一四	ダクバン	到着（二二時）	一〇，一四　小山内中隊航空隊に宿泊
一〇，一六	マニラ	到着（一四時）	一〇、二〇　マッカーサー、レイテ島上陸
一〇、二一	マニラ	出発（二一）　佐藤少尉中尉に進級	
一〇、二二	ビナン	到着（一九：三〇）	
一〇、二三	ビナン	出発　カランバ着（十三：００）	比島沖海戦開始
一〇，二四	カランバ	出航　タナウアン着（一一：三〇）	
一〇，二五	タナウアン	出発　サンパブロ着（一〇：〇	

		○）	
一○，二六	サンパブロ	出発　ロスバニオス着（一○：○○）	一○，三○　小山内中隊より馬受領兵出発
一一，二	ロスバニオス	出発　サンパブロ着	
一一，三	サンパブロ	出発　鉄道列車にて　ナガ着主力下車（一八：三○）	
一一，六	ナガ	出航　鉄道列車にて　レガスピー着　乗船	サマール島へ向かう
一一，七	レガスピー	出航　翌朝ラブラブ島に停泊（六：三○）上陸　夕出航	他部隊の兵九名乗船
一一，九	マオー	上陸　荷揚（先発者七日上陸しアレンに駐屯）	
一一，一四	アレン	移動開始	一一，二三　小山内中隊ソルソゴン湾出航
一一，二二	ラベザベス	中隊移動し陣地構築警備	一一，二九　カラニアンに連絡員出発の処 ウルダネタで襲撃される
一二，一九	アレン	中隊移動	一二，五　夕敵機銃撃にて重傷者発生
一二，二一	マオー	中隊移動一部カラボク陣地へ	一二，二○　松本大隊ナガ発マニラ方面へ
二○、　一、三	マオー	マニラ集結の移動命令はいる	一，九　米軍リンガエン湾に上陸
一，一七	マオー	大発二隻入港、中隊兆以下主力出航す（乙船に乗る）	機関故障で漂流す（乙船カプール島へ）
一，二一	マオー	大隊本部の甲船一八日朝戻り、修理後二一日夜出航す	二，一四　大隊本部等マトノグ出発
二，二三	マオー	アレンに米軍上陸し砲撃連日となる	二，二七　マオー後方青山に小部隊来襲
三，一	マオー	夜八時各隊集合し、後方米軍陣地を突破転進に入る	
三，三	山中	市原小隊は MG 中隊に編入	三，一七　硫黄島の日本軍全滅
三，一八	山中	垣兵団金野大隊に出会う	三，二三　三五軍司令部レイテ島脱出
四，一九	ネニタ	金野大隊長戦死	四，一　レガスピーに米軍上陸（大隊本部）
四，二○	ネニタ	三小隊大前分隊を解き市原小隊へ編入（以下略）	八，十五　終戦

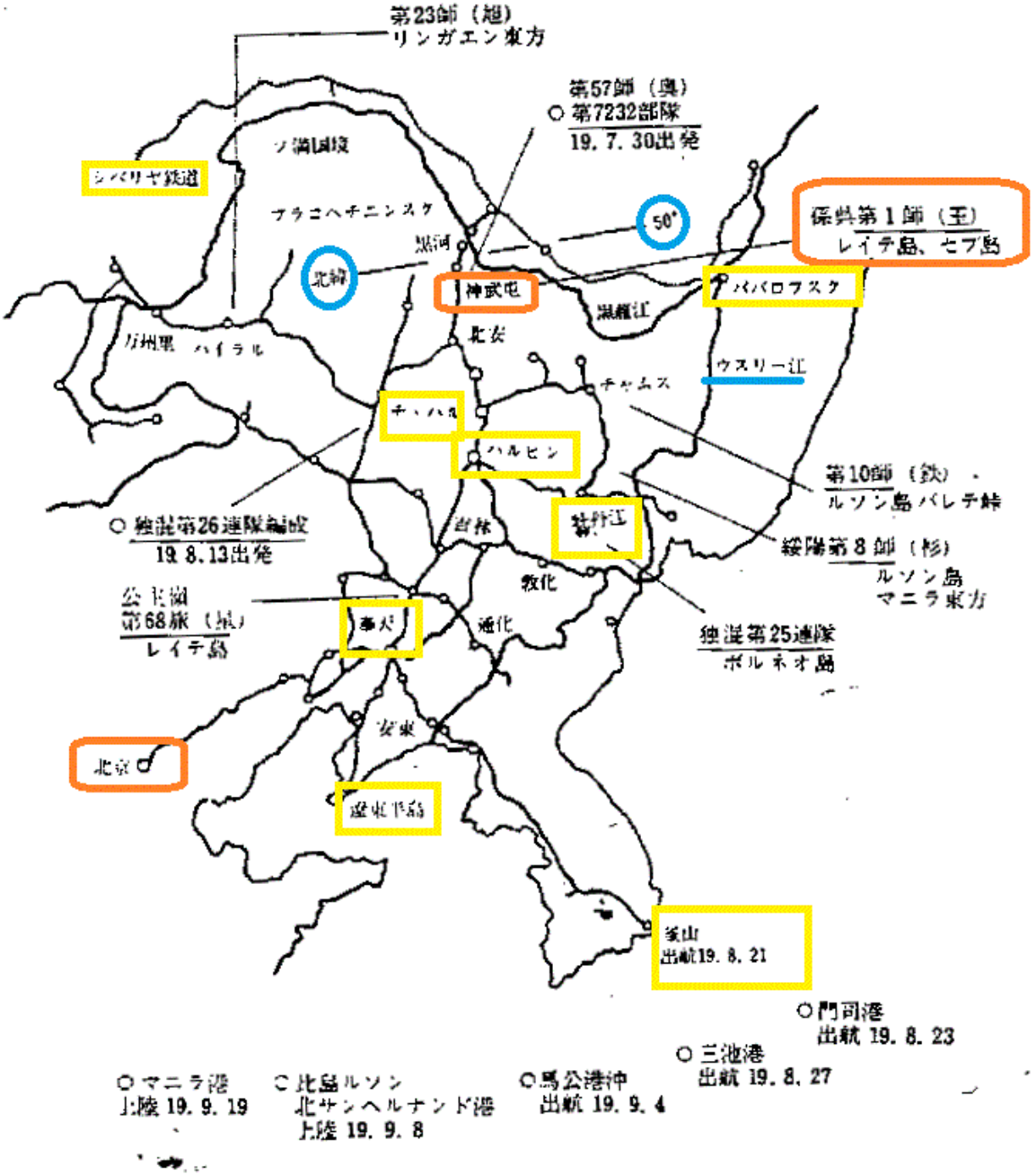
終戦よりレイテ島収容所　（市原日記参照）

日付	地名	内容	参考
二〇、　八，十五	日本	停戦の大詔渙発	比島軍指令部受信
八，二七	ルソン島	比島軍司令部より軍使下山する	八，三〇　マッカーサー厚木に進駐
九，一二	サマール島	ガマイ西方山中に軍使到着、命令伝達、当方揚拝	下山、武装解除、露営
九，十三	ガマイ	行軍にてガマイ小学校に入る	
九，十五	ガマイ	軍使一行出発す（マスバテ島方面）	
九，一七	ガマイ	食糧、衣料品レイテ島より空輸して投下する	
九，二〇	ガマイ	米輸送船に乗船、翌朝出船する	
九，二一	タクロバン	昼入港、上陸、トラックで収容所にはいる	住民の罵声、投石あり
九，二六	タクロバン	ネグロス島より四五〇名入所	
一〇，四	タクロバン	垣兵団沢中尉に会う	アレンで会えなかった小隊長
一〇，五	タクロバン	レイバーキャンプに移動者一四〇〇名出発	
一〇，六	タクロバン	ミンダナオ島より八〇〇名入所	
一〇，二一	タクロバン	ネグロス島より八〇〇名入所	
一〇，二六	タクロバン	カブール島に救出将校出発	後日四九名入所（程川隊中心）
一〇，二七	タクロバン	各島より八〇〇名入所	
一〇，三一	タクロバン	各島より六〇〇名入所	
一一，八	タクロバン	セブ島より一〇九三名入所	一一，十三　台風通過する
一一，二五	タクロバン	第一次帰国者出発	＃５、＃３キャンプ閉鎖＃２へ移る
一二，一二	タクロバン	ミンダナオ島より多数入所	一，一　十三　石油焼身自殺者あり
二〇、　一二，一七	タクロバン	サマール島より七〇名入所	
二　一　、一，三	タクロバン	患者一部乗船する	一，六　レイテ新聞創刊
一，十五	タクロバン	朝鮮行きの帰国者（小山内隊）挨拶にくる	一，八　内地新聞来る
一，三〇	タクロバン	ミンダナオ島より八〇名入所	二，二三　マニラ郊外　初の処刑者三名

三，一	タクロバン	サマール島の MG 中隊長死亡	
三，九	タクロバン	乗船、三，一八浦賀港上陸、三，二一解散	三，二二　大阪留守宅に到着（市原）
三，一二	タクロバン	乗船　三，二〇マニラ上陸	（小山内隊　井上）
四，二	マニラ	乗船　四，一二出発　四，二六浦賀上陸　四，二九解散	（小山内隊　井上）
一一，二三	マニラ	乗船　一二，五　名古屋港上陸	（小山内隊　山田）

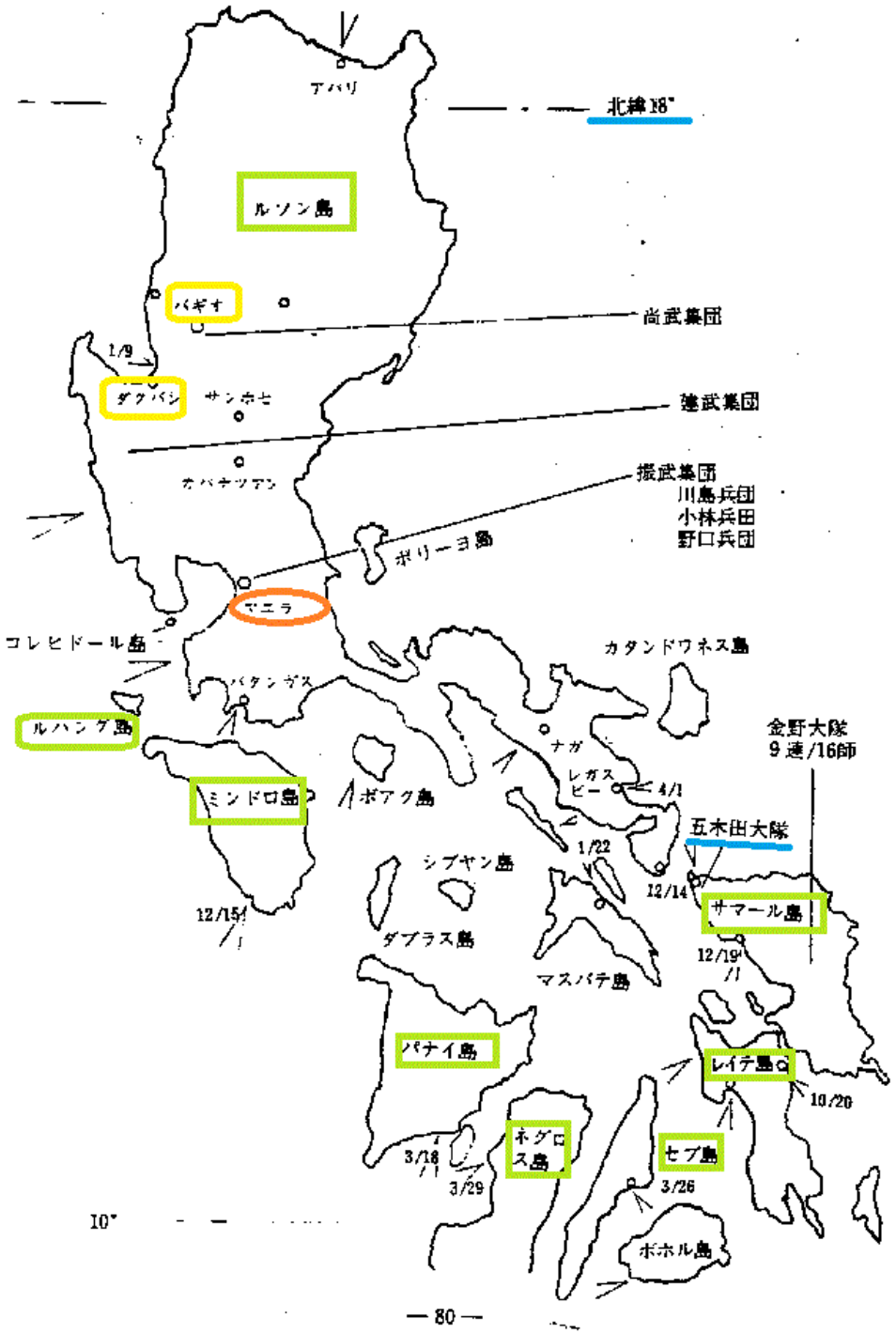
[註]日付に一部誤りあると思われるが原文を記入

附図１　旧満州からの移動状況



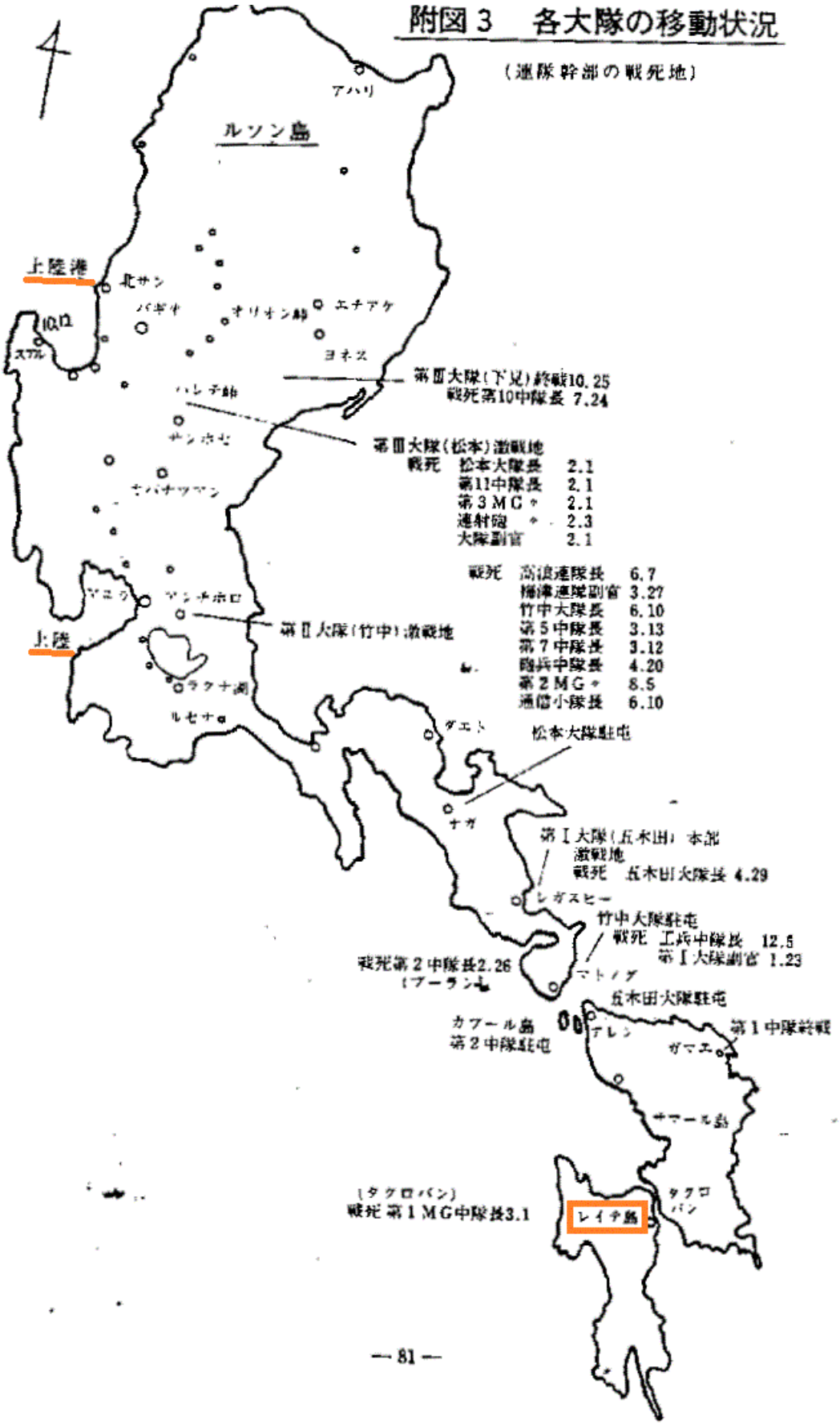
附図2　比島概況図

米軍の主要上陸地（マニラ米軍基地記念館参考）

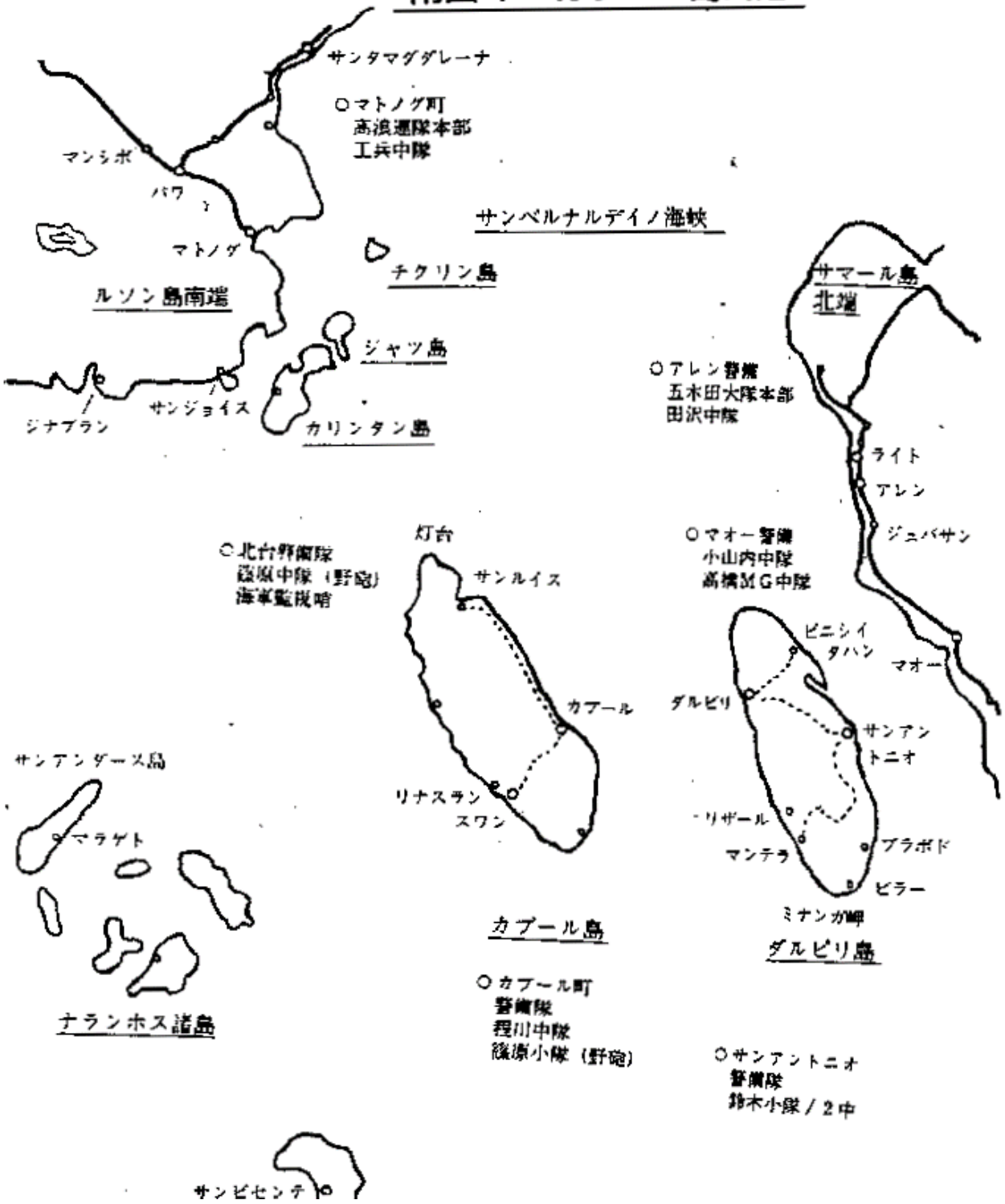


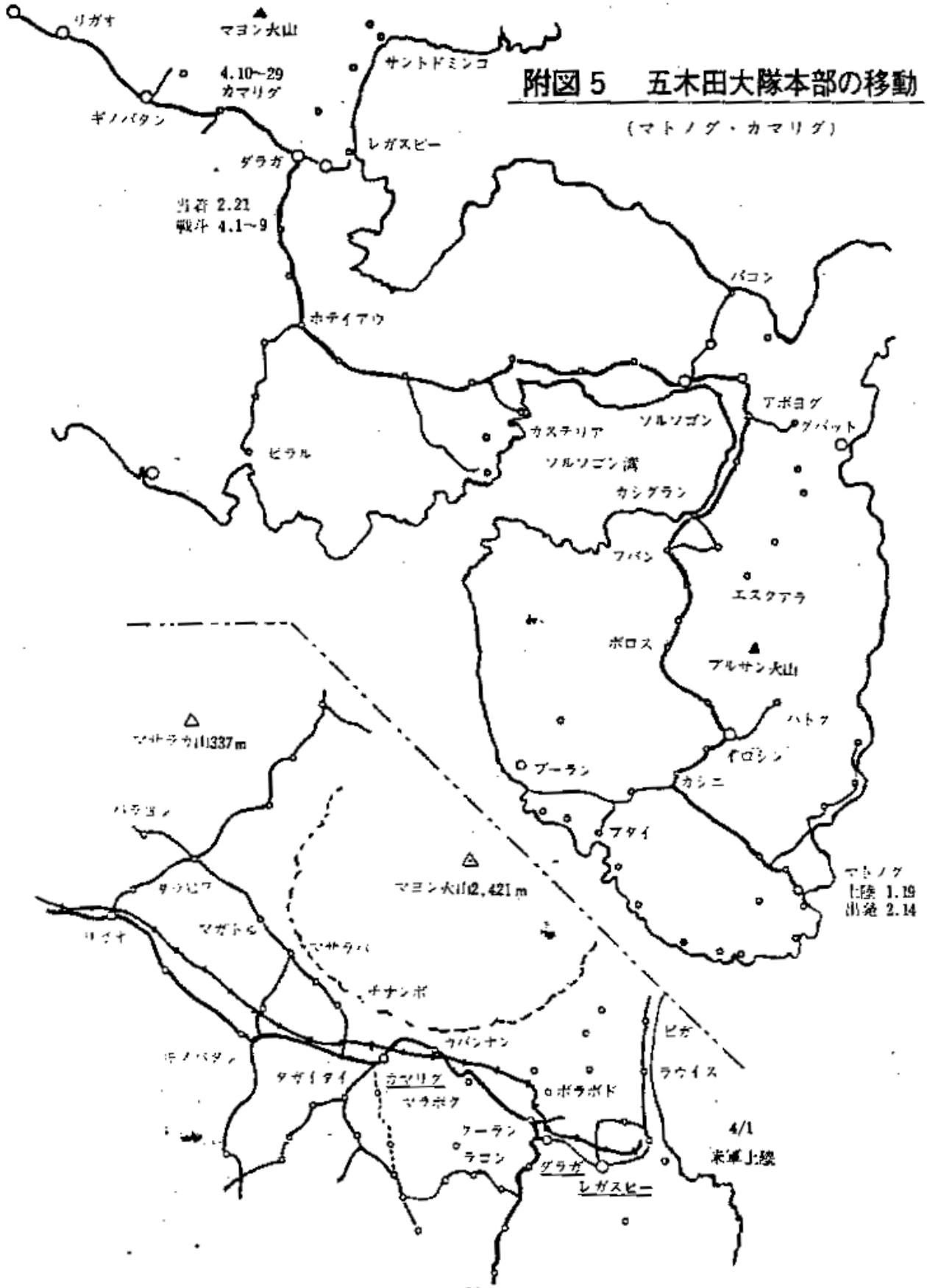
附図３　各大隊の移動状況

（連隊幹部の戦死地）

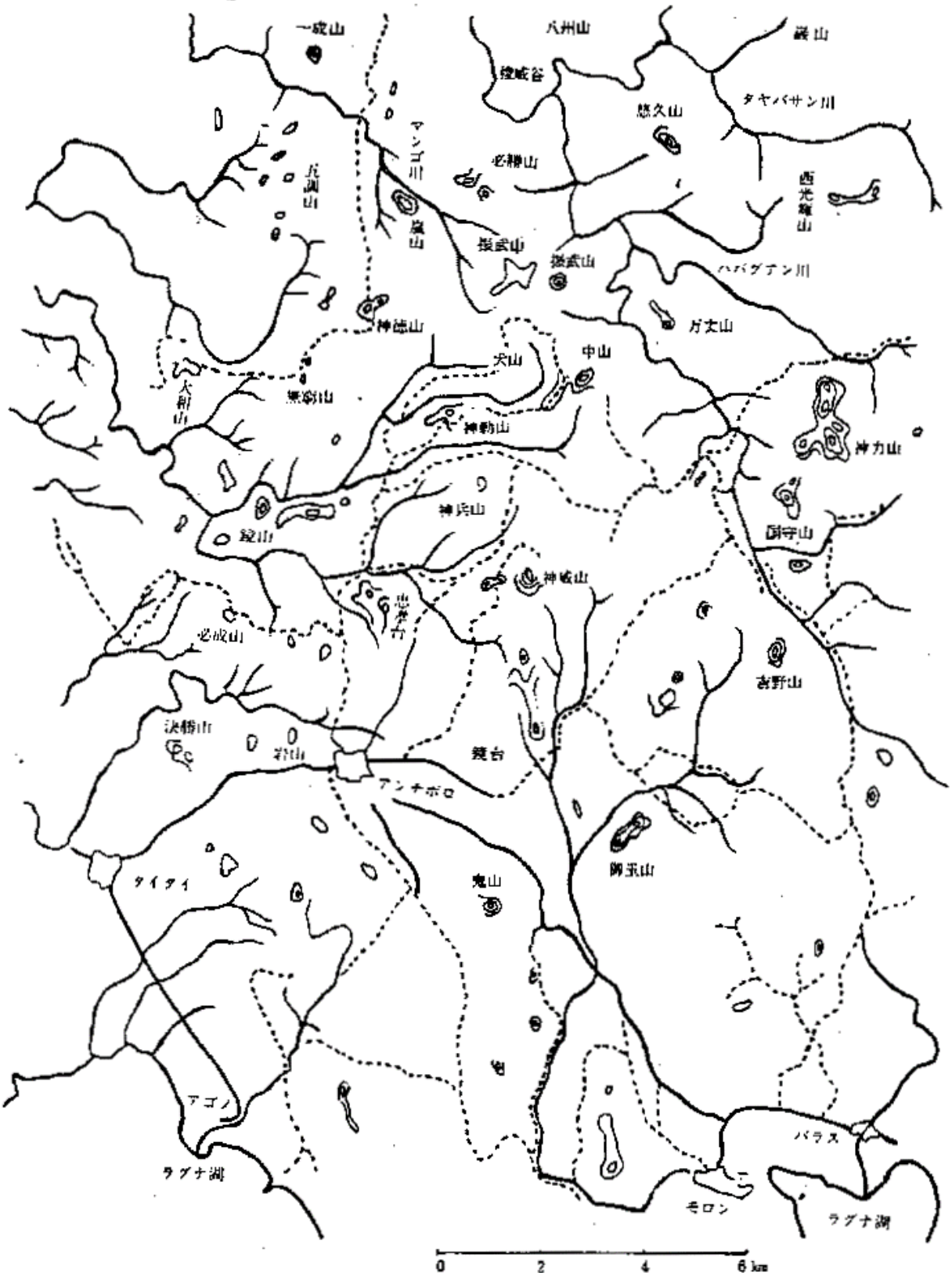


附図４　カブール島周辺

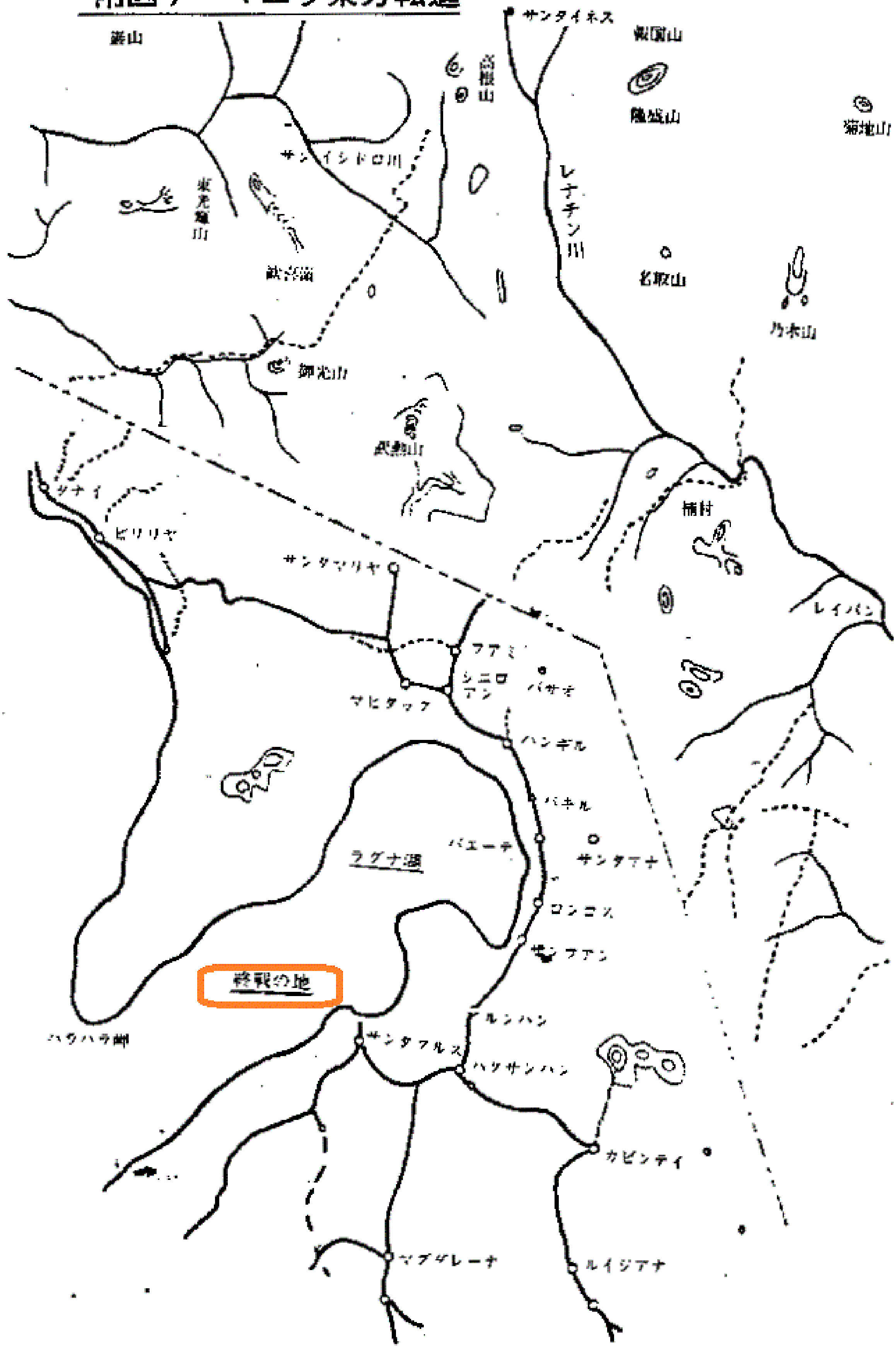

サンタマグダレーナ
○マトノグ町
高浪連隊本部
工兵中隊
マンシボ
パワ
マトノグ
ルソン島南端
チクリン島
サンベルナルデイノ海峡
サマール島
北端
ジャツ島
○アレン警備
五木田大隊本部
田沢中隊
ジナブラン
サンジョイス
カリンタン島
ライト
アレン
ジュバサン
灯台
○北台野砲隊
遠原中隊（野砲）
海軍監視哨
サンルイス
○マオー警備
小山内中隊
高橋MG中隊
ビニシイ
タハン
マオー
カブール
ダルピリ
サンアンダース島
サンアン
トニオ
○マラゲト
リナスラン
スワン
リザール
マンテラ
プラボド
ビラー
ミナンガ岬
カブール島
ダルピリ島
ナランホス諸島
○カブール町
警備隊
程川中隊
後源小隊（野砲）
○サンアントニオ
警備隊
鈴木小隊／2中
サンビセンテ


附図５　五木田大隊本部の移動
（マトノグ・カマリグ）
リガヤ
マヨン火山
4.10~29
カマリグ
ギノバタン
サントドミンコ
レガスピー
ダラガ
当着 2.21
戦斗 4.1~9
パコン
ホテイアウ
アボヨグ
ソルソゴン
グバット
カステリア
ソルソゴン湾
ビラル
カシグラン
フバン
エスクアラ
ボロス
ブルサン火山
ハトラ
イロシン
ブーラン
カシニ
フタイ
マトノグ
上陸 1.19
出発 2.14
マヨン火山2,421m
ナンボ
ウバンナン
ビガ
ラウイス
タガイタイ
カマリグ
マラボク
ボラボド
ラーラン
ラコン
ダラガ
レガスピー
4/1
来軍上陸

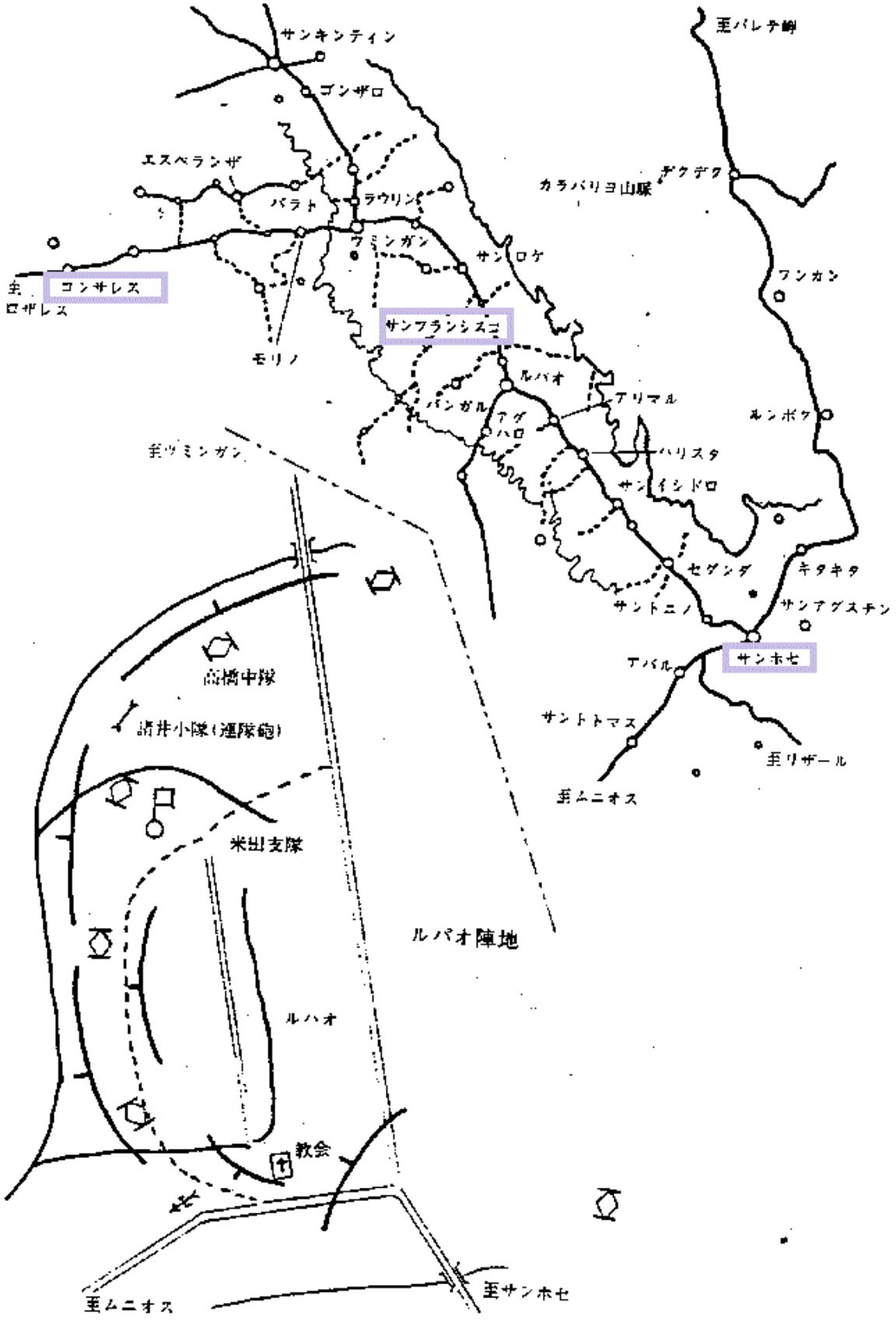
附図6　マニラ東方陣地（主に山の名と川を記入す）

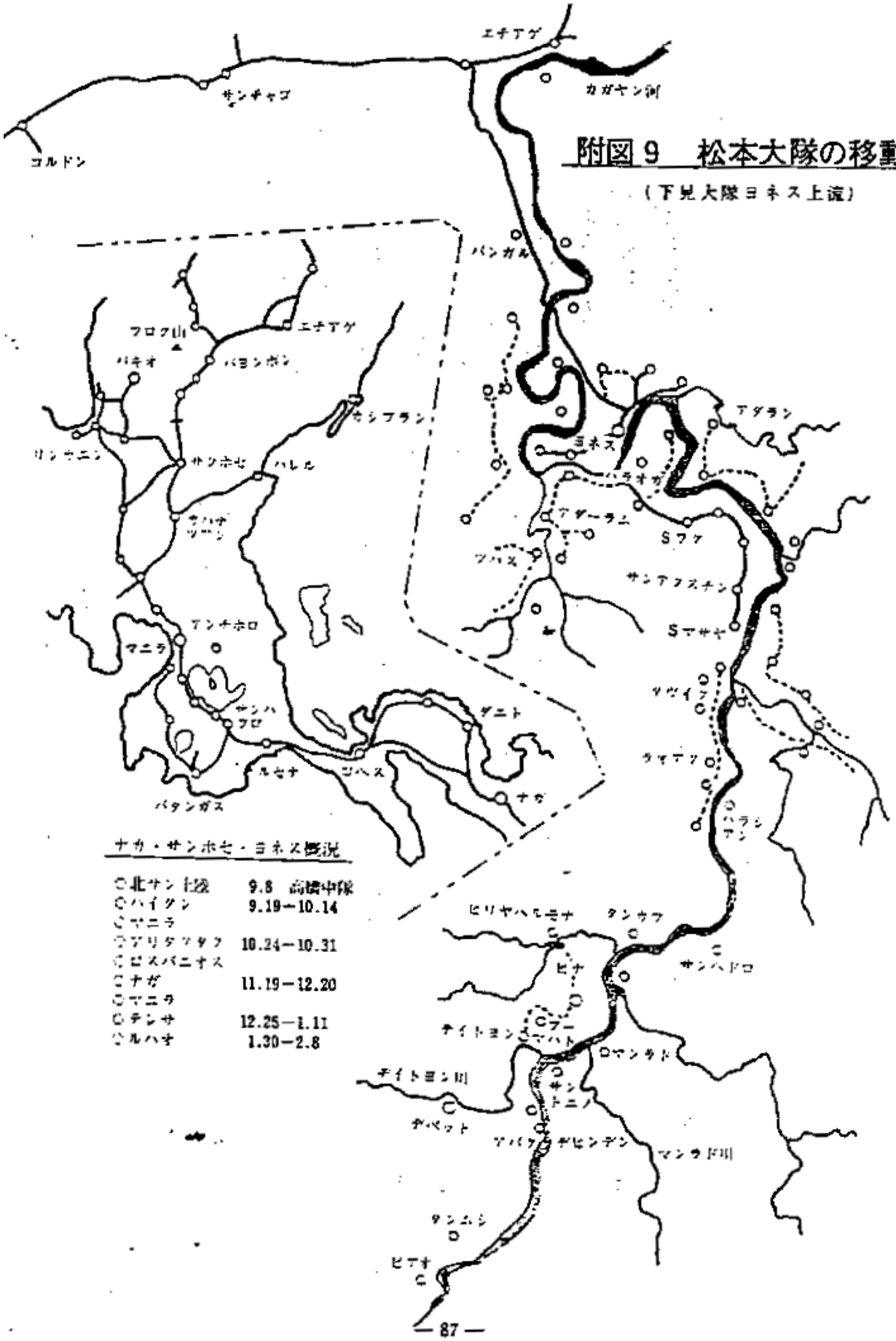


附図７　マニラ東方転進


サンタイネス
高根山
隆盛山
サンイシドロ川
レナチン川
名取山
乃木山
御光山
武勲山
シナイ
ピリリヤ
サンタマリヤ
楠村
レイバン
ファミ
シニロアン
マビタック
ハンギル
パキル
パエーテ
ラグナ湖
サンタアナ
ロンコス
終戦の地
ルンバン
サンタクルス
パグサンハン
カビンティ
マブダレーナ
ルイジアナ

附図-8　松本大隊激戦地


サンキンティン
ゴンザロ
エスペランザ
バラト
ラウリン
ウミンガン
サンロケ
至ロザレス
コンサレス
モリノ
サンフランシスコ
ルバオ
バンガル
アリマル
アダハロ
ルンボク
至ウミンガン
バリスタ
サンイシドロ
セゲンダ
キタキタ
サントニノ
サンアグスチン
サンホセ
アバル
サントトマス
至リザール
至ムニオス
至バレテ峠
カラバリヨ山脈
ダクデク
ワンカン
高橋中隊
清井小隊(連隊砲)
米出支隊
ルバオ陣地
ルバオ
教会
至ムニオス
至サンホセ



附図9　松本大隊の移動

（下見大隊ヨネス上流）

ナカ・サンホセ・ヨネス概況

○北サン主発	9.8	高橋中隊
○ハイタン	9.19—10.14	
○マニラ		
○アリタマタク	10.24—10.31	
○ビスバニオス		
○ナガ	11.19—12.20	
○マニラ		
○テレサ	12.25—1.11	
○ルバオ	1.30—2.8	

あとがき

北満の広野で連日訓練された将兵を以て、新篇成の高浪連隊の精鋭は、比島上陸後各大隊が南国の異境で分断された。戦況は米軍が上陸の兆候により、必死防衛の為騒然となってきたが、彪大な物量を誇る米軍と、地の理を得た武装ゲリラの前に、弾薬乏しく食着を欠き、着しい対決となりました。比島各地に分れた戦況を知るため部隊内外の方々よりご協力を得ましたが、収集活動に限りがあり、開戦以来四十年余という、時の流れには抗すべくもなく、又話老兵の記憶にも限界があり、行動概況を綴るのみです。

今日**全中隊の記録が不明**のまま、不本意ながら未完成の文を発表するのは、慙愧(ざんき）に耐えません。調査開始の遅かりし迂潤さを後悔しつつ、将来の補足訂正の為に、新情報を期待するものです。

貴重な情報提供にご尽力された皆様と共に、此の文が独立混成第二十六連隊の戦線回顧に、僅かでも役立つ事があれば本望です。

比島各地で戦没された、当連隊ご英霊に対し、衷心よつご冥福をお祈りし、同時に平和を念願する次第です。

戻る TOP へ